

平成14年度ヌエック(国立女性教育会館)

主催事業実施報告書



National Women's Education Center



NWEC

研修
交流
調査研究
情報

National Women's Education Center

平成14年度
ヌエック(国立女性教育会館)



NWEC

主催事業実施報告書



開 会「女性のエンパワーメント支援セミナー」



講 義「ヌエックボランティア活動研究会」



子ども体験コーナー「子育てサークル交流支援研究協議会」



ワークショップ「女性学・ジェンダー研究フォーラム」

平成14年度 国立女性教育会館作成資料



国立女性教育会館研究紀要（第6号）

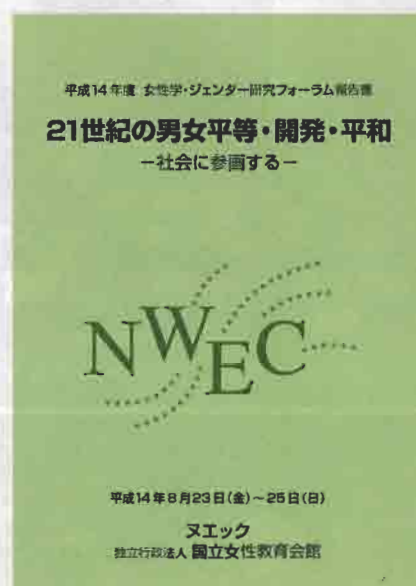
ヌエックの調査研究事業の成果を発表し女性教育の発展に寄与するとともに、投稿論文を募集するなどジェンダーの視点に立った生涯学習に関する研究発表の場を広げることを目的として平成9年度より刊行しております。

第6号のテーマは「男女共同参画社会と学びの創造」で、10本の論文・実践事例研究・調査研究報告とヌエック公開シンポジウムの収録及び4本の書評を掲載し、関係大学、都道府県等教育委員会、女性教育関係施設及び女性団体、その他の関係機関へ配布しました。

女性学・ジェンダー研究フォーラム報告書

平成14年8月23日（金）～25日（日）の間「21世紀の男女平等・開発・平和－社会に参画する」をテーマに開催した「女性学・ジェンダー研究フォーラム」の成果をまとめたもので、「パネルディスカッション 社会参画 わたし流」、全国より応募のあったテーマワークショップ（52件）、自由テーマワークショップ（71件）、そして企画委員によるワークショップ（6件）、国立女性教育会館によるワークショップ（2件）の概要を掲載しています。

本書は、ワークショップ運営者、参加者、都道府県等教育委員会、男女共同参画政策担当部課、女性教育関係施設及び女性団体、その他の関係機関に配布しました。



目 次

研修事業

1 女性関連施設職員のためのセミナー	2
2 教師のための男女平等教育セミナー	11
3 国際女性情報処理研修	18
4 女性のエンパワーメント支援セミナー	23
5 公開講演会	30
6 女性の教育推進セミナー	33
7 男女共同参画学習推進フォーラム	39

交流事業

1 子育てサークル交流支援研究協議会	47
2 女性学・ジェンダー研究フォーラム	59
3 女性情報国際フォーラム	69
4 ヌエック2002・全国交流フェスティバル	76

調査研究事業

1 ジェンダー統計に関する調査研究	84
2 女性のエンパワーメントのための生涯学習拡充方策に関する調査研究	86
3 女性の学習関心と学習行動に関する国際比較調査	88
4 子育てサークル等支援に関する調査研究	90
5 ヌエック（国立女性教育会館）公開シンポジウム	92
6 女性及び家族に関する学習情報の調査研究	97
7 子育てネットワーク等子育て支援団体についての 情報提供の在り方に関する調査研究（平成14年度文部科学省委託事業）	99

情報事業

1 WinetCASSの整備充実	101
2 女性関連施設等情報ネットワーク研究協議会	103
3 女性関連施設職員のためのICT習得サポートプロジェクト	106
4 遠隔情報発信事業	109

社会教育実習生等受入事業

111

ヌエックにおけるボランティアの活動

112

はじめに

独立行政法人国立女性教育会館は、女性教育指導者その他の女性教育関係者に対する研修、女性教育に関する専門的な調査及び研究等を行うことにより、女性教育・家庭教育の振興を図り、男女共同参画社会の形成の促進に資することを目的として、研修、交流、情報、調査研究の4つの機能を軸にさまざまな事業を展開しております。

平成14年度は、『男女共同参画社会の形成をめざした「学び」と「活動」』を総合テーマとして、各種事業を実施してまいりました。

このたび、これらの事業の成果をまとめ「平成14年度ヌエック（国立女性教育会館）主催事業実施報告書」を作成いたしました。調査研究事業等の報告書と併せ、当館への一層の御理解、御支援を得たく、関係の皆様にご活用いただければ幸いです。

平成15年4月

独立行政法人国立女性教育会館
理事長 大野 曜

女性関連施設職員のためのセミナー

1. 趣 旨

公私立女性会館・女性センター等の職員として必要な知識・技術を身につけるための専門的・実践的な研修を通し、施設職員としての資質向上を図るとともに、男女共同参画社会の形成をめざした生涯学習を促進する。

2. 開催期日

「職員コース」平成14年6月4日（火）～7日（金）3泊4日

「館長コース」平成14年6月4日（火）～5日（水）1泊2日

3. 参加者

総数 131名（女性92名、男性39名）

職員コース：女性の生涯学習関連事業を企画・実施している施設等において、就任2年未満（平成14年6月1日現在）の女性教育・家庭教育に関する事業の企画及び実施を担当している職員並びに情報関連業務を担当している職員 102名

館長コース：上記施設の就任2年未満（平成14年6月1日現在）の館長及び相当職 29名
性別・年代別

ア 職員コース

（名）

性別	10代	20代	30代	40代	50代	60代	不明	計
女性	-	11	23	28	13	1	-	76
男性	1	4	10	7	3	-	1	26
合計	1	15	33	35	16	1	1	102

イ 職員コース

（名）

性別	40代	50代	60代	不明	計
女性	1	10	4	1	16
男性	2	8	3	-	13
合計	3	18	7	1	29

都道府県別 【 】内は館長コース

（名）

都道府県	人数	都道府県	人数	都道府県	人数	都道府県	人数
北海道	3	東京都	2【1】	滋賀県	1【1】	徳島県	4【1】
札幌市	(1)	神奈川県	5	京都府	2	香川県	2【1】
青森県	3【1】	川崎市	(2)	京都市	(1)	愛媛県	1
岩手県	1	横浜市	(1)	大阪府	10【3】	高知県	2【1】
宮城県	1【1】	新潟県	3	大阪市	(【2】)	福岡県	4【2】
仙台市	(1【1】)	富山県	-	兵庫県	3【1】	北九州市	-
秋田県	-	石川県	1	神戸市	(1)	福岡市	(1【1】)
山形県	3【1】	福井県	3	奈良県	1【1】	佐賀県	2
福島県	1【1】	山梨県	1【1】	和歌山県	2	長崎県	2
茨城県	1	長野県	1【1】	鳥取県	2	熊本県	2
栃木県	2【1】	岐阜県	1	島根県	1【2】	大分県	-
群馬県	-	静岡県	3【2】	岡山県	1【1】	宮崎県	【1】
埼玉県	3	愛知県	6【1】	広島県	3【1】	鹿児島県	2
千葉県	5	名古屋市	(2【1】)	広島市	(1【1】)	沖縄県	2【1】
千葉市	(2)	三重県	3【1】	山口県	1		

()内はうち数。
職員コースは42都道府県
83施設から102名が参加。
館長コース24都道府県
29施設から29名が参加

施設区分別

(名)

施設区分	職員コース	館長コース
公立1(管理運営者が教育委員会)	20	4
公立2(管理運営者が民法34条法人等)	38	10
私立	-	-
その他(管理運営者が都道府県等)	44	15
合 計	102	29

職務内容別

ア 職員コース

企画専任：36名、企画・情報：16名、企画・情報・相談：9名、企画・相談：5名、
事務専任：20名
情報専任：8名、情報・相談：1名
相談専任：4名

イ 館長コース 館長・センター長等 23名、 副館長・副センター長・理事等 6名

4. プログラムの概要

月 日	時 間	プ ロ グ ラ ム	
		職 員 コ ー ス	館 長 コ ー ス
6 / 4 (火)	13 : 00 ~ 13 : 25	開 会	
	13 : 30 ~ 14 : 45	講演「男女共同参画社会の形成に向けた女性政策の現状と今後の課題」 講師 文部科学省男女共同参画学習課長 有松 育子	
	14 : 45 ~ 16 : 45	館長フォーラム「女性関連施設の管理・運営に関する評価」 講師 財団法人 横浜市女性協会理事長 有馬真喜子 財団法人 主婦会館理事長 中村 紀伊 兵庫県立男女共同参画センター所長 橋本 松子 コーディネーター 独立行政法人 国立女性教育会館理事長 大野 曜	
	17 : 00 ~ 17 : 45	グループ協議 1	グループ協議 1
	18 : 30 ~ 20 : 00	情報交換会	
	20 : 00 ~ 21 : 00	自由交流	
6 / 4 (水)	8 : 30 ~ 8 : 55	国立女性教育会館施設見学(自由見学)	
	9 : 00 ~ 10 : 30	情報提供「女性学・ジェンダー関連科目の現状」「これからのシソーラス」 説明・実習「女性教育情報センターにおける情報提供サービス」 講師 独立行政法人 国立女性教育会館情報課	
	10 : 45 ~ 12 : 00	講義「私の人権、女性の人権 - 女性に対する暴力の現状と女性関連施設の役割 - 」 講師 中央大学教授 広岡 守穂	
	3 : 30 ~ 17 : 00	講義・ワークショップ 「ジェンダーに敏感な視点を身につける」 講師 群馬大学教授 上村千賀子	13 : 00 ~ 14 : 50 協議「女性関連施設の管理・運営に関する評価」 助言者 国立教育政策 研究所生涯学習政策研 究部統括研究官 笹井 宏益 14 : 50 ~ 15 : 00 閉会
	19 : 00 ~ 21 : 00	自由交流	

月 日	時 間	プ ロ グ ラ ム
		職 員 コ ー ス
6 / 7 (木)	9 : 00 ~ 15 : 30	分科会 A 「女性のエンパワーメントをめざした学習プログラムの企画・立案」 講師 お茶の水女子大学教授 三輪 建二 分科会 B 「男性の職域、学校、地域、家庭への参画促進をめざした学習プログラムの企画・立案」 山脇学園短期大学教授 矢口 悦子 分科会 C 「女性関連施設における相談の実際」 講師 フェミニスト・カウンセラー 河野貴代美 分科会 D 「女性情報の活用・発信」 講師 大阪府立女性総合センター企画推進 グループサブコーディネーター 木下みゆき 講師 十文字学園女子大学助教授 / 国立女性教育会館客員研究員 安達 一寿
	16 : 00 ~ 17 : 00	全体会 講師 三輪 建二 矢口 悦子 木下みゆき 安達 一寿 コーディネーター 国立女性教育会館 事業課専門職員 小林千枝子
	19 : 00 ~ 21 : 00	自由交流
	9 : 00 ~ 10 : 40	グループ協議 2 「まとめ・評価」
6 / 8 (金)	11 : 00 ~ 11 : 30	スピークアウト
	11 : 30 ~ 11 : 45	アンケート記入
	11 : 45 ~ 12 : 00	修了証書授与・閉 会

5 . プログラムの内容

講演 「男女共同参画社会の形成に向けた女性施策の現状と今後の課題」

文部科学省生涯学習政策局男女共同参画学習課長

有松 育子

はじめに、国の男女共同参画施策について、内閣府の男女共同参画局が事務局となり関係省庁の取りまとめを行っていること、局には「男女共同参画会議」が置かれ、「専門調査会」がテーマごとに設けられていること、その他「男女共同参画基本計画」「男女共同施策の進捗状況」「DV防止法(配偶者への暴力の防止及び被害者の保護に関する法律)」等についての説明があった。次に、男女共同参画社会の形成に向けた文部科学省の取組と予算についての説明、家庭教育支援として、子育てネットワークの充実と子育てサポーターの拡充について報告があった。

館長フォーラム「女性関連施設の管理・運営に関する評価」

財団法人 横浜市女性協会理事長

有馬真喜子

財団法人 主婦会館理事長

中村 紀伊

兵庫県立男女共同参画センター所長

橋本 松子

独立行政法人 国立女性教育会館理事長

大野 曜

はじめに、施設の歴史的経緯、設置・運営主体等多様である女性関連施設の評価について、公私立それぞれの施設での管理・運営の現状と課題と今後の取組等について意見交換を行った。

まず大野理事長より国立女性教育会館についての説明があり、中村氏からは私立の女性会館の100年の歩みが語られ、公設公営の橋本氏からは事業内容・評価方法等についての具体的な説明があり、公設民営の有馬氏からは女性施設の新たな展開と女性問題の主流化の課題、定性評価と定数評価についての説明がなされた。最後にメッセージとして、



聴き応えたっぷりの館長フォーラム

「みんなで楽しく仕事をする」(中村氏)「裾野を広げること。誰にでも来てもらい、誰にも気づいてもらえる事業をしなければ先に進まない」(橋本氏)「NPOとの連携をどう考えるか。そして、男女共同参画社会の実現は絶対に必要なものであるという信念を持つこと。さらに、戦略的な事業展開・運営を心掛けること」(有馬氏)が寄せられた。

講義「私の人権、女性の人権 - 女性に対する暴力の現状と女性関連施設の役割」

中央大学教授

広岡 守穂

はじめに講師から、女性センターは女性のエンパワーメントのための拠点であり、男女共同参画だからと男性の参加促進を図ることが望まれているがいかなものか、女性がハンディキャップを背負っているから女性センターが必要なのであり、女性のエンパワーメントや女性に対する暴力などがその中心課題となるべきであると考えている、という女性関連施設に関する基本的な考え方が述べられた。次に、第4回世界女性会議後の日本における女性に対する暴力への取組について、基本法との関係、女性の人権侵害としての暴力、暴力の類型、暴力が男女共同参画社会を形成するうえで重要な課題であること、女性センターの相談事業の意義(女性の味方であること)暴力の加害者である男性の意識などについて説明があり、相談・DVの掘り起こし・自助グループの支援という女性関連施設の果たす3つの役割の重要性が指摘された。

協議「女性関連施設の管理・運営に関する評価」(館長コース)

国立教育政策研究所生涯学習政策研究部総括研究官

笹井 宏益

まず、管理・運営に関する課題(予算、施設の役割、参加者の拡大、広報手段など)その課題解決に向けた実践例が積極的に協議された。助言者から、評価には数量的評価(マネジメントの評価)はあるが、決定的なものはない。事業の質を問うものについては、それぞれの設置目的と合わせて考えることが必要である。現在の日本は行政が中心であり、中間団体にシフト・NPOのマネジメント・ミッションの明確さ・自分たちの活動の客観化が必要となってくる。そしてミッションを具体化させるためには、「目的」「職員のコミュニケーション」「職員の貢献意欲をどう引き上げていくか」の3点を客観化することが大切である、という助言があった。

(以下、職員コース)

ワークショップ1「ジェンダーに敏感な視点を身につける」

群馬大学教授

上村千賀子

前半の講義では、「ジェンダー」という言葉の意味を確認し、家庭、学校、社会、ある

いはメディアにおける性別役割分担を洗い出し、ジェンダーに敏感な視点を身につけることの必要性をわかりやすい言葉で説明した。特に、施設職員としては、実際のジェンダーニーズだけでなく、男女共同参画社会の形成に向けた戦略的ジェンダーニーズを把握することの重要性が指摘された。後半は、グループに分かれ各生活領域をジェンダーの視点で見直したときの課題とその解決についてKJ法やロールプレイの学習方法を用い、参加者がワークショップを体験することにより、自分自身のジェンダーバイアス、思い込み等を確認することを試みた。

分科会

A 女性のエンパワーメントをめざした学習プログラムの企画・立案

お茶の水女子大学教授

三輪 建二

参加者は40人（女性35人、男性5人）うち企画担当者は34人であった。

女性たちが現在の自分及び社会の問題状況に気づき、ジェンダーに敏感な視点を持ちながらあらゆる分野に参画するきっかけとなるような学習プログラムとは何かということに焦点を当て、考察を深めた。同時に、かつて自分が関わった学習プログラムを持ち寄り、その中からグループで一つを選び、その改善点を話し合い、学習プログラムを再構成した（プログラムのリライト）。エンパワーメントをめざした学習プログラムとは何か、そうでない学習プログラムとの違いはどこにあるのかについても、併せて考えた。

講師が指導している大学院生もサブファシリテーターとして分科会にかかわり、グループ協議の視点に広がりが見られた。



男女共同参画でプログラムづくり

B 男性の職域、学校、地域、家庭への参画促進をめざした

学習プログラムの企画・立案

山脇学園短期大学教授

矢口 悦子

参加者は29人（女性16人、男性13人）うち企画担当者は20人であった。

分科会は基本的に参加者との共同学習の場となるため、それぞれの問題関心・疑問点を共通理解するために、まず自己紹介ワークショップとして、男性のための講座を企画するに当たっての最大の壁を1語・1文で表現し、似たものを書いた人を探し出し、5人で1グループを作った。次に「壁」の原因をグループで討議し改めて「壁」を確認し、新たな課題を3本ほど立てた。続いて男女別のグループを作り、3本の課題ごとに担当を決め、課題を意識した学習プログラムを企画した。グループ発表することで女性と男性による観点の違いを点検した。さらに女性と男性の混合グループに再編し、再度プログラムを企画した。3回に渡るグループ編成による具体的な作業を通して、男性向け学習プログラムの視点・留意点を学んだ。

C 女性関連施設における相談の実際

フェミニスト・カウンセラー

河野貴代美

参加者は全員女性で8人、うち相談担当者は7人であった。

はじめに、相談実務上の問題点の洗い出しのため自己紹介を行い、「相談員とそれを支える職員では求めるものが違うこと」「女性関連施設が抱える相談とは何かを、みんなが手探りで探っている状態であること」などを確認した。次に資料の「フェミニストカウンセリングの現場」(『上野千鶴子対談集 ラディカルに語れば』河野氏と上野氏の対談)を解説し、女性関連施設におけるコンセプトがあまりにもなさ過ぎることを指摘した。その後、バウムテスト(心理テストの一種)ペアになって自分や相手を誉めるということを行った。この体験を通してジェンダーセンシビリティ(どのくらいジェンダーに敏感な視点を持っているか)を知り、相談員の資質としてジェンダーに敏感な視点をもつことの重要性和困難さを体験した。

D 女性情報の活用・発信

大阪府立女性総合センター(ドーンセンター)企画推進グループ

サブコーディネーター(情報担当)

木下みゆき

十文字学園女子大学助教授/国立女性教育会館客員研究員 安達 一寿

参加者は25人(女性17人、男性8人)うち情報担当者は16名であった。

情報事業に必要な「女性情報」に関する考え方やレファレンスの知識を深めホームページで行う情報発信を体験するというねらいで、まずドーンセンターの木下氏より、豊富な事例を交えて、女性向け情報との相違、女性関連施設の情報事業の特徴、情報と活動の双方向性あるいは循環構造、どのような人が女性情報を求めるか等の講義を受けた。その後グループワークでレファレンス事例をあげ、情報担当者が行うべきサポートの種類に分類した。実習ではパソコンを使ってドーンネット・W I N E T 文献情報データベース等の検索を体験した。

次に安達氏より、女性情報の発信、最近のICTをめぐる動き、HPによる情報発信の特徴について講義を受けた。参加者の所属施設のHPを見て内容・デザイン・更新方法を発表しあい、評価・意見交換を行った。女性関連施設特有のコンテンツを確認したうえでT I C T サイト教材「かんたんホームページ作成法」を使って初歩的なHPの作成を体験した。



「情報は力なり」真剣な分科会風景

6. まとめ

男女共同参画社会の形成をめざした「女性のエンパワーメントの拠点」としての女性関連施設・職員の役割とその重要性の共通理解を図り、国の男女共同参画施策、今日的課題、課題解決の方策として学習プログラムの企画、相談事業、女性情報等について施設職員としての資質向上に必要な専門的・実践的研修を実施した。参加者のアンケートによると、「施設職員として必要な知識・技術が高まった」という者は職員コースで96%、館長コースで79%と、特に職員コースで高い評価を得た。

研修を通してジェンダーに敏感な視点を身につける学習となるよう、プログラムの流れ・学習方法等に配慮した。参加者参加型学習方法を取り入れたことにより、参加者のプログラムへの積極的な参加意識を促し、まとめのレポートの作成を通して「ふりかえり」

から「気づき」の学習の効果を図った。参加者のアンケートでは、「ジェンダーに敏感な視点が養われた」という者は職員コースでは87%の評価を得たが、館長コースでは58%であった。

職員コースでは42都道府県83の施設職員102名、館長コースは全国24都府県29の女性関連施設長29名が参加したことにより、全国的なネットワークづくりが可能となった。参加者のアンケートでは「ネットワークができた」という者は職員コースで94%、館長コースは67%と、特に職員コースで高い評価を得た。

参加者の満足度を性別で見ると、満足度の高い者は女性職員の方に多い(女性95%、男性85%)。また、「男女共同参画社会についての国の施策や基本的な考えについての理解が深まった(女性78%、男性58%)」「事業の企画運営に関する情報が得られた(女性80%、男性67%)」については、男性の方の評価が低い。他の項目については差は見られない。

平成13年度の今後の課題として「各ワークショップ等選択プログラムの成果の共有の仕方についての検討」があげられたので、分科会終了後、1時間の全体会を設け、各講師による課題についての方策・今後の教育・学習のあり方等の提言を行った。参加者の中には複数の分科会に参加できないことを残念に思う者が多いため、この全体会は他の分科会講師の話を聞く機会となり、参加者に好評であった。

平成13年度の今後の課題として「女性関連施設が開催する講座・セミナーへ男性の参加者を促すこと」があげられたが、ジェンダーの視点を身につけ、意識変容を促すための学習プログラムの企画・立案の分科会を、女性対象と男性対象に分けたことによりそれぞれの課題が明確になった。特に男性の意識変革の難しさと重要性が浮き彫りになり、参加者の満足度が高い分科会となった。

7. 今後の課題・展望

参加者の所属をみると、館長コース、職員コースとも都道府県・市区町村の男女共同参画行政が管理・運営する女性センター、男女共同参画センターの職員が多い。男女共同参画行政が行うのは男女共同参画社会実現のための啓蒙であり、男女共同参画社会の形成に向けた女性の主体形成をめざした学習支援を内容とする女性教育とは異なる。実践的な研修プログラムの企画に当たっては、参加者のニーズや課題を取り上げることが必要であり、「女性のエンパワーメントの拠点」としての女性関連施設としてどう男女共同参画行政関係の施設職員のニーズや課題に応えていくか、大きな課題である。

ジェンダーに敏感な視点を身につけ、男女共同参画社会の形成に向けた意識変容の学習プログラムを体験するためには3泊4日の短い研修では難しい。参加者を就任2年未満と絞っているので、仕事に必要な最低限の専門的知識・技術を理解・習得し、女性関連施設・職員の役割、女性教育の今日的課題、ジェンダーの視点がいかされた学習プログラム、有意義な学習方法等をきちんと理解できるよう参加者参加型の学習方法と講義形式のプログラムを効果的に組み合わせることが必要である。

館長コースでは、全国的なネットワークづくりを動機とする参加者が多かったが、参加した結果としてはネットワークができたとする者が少なかった。1泊2日という短い研修期間に、いかに全国的なネットワークづくりの機会を提供するか、また研修内容の充実を図るかが課題である。情報交流会の配置や、その後の自由交流の機会を生かす工夫が必要との意見も出された。

分科会が好評であった理由として、初任者研修とすることで分科会の目的・内容が厳選されたこと、参加体験型学習方法を重視したこと、また研修事業講師とコーディネーターの打合せが十分になされていたことがあげられる。今後もより施設職員のニーズにあった分科会を企画・運営する必要がある。

なお、複数の分科会に参加したいという希望が毎年出されているが、講師を2日間にわたって拘束すること、施設職員として得なければならない知識・技術は多様化しており、分科会のみで2日間費やすこと等が困難である。今後は、分科会等選択プログラムについて、成果の共有等の仕方についての検討が必要である。

近時の女性を取り巻く環境の変化により、相談事業を行う女性施設が増加しており、その内容には、ドメスティック・バイオレンスなど命にかかわるような内容が増えている。そうした相談を受ける女性関連施設相談業務担当職員の専門的な知識・技術の向上を図るためのセミナーを別途実施することも必要である。

8. 参加者の評価

女性会館・女性センター等女性関連施設の職員としての資質・能力の向上を図るため、事業の企画・運営等に必要な知識・技術を身につけることを目的とした。その結果、セミナー終了後の感想で、「女性関連施設職員として必要な知識・技術が高まった」という総合的な感想を問う質問項目に対し、「そう思う」「少しそう思う」の合計は、職員コース96%、館長コース79%である。参加者が期待していたものがセミナーで得られたと捉えることができ、内容は適切だったといえる。

「講座の企画・立案の研修をメインのつもりで参加したが、他に女性関連施設職員として多くの学ぶべきことがあることを思い知った」「自分は情報担当なのでその方面の知識・スキルを向上することを目的に研修に参加したが、研修を受けるうちに、施設職員としてもっと全体的な事業に関心を持ち、理解し、その中で自分の役割を考えることが必要であることを、改めて認識した」等の感想があり、本セミナーで女性関連施設・職員の役割の多様性を改めて意識づけすることができた。

「プログラム作成等、ややもすると担当者任せにしていたが、大勢の人の意見を集約することの重要性を学んだ」「みんなで1つの課題について十分意見を出し合い、プログラムを作り上げていくことの大切さ、たいへんさ、おもしろさを知った」「グループ討議では“言葉の大切さ”を知った。聞く人にとってはまったく視点が変わることがわかり、慎重に言葉を選ばなければいけないと思った」等、実践的学習体験を通して得たものは大きかったようである。

(事業課専門職員 小林千枝子)

アンケート集計結果

アンケート回収率 館長コース24 / 29 = 82.8% 職員コース 102 / 102 = 100.0%

次の項目について、セミナー後の感想にもっとも近いもの

			全国的な女性関連施設職員（館長）とのネットワークができた。	女性の情報の収集・活用に必要な・重要性についての理解が深まった。	事業の企画・運営に関する知識・技術が高まった。（情報が得られた）	女性問題の解決に向けた取組に対する理解が深まった。	ジェンダーに敏感な視点が養われた。	施設・職員の役割に関する理解が深まった。	国の施策や基本的な考えについての理解が深まった。	女性関連施設職員としての必要な知識・技術が高まった。
そう思う	館長コース	回答数	7	7	7	6	11	5	8	3
		%	29.2	29.2	29.2	25.0	45.8	20.8	33.3	12.5
	職員コース	回答数	44	16	51	31	35	45	61	59
		%	43.1	15.7	50.0	30.4	34.3	44.1	59.8	57.8
少しそう思う	館長コース	回答数	12	10	14	8	8	13	11	13
		%	50.0	41.7	58.3	33.3	33.3	54.2	45.8	54.2
	職員コース	回答数	54	58	45	58	54	45	35	37
		%	52.9	56.9	44.1	56.9	52.9	44.1	34.3	36.3
あまりそう思わない	館長コース	回答数	1	4	1	6	1	1	1	4
		%	4.2	16.7	4.2	25.0	4.2	4.2	4.2	16.7
	職員コース	回答数	3	25	5	8	9	8	5	4
		%	2.9	24.5	4.9	7.8	8.8	7.8	4.9	3.9
そう思わない	館長コース	回答数	0	0	0	0	0	0	0	0
		%	—	—	—	—	—	—	—	—
	職員コース	回答数	0	2	0	1	0	0	0	1
		%	—	2.0	—	1.0	—	—	—	1.0
無記入	館長コース	回答数	4	3	2	4	4	5	4	4
		%	16.7	12.5	8.3	16.7	16.7	20.8	16.7	16.7
	職員コース	回答数	1	1	1	4	4	4	1	1
		%	1.0	1.0	1.0	3.9	3.9	3.9	1.0	1.0
期待していた以上だった	館長コース	回答数	5	20.8	36	35.3				
		%								
	職員コース	回答数	16	66.7	58	56.9				
		%								
ほぼ期待していた通りであった	館長コース	回答数	3	12.5	7	6.9				
		%								
	職員コース	回答数	0	—	0	—				
		%								
期待していたほどではなかった	館長コース	回答数	0	—	0	—				
		%								
	職員コース	回答数	0	—	0	—				
		%								
全く期待はずれだった	館長コース	回答数	0	—	0	—				
		%								
	職員コース	回答数	0	—	0	—				
		%								
無記入	館長コース	回答数	0	—	1	1.0				
		%								
	職員コース	回答数	0	—	0	—				
		%								

教師のための男女平等教育セミナー

1.趣 旨

教師の生涯学習の一環として、学校教育における人権尊重、男女平等に関する指導の充実及びジェンダー（社会的・文化的につくられた性）に敏感な視点の定着と深化に資する実践的な研修を通し、男女共同参画社会の形成に資する。

2.主 題

「学校教育の中のジェンダー - 隠れたカリキュラムを考える - 」

3.期 日

平成14年7月30日（火）～8月1日（木） 2泊3日

4.参加者概況

（1）応募者・定員

150名（女性121名、男性29名）（申込者数159名 定員120名）

（2）性別・年代別 (名)

性別	20代	30代	40代	50代	60代	合計
女性	4	14	70	32	1	121
男性	3	10	9	7	0	29
合計	7	24	79	39	1	150

（3）職務内容別 (名)

性別	校長(園長)	教頭(副園長)	教 諭	指導主事等	その他
女性	4	7	97	5	8
男性	3	1	20	5	-
計	7	8	117	10	8

その他の職務 講師・養護教諭他

（4）都道府県別 (名)

都道府県	人数	都道府県	人数	都道府県	人数	都道府県	人数	都道府県	人数
北海道	6	群馬	1	山梨	2	兵庫	6	福岡市	(1)
札幌市	(2)	埼玉	11	岐阜	4	神戸市	(1)	北九州市	(5)
青森	3	千葉	13	静岡	2	奈良	1	長崎	4
岩手	1	千葉市	(4)	愛知	4	島根	1	熊本	2
宮城	7	東京	23	三重	8	岡山	5	大分	3
仙台市	(1)	神奈川	1	滋賀	2	山口	3	()内は 道府県の内数 34都道府県・ 7政令指定都市 合計150名	
秋田	1	新潟	5	京都	4	徳島	3		
福島	5	富山	2	京都市	(1)	高知	2		
栃木	1	石川	3	大阪	3	福岡	8		

5. プログラムの概要

月 日	時 間	プ ロ グ ラ ム
7 / 30 (火)	10 : 30 ~ 10 : 55	開会
	11 : 00 ~ 12 : 00	講義「男女共同参画社会の実現に向けて」 文部科学省生涯学習政策局男女共同参画学習課長
	13 : 30 ~ 17 : 00	ワークショップ「ジェンダーバイアスとは・・・」 A「映像をジェンダーの視点で考える」 武蔵大学教授 B「言葉をジェンダーの視点で考える」 文教大学教授 C「スポーツをジェンダーの視点で考える」 京都教育大学教授 D「音楽をジェンダーの視点で考える」 国立音楽大学教授
	17 : 05 ~ 17 : 40	施設案内（自由参加）
	18 : 30 ~ 20 : 00	情報交換会
7 / 31 (火)	9 : 00 ~ 12 : 00	講義と討議「隠れたカリキュラムを考える」 東京学芸大学教授 / 国立女性教育会館客員研究員
	13 : 30 ~ 17 : 00	分科会「男女平等教育推進のための課題及び方策研究」 幼・小・中・高等学校教員コース A「総合的な学習」 川崎市立看護短期大学講師 / 神奈川大学講師 栃木市立第五小学校教諭 大阪府高槻市立中学校教諭 特定非営利活動法人シーン理事長 B「性に関する指導」 (社)日本家族計画協会クリニック婦長 大分市立植田東中学校教諭 川崎市男女共同参画センター 管理職・指導主事コース C「学校経営をジェンダーに敏感な視点で考える」 筑波大学教授 岡山市立箕島小学校校長 (株)ニッセイ基礎研究所主任研究員 アドバンス・コース D「男女平等教育実践中の参加者による研究協議」 静岡大学助教授
	19 : 00 ~ 20 : 30	自由交流（自由参加） 自由プログラム 会館提供プログラム「ノルウェーの男女平等教育」 - 本当に豊かな社会とは？ - ノルウェーの「男女平等の本」を出版する会代表
8 / 1 (火)	9 : 00 ~ 11 : 50	全体会「これからの男女平等教育を考える」 東京学芸大学教授 / 国立女性教育会館客員研究員
	11 : 50 ~ 12 : 00	閉会

6. プログラムの内容

(1) 講義「男女共同参画社会の実現に向けて」

講 師 文部科学省生涯学習政策局男女共同参画学習課長 有松 育子

はじめに、男女共同参画社会について、国・文部科学省としての取り組みについて説明があった。続いて、職場としての学校を男女共同参画の視点で見直すことの重要性と必要性等が挙げられた。その後、資料をもとに国内外の動向についての報告があった。最近の取組として、女性国家公務員の登用・採用拡大計画、ドメスティック・バイオレンス、児童虐待の問題があるが、各都道府県に男女共同参画の本部の設置や、DV防止法を機能させるための手だてと、男女共同参画社会基本法についての説明及び文部科学省の家庭教育支援の資料の紹介があった。最後に、学校のすべての教育活動を通じて、男女共同参画社会の実現に向けて努力してほしいとまとめた。



講義をする有松氏

(2) ワークショップ「ジェンダーバイアスとは・・・」

A「映像をジェンダーの視点で考える」 参加者45名(女38名、男7名)

講 師 武蔵大学教授 国広 陽子

はじめにジェンダーという言葉についての説明があり、続いて資料を見てのグループでの話し合いを行ない、ステレオタイプの絵の認識と、女性だけでなく、男性もジェンダーを学校の中で感じているとの報告があった。その後、ビデオ視聴を行い、メディアをジェンダーの視点で分析するグループワークを3つ行い、それぞれビデオ視聴・グループ討議・発表・講師からのコメントとすすめられた。最後にメディア・リテラシーとジェンダーの視点について、批判することだけでなく、提案を発信することの大切さと多様な運動の広がり大切さが強調された。まとめとして、対象に合う材料の準備、話し合いによる広がり深まり、多面的に物事を見て考える力、メディアを好きになってほしいとの話があった。

B「言葉をジェンダーの視点で考える」 参加者65名(女52名、男13名)

講 師 文教大学教授 遠藤 織枝

はじめに『中国雲南省摩梭の母系社会』の紹介があり、内からではなく外から世の中をみる視点の重要性について説明があった。続いて資料をもとに、話し言葉と書き言葉についての説明があった。そして辞書を使ってジェンダー・バイアスのかかっているものを選ぶというグループワークを行い、ジェンダーの視点でみることの共通理解を図った。講師からは、版による違い、編者の偏り(男性のみ) 編者の意識による表現等には問題が多く、それを見ている子どもへの影響を強く指摘した。また、新しい言葉について、話し言葉はすぐに流れて広がりやすい、一定の押えは必要であるが若い人の感覚の鋭さは取り入れたいとまとめた。

C「スポーツをジェンダーの視点で考える」 参加者28名（女21名、7名）

講 師 京都教育大学教授

井谷 恵子

グループの中を、どんなカテゴリーで分けることができるかを協議し、男と女に2分することにとらわれない分け方を参加者が意識することから始まった。続いてスポーツを例に、参加者がジェンダーメッセージに気づくグループワークを行い、ジェンダーへの理解を深めた。次にジェンダーの視点から見るオリンピック種目・スポーツとメディアの関係・子どもたちとスポーツ・学校体育とジェンダーについて、資料をもとに講義があり、さらに現代のスポーツ離れについても紹介された。3回目のグループワークでは、自分がとらえる体育教師と国語教師の違いを挙げ、引き続き講師によるまとめが行われた。最後に体育の中に存在しているジェンダーをきちんと理解し、競争しないスポーツと多様なスポーツの在り方を求めることの必要性を強調した。

D「音楽をジェンダーの視点で考える」 参加者12名（女10名、男2名）

講 師 国立音楽大学教授

小林 緑

はじめに、参加者それぞれが持つ「音楽とジェンダー」についての考えと自己紹介を行い、その後、講師によるクラシック界の際立つ男性がさまざまな視点で紹介された。さらに、各学校で使われている音楽の教科書や指導事例・音楽室の環境からもさまざまな問題点があることを確認し合った。また、『ベサメ・ムーチョ』『乙女の祈り』『アロハ・オエ』のように、あまりにポピュラーすぎるために、作曲家を意識しない曲の紹介や、作曲家の性による違いのクイズを取り入れながら、女性の生命力を発揮することの大切さを強調した。最後に、レベッカ・クラークとアンリエット・ルニエ等の曲を視聴し、今後の音楽会や音楽指導への方向性についての示唆があった。

(3) 講義と討議「隠れたカリキュラムを考える」

講 師 東京学芸大学教授 / 国立女性教育会館客員研究員 村松 泰子

日本社会の男女共同参画の現状と学校教育の問題点について、ジェンダー・エンパワーメント指数や男女共同参画白書、書籍物を紹介しながら講義があった。また間違った理解やバッシングの状況にも触れ、教師がまずしっかりとジェンダーや男女平等教育の本質を押さえておく必要性を強調した。次に資料を使って、「学校教育の中のジェンダー」について最新のデータをもとに、何が大きく問題になるのかを整理して説明され、教科の構造（男子中心と理科とジェンダーの研究の遅れの問題等）を挙げた。この後、マトリックスを用い、ジェンダーが作用する具体的な事例を記入するというグループワークを行い、生まれたときから男女を分けている社会に住んでいる状況ではあるが、色々な人が増え、男女の境が難しくなっている現代では性を男女の2つに分けることも時代に合っていないのではないかと結んだ。

(4) 分科会「男女平等教育推進のための課題及び方策研究」

幼・小・中・高等学校教員コース

A「総合的な学習」 参加者67名（女54名、男13名）

講 師 川崎市立看護短期大学講師 / 神奈川大学講師

岸澤 初美

事例提供者 栃木市立第五小学校教諭

杉野 陽子

事例提供者 大阪府高槻市立中学校教諭

森 陽子

事例提供者 特定非営利活動法人シーン理事長

遠矢家永子

杉野氏は、小学校教諭の立場から、児童の実態に合わせた男女平等教育の視点から見たカリキュラム開発について、次に森氏は、中学校教諭（家庭）の立場から、ジェンダーの視点での作品作りの報告と、総合的な学習への発展の可能性について、さらに、NPOの遠矢氏からは、NPOとの連携の可能性を含む出前講座の例や事業の内容等についての事例提供があった。その後、講師の岸澤氏より、参加者事例報告集へのコメント、校種別授業の可能性の示唆、ウェビングの手法を用いての各グループごとのイメージの共有化を図った。最後に、ジェンダー教育の問題点として指摘されている事柄についての紹介をまとめとした。

B「性に関する指導」 参加者52名（女45名、男7名）

講 師 （社）日本家族計画協会クリニック婦長

清水 敬子

事例提供者 大分市立植田東中学校教諭

足立 直樹

事例提供者 川崎市男女共同参画センター

太田 恭子

講師の清水氏より、「思春期の性に関する相談の現状」についての講義があり、その後、性に関する指導における課題・問題点についてグループ討議を行った。次に、足立氏より中学生の実態や悩み、質問等を軸に、太田氏より高校生向け性教育の出前授業について等の事例提供があった。さらに、性に関する指導における男女平等教育を進める上での留意点について、グループ討議をし、その結果を発表することによりさまざまな意見を交換した。最後に講師から、全国にある婦人科のネットワークが紹介され、性教育をすすめる現場の手助けとなり得る情報を得た。

管理職・指導主事コース

C「学校経営をジェンダーに敏感な視点で考える」 参加者24名（女15名、男9名）

講 師 筑波大学教授

田中 統治

事例提供者 岡山市立箕島小学校長

真邊 和美

事例提供者（株）ニッセイ基礎研究所主任研究員

土堤内昭雄

はじめに、真邊氏より、小学校長としての「学校経営をジェンダーに敏感な視点で考える」実践報告で、勤務校・勤務地の実態、教育課程での取組み、校長会での働きかけ等日々実践している手法を具体的に示した。次に、土堤内氏より、学校の中のジェンダーバイアスを外部（父親・PTA会長・企業人等）からの視点で見た報告がなされた。そして2つの事例を受けて、グループでの協議後、田中氏より、「教育改革動向とジェンダーに敏感な学校経営の試み」についての講義があり、ジェンダーの視点を学校教育の質向上のために用いる必要性が、さまざまな事例やデータを基づいて報告された。

アドバンス・コース

D「男女平等教育実践中の参加者による研究協議」 参加者6名（女6名、男0名）

講 師 静岡大学助教授

笹原 恵

このコースは、すでに実践に取り組んでいる人が事例をもちより、相互に検討する試みとして、セミナー再参加を認め、参加者全員が事例提供者として参加した。

はじめに、分科会の進め方を確認し、参加者全員の自己紹介を行い、次に男女平等教育を実践していく上での視点・留意点を参加者の3つの事例を基に討議を進めることと

した。方法として、参加者はそれぞれの事例を聞きながら、「視点」「議論したいこと」「議論の成果」「疑問点」を付箋にメモをしながら行った。次に付箋を模造紙に貼る作業を行いながら、東浦氏の理科（化学）好きに男女差があるのかという研究報告と、村松氏の学校における実態報告も加味し、協議を進め、協議での意見の共有とエンパワーメントが教師一人一人の力になると結んだ。

（５）自由交流（自由参加）

会館提供プログラム

「ノルウェーの男女平等教育」 - 本当に豊かな社会とは？ - （参加者約100名）

講 師 ノルウェーの「男女平等の本」を出版する会 荒川ユリ子

福祉と男女平等の先進国であるノルウェーについて説明があった。ノルウェーは男女平等社会としての歴史は浅く、1978年に成立した「男女平等法」以降の急激な変化であり、現在の日本にとって、良き手本となり得ると紹介された。次にノルウェーの『男女平等の本』の主な場面を紹介しながら、本の実践的な活用方法や発展性への示唆があった。続いて、ノルウェー教育省発行の「2001年・男女平等教育のガイドライン」と、「どの教科にもジェンダーの視点を」「支配のテクニック」と「隠れたカリキュラム」についての説明があった。

（６）全体会「これからの男女平等教育を考える」

コーディネーター 東京学芸大学教授／国立女性教育会館客員研究員 村松 泰子

はじめに、前日の各分科会の様子を、各分科会参加者の代表が報告を行い、質疑応答を行った。次に、前日の村松氏の講義「隠れたカリキュラムを考える」の質疑応答の時間をとった後、男女平等教育をどう進めていくかの協議を行なった。最後にまとめとして分科会講師の岸澤氏からは、選択肢の中から自分で選び、周りも認める経験を増やしていくことが男女平等教育を進めていくということと、アドバンス・コース充実への期待があった。村松氏からは的確な情報収集と選択の必要性和学習者のネットワーク作りの必要性が強調された。

まとめ

国の施策や基本的な考え方に関する講義、学校教育における問題点等の講義、ジェンダーに敏感な視点を身につけるためのワークショップ、課題・方策研究を行うための分科会を行い、男女平等教育の基礎的な知識や技能を身につけるための専門的・実践的な研修の機会を提供することができ、参加者の満足度の高いセミナーとなっている。しかし6年目を迎え、複数回参加を希望する参加者へのスキルアップのための講座や、20～30歳代の若い教員・男性・管理職・指導主事の参加の伸び悩み、参加者の年齢の偏り等課題も多く残している。

7. 今後の課題・展望

- （１）今年度は昨年度の要望を踏まえ、学校関係者以外の講師も加えたが、外部との連携の可能性や課題を議論する時間の確保等が必要である。
- （２）本セミナーの実施の情報や趣旨が、全国の各学校まできちんと流れていない状況の調査と改善を図る。

(3) フォローアップアンケートについては、結果を今後のプログラムに反映させることができる内容を検討することが必要である。

8. 参加者の評価

セミナー後の総合的な感想を問う質問項目に対し、「男女平等教育についての基本的な知識が高まった」「男女平等教育を推進するための学校・教員などの役割がわかった」「ジェンダーに敏感な視点が養われた」が特に高い評価になっている。しかし、全国の教員とのネットワーク作りでは満足度は低く、ネットワークの必要性の理解不足等もあり、改善充実への示唆を含む。また、個々のプログラムや全体の研修において高い満足度を示しながら、さらなる向上・充実を望む声や今後への期待、継続してのセミナー参加を望む声が多い。

(事業課専門職員 奥村 明子)

アンケート集計結果

参加者数 150名(女性121名、男性29名) アンケート集計数 130 回収率86.7%

次の項目について、セミナー後の感想にもっとも近いもの

		基礎的な知識が身に付けられた。	国の施策や基本的な考え方がわかった。	男女平等教育を推進するための学校・教員などの役割がわかった。	ジェンダーに敏感な視点が養われた。	男女平等教育を校内(外)に広める手がかりが得られた。	男女平等教育の授業をするための手がかりが得られた。	男女平等教育の実践事例の検討ができた。	全国の教員とネットワークが作れた。		参加した全体の感想はいかがでしたか？
そう思う	回答数	91	49	65	73	60	62	32	21	以上期待していた りだっ た	53
	%	70.0	37.7	50.0	56.2	46.2	47.7	24.6	16.2		40.8
少しそう思う	回答数	32	60	55	46	52	51	66	55	りだっ た	62
	%	24.6	46.2	42.3	35.4	40.0	39.2	50.8	42.3		47.7
あまりそう 思わない	回答数	4	15	6	5	10	9	21	36	なかつ た	14
	%	3.1	11.5	4.6	3.8	7.7	6.9	16.2	27.7		10.8
そう思わない	回答数	0	1	0	0	0	3	2	10	ずれ だ た	0
	%	—	0.8	—	—	—	2.3	1.5	7.7		—
無回答	回答数	3	5	4	6	8	5	9	8	無回答	1
	%	2.3	3.8	3.1	4.6	6.1	3.9	6.9	6.1		0.7
合計	回答数	130	130	130	130	130	130	130	130	合計	130
	%	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0		100.0

国際女性情報処理研修

1. 趣 旨

男女共同参画社会の実現に向けて、情報化の進展への対応が遅れている途上国の女性のエンパワーメントを支援するため、アジア太平洋地域の行政担当者、NGOの指導者を対象とした女性情報に関する情報処理研修を行う。

本研修を通して、理論と技術のみでなく、研修の実施方法を習得し、それぞれの立場における女性情報専門家を育成すると共に、日本を含む国際的なネットワークの形成を目的とする。

2. 主 催

文部科学省、独立行政法人国立女性教育会館

3. 期 日

平成14年10月3日（木）～14日（月） 12日間

4. 参加者 28名、20か国

（1）応募者数・定員

応募者数：85名、25か国

（2）国別

国名	人数	国名	人数	国名	人数
ブータン	1	マレーシア	1	パラウ	1
カンボジア	1	マーシャル諸島	1	スリランカ	2
中国	1	ミクロネシア	1	タイ	2
インド	2	モンゴル	2	バヌアツ	1
インドネシア	1	ネパール	2	ベトナム	2
イラン	1	パキスタン	1	ミャンマー	1
キリバス	2	フィリピン	2		

（3）年代別

20代：4名（14％）30代：8名（29％）40代：13名（46％）50代：3名（11％）

（4）所属別

行政機関：9名（32％）NGO：11名（39％）女性学研究所等：8名（29％）



研修生たち



研修の様子

5. プログラムの概要

月日	時間	研修内容
10 / 3(木)		来日
10 / 4(金)	AM 14 : 30 ~ 15 : 00 15 : 15 ~ 16 : 30 18 : 00 ~ 19 : 30	NWECへの移動 開講式 プログラムオリエンテーション 歓迎式
10 / 5(土)	10 : 00 ~ 12 : 00 13 : 30 ~ 17 : 00	講義：女性の課題と情報 東洋英和女学院大学教授 藤村久美子 情報処理演習（PowerPoint）
10 / 6(日)		自由
10 / 7(月)	10 : 00 ~ 12 : 00 13 : 30 ~ 17 : 00	講義：女性情報とは何か 越谷市男女共同参画支援センター所長 青木玲子 情報処理演習（Internet、Excel）
10 / 8(火)	9 : 00 ~ 17 : 00	情報処理演習（Excel）
10 / 9(水)	9 : 00 ~ 17 : 00	情報処理演習（Word）
10 / 10(木)	9 : 00 ~ 17 : 00	情報処理演習（Word） ワークショップ準備
10 / 11(金)	10 : 00 ~ 16 : 00	ワークショップ 東洋英和女学院大学教授 藤村久美子 閉講式
10 / 12(土)		女性情報国際フォーラム
10 / 13(日)	AM PM	同上
10 / 14(月)		離日

6. プログラムの内容

本研修は「情報処理研修」であるが、情報の活用がいかにより女性の地位向上に役立つかを認識してもらうことも大きな目的である。そのため、研修内容を下記のような流れとした。

講義「女性の課題と情報」：女性の課題をとらえる視点を学ぶ

講義「女性情報とは何か」：女性の課題を解決するために必要な情報とは何か、そうした情報はどのように提供されているか

情報処理演習：女性情報を収集提供するための情報処理技術を学ぶ

ワークショップ：学んだ技術を活かし、自分が考える女性の課題及びその解決策について発表、討議する

以下で各項目について概要を紹介する。

(1) 講義

「女性の課題と情報」

東洋英和女学院大学教授の藤村久美子氏が講師を務め、研修生同士の討議を中心に行われた。開発途上国の女性の現状を描いた20分程のビデオを見てもらい、それをもとに、

自国の女性の現状との比較、ジェンダー問題に対するバランスのとれた見方、ビデオに登場する女性のタイプ等について、グループごとに討議を行い、代表者がその結果を発表した。ジェンダーの視点を持つことにより、さまざまな課題を違った視点で見ることが重要であるとまとめられた。

「女性情報とは何か」

越谷市男女共同参画支援センター所長青木玲子氏が情報は力であり、女性情報は「何らかの行動につながっていくもの」ととらえた。女性情報の基盤的な概念と提供媒体の現状と課題を明らかにすると共に、ICT（Information and Communication Technology）と女性、女性情報ネットワーク等の今後の課題についても言及した。



藤村氏の講義



青木氏の講義

（２）情報処理演習

演習内容

研修生には募集の段階でコンピュータを使った情報処理技術の経験・業務（使用しているソフト名とバージョン：OS、ワープロ、表計算、E-mail、インターネット検索、Web Page作成、データベース等）を尋ねており、レベルの差はあるものの、研修生の経験にあわせた演習内容を企画した。Wordを使えない研修生はいなかったため、Wordの演習の際には画像の取込み、Wordを使っのWebPageの作成等を中心とした。ほとんどの研修生がExcelも利用経験ありとしていたが、Excelはどのようなことができるソフトなのかを示し、さらに高度な計算式やグラフ化の機能を使えるような内容とした。



情報処理演習



ワークショップ

テキスト

インストラクターが事前に担当部分のテキストを（Word、Excel、PowerPoint、Internet）執筆し、研修生に配布した。テキストは演習で使用する部分のみでなく、後でテキストとして利用できるような網羅的な内容とした。

（３）ワークショップ

研修のまとめとして、ワークショップを行った。コーディネーターは藤村氏が務めた。午前中の2時間はA～Eの5つのグループに分かれ、各自作成したプレゼンテーション

資料に基づき、テーマ発表、討議を行った。午後からのセッションにおいて、グループの代表者を1名、グループ内の討論の内容・経緯を発表する人を1名決定した。

午後には各グループ20分で発表が行われ、それぞれの間に短い質疑応答の時間が持たれた。最後には藤村氏、青木氏、インストラクター、当館理事長等からのコメント及びまとめがあった。

研修生のプレゼンテーション内容

国名	グループ	タイトル
インド	A	女性の政治参加
ネパール	A	ネパールの女性の地位
パキスタン	A	所属組織の紹介
パラオ	A	パラオ女性の状況と行動計画について
スリランカ	A	DV
タイ	A	女性と子どもの人身売買
ブータン	B	ブータン女性協会について、HIVの世界、国・地域レベルの対策
マレーシア	B	イスラム女性の状況
マーシャル諸島	B	経済状況
ネパール	B	結婚と女性のエンパワーメント、若い年齢での結婚
フィリピン	B	家族の紹介、自分の仕事の紹介
スリランカ	B	情報の活用と課題
イラン	C	イスラム女性研究所
モンゴル	C	研修の成果
バヌアツ	C	政治参加、女性の地位向上
ベトナム	C	女性情報の行動計画
ミャンマー	C	女性の健康、ミャンマー女性情報
カンボジア	D	カンボジア女性の状況、女性への暴力
インド	D	情報の利用
キリバス	D	教育
ミクロネシア	D	女性と子どもの人身売買
モンゴル	D	女性の地位と暴力
タイ	D	タイにおける女性への暴力
中国	E	リプロダクティブヘルス
インドネシア	E	女性メディアオンライン
キリバス	E	幼児教育
フィリピン	E	女性研修センターについて
ベトナム	E	ベトナムにおける女性情報

(5) 女性情報国際フォーラムへの参加

研修生には事前に希望分科会のアンケートをとり、人数のバランスを考慮して、3つ



討議への参加



フォーラム参加者との交流

の分科会に分けた。研修生は一般参加者と一緒にフォーラムのすべてのプログラムに参加し、積極的に討議に参加した。

7. 今後の課題・展望

(1) 日本人研修生の参加

今年度はキャンセル等により、日本人研修生が0名となったが、日本人研修生は研修生であると同時に、日本の現状を伝える代表者でもあるので、来年度はぜひ数名の研修生の参加を確保したい。そのためには現在の応募先の見直しも考えなくてはならないであろう。

(2) 研修内容

来年度は女性情報国際フォーラムが本研修の直前に実施される予定であり、研修日程もそれに伴い、変更が必要となる。各国研修生の情報処理技術のレベルは年々あがっており、今後は技術研修よりも「情報がいかに女性のエンパワーメントに役立つか」(情報管理、マネージメント等)に比重を置いた研修を検討することが必要である。

(3) 本研修成果の活用

研修生レポート

本研修の参加に際して、研修生には「現在の業務及び活動内容」「自国における女性情報提供システムの現状と課題」についてのレポートの提出を課している。これらのレポートはアジア太平洋地域の女性情報の現状と課題を伝える貴重な資料であり、研修後もその有効な活用の方法を考えていく必要がある。

TICTサイト

当館では「女性職員のためのICTサポートプロジェクト」として、ICTの習得を目的とした学習システム(TICT)をWeb上で公開中である。その英語版サイトにおいて、本研修の概要及び使用テキストの掲載及び上記研修生レポートの紹介等を行い、内容の充実を図ると共に、このサイトを通じて国際的ネットワーク形成を目指したい。

8. 参加者の評価

(1) 研修全体

	人数	割合(%)
とても良かった	18	64
まあまあ良かった	9	32
あまり良くなかった	1	4
良くなかった	0	—
無回答	0	—
合計	28	100.0

(2) コースの満足度

	人数	割合(%)
とても良かった	16	56
まあまあ良かった	10	36
あまり良くなかった	1	4
良くなかった	0	—
無回答	1	4
合計	28	100.0

(研究国際室国際企画係長 青木 一恵)

女性のエンパワーメント支援セミナー

1. 趣 旨

男女共同参画社会の形成に向け、女性のエンパワーメントを支援するため、女性教育・家庭教育に関する事業の企画・立案、及び女性教育・家庭教育に関する団体・グループやNPO活動の推進に必要な専門的知識・技術の修得に向けた実践的な研修を行う。

2. 開催期日

平成15年1月28日（火）～1月31日（金） 3泊4日

3. 参加者概況

（1）応募者数・定員 応募者数 144名（定員100名）

行政担当者・女性教育・家庭教育に関する行政関係事業の企画・運営に携わっている者

応募者 92名（参加者 83名）

女性教育・家庭教育に関する団体・グループ、NPO等リーダー

応募者 52名（参加者 46名）

（2）性別・年代別・所属別 （名）

	20代	30代	40代	50代	60代	合計
女性	12	12	36	32	17	109
男性	2	8	6	2	2	20
合計	14	20	42	34	19	129



3日目「全体会」の様子

（3）都道府県別 （名）

都道府県	人数	都道府県	人数	都道府県	人数	都道府県	人数	都道府県	人数
北海道	5	埼玉県	6	長野県	4	神戸市	(-)	高知県	1
札幌市	(1)	千葉県	5	岐阜県	1	奈良県	1	福岡県	14
青森県	6	千葉市	(1)	静岡県	6	和歌山県	2	北九州市	(10)
岩手県	4	東京都	4	愛知県	3	鳥取県	3	福岡市	(1)
宮城県	-	神奈川県	1	名古屋市	(-)	島根県	1	佐賀県	1
仙台市	-	川崎市	(-)	三重県	1	岡山県	-	長崎県	-
秋田県	3	横浜市	(-)	滋賀県	1	広島県	2	熊本県	5
山形県	1	新潟県	7	京都府	1	広島市	(1)	大分県	-
福島県	6	富山県	2	京都市	(1)	山口県	9	宮崎県	-
茨城県	1	石川県	2	大阪府	3	徳島県	-	鹿児島県	6
栃木県	2	福井県	-	大阪市	(1)	香川県	1	沖縄県	1
群馬県	3	山梨県	1	兵庫県	2	愛媛県	1		

＊()内は政令指定都市からの参加者数。都道府県の参加者数に含まれる。

* 40都道府県から129名が参加。

4. 日 程

月 日	時 間	プ ロ グ ラ ム
1 / 28(火)	10 : 30 ~ 10 : 55	開 会
	11 : 00 ~ 12 : 00	講義「男女共同参画社会を推進するための女性教育施策の現状と課題」 講師 文部科学省生涯学習政策局男女共同参画学習課長 大木 宰子
	13 : 30 ~ 17 : 30	ワークショップ「女性のエンパワーメントとは」 講師 東洋英和女学院大学教授 / 国立女性教育会館客員研究員 藤村久美子
	18 : 30 ~ 20 : 00	情報交換会
1 / 29(水)	9 : 00 ~ 9 : 30	説明「女性情報センターにおける情報提供サービス」 説明 国立女性教育会館情報課専門職員 合田美恵子
	9 : 30 ~ 12 : 00	研究協議 「行政における女性のエンパワーメント支援の課題について」 コーディネーター 国立女性教育会館事業課専門職員 奥村 明子 「団体・グループ、NPOにおける女性のエンパワーメント支援 の課題について」 コーディネーター 国立女性教育会館事業課専門職員 小林千枝子
	13 : 30 ~ 17 : 30	全体協議「女性のエンパワーメント支援の可能性について」 助言者 東洋英和女学院大学教授 / 国立女性教育会館客員研究員 藤村久美子
	19 : 00 ~ 21 : 00	自由研究
1 / 30(木)	9 : 00 ~ 12 : 00 13 : 30 ~ 15 : 30	分科会 A「人生設計支援」 講師 東京女子大学助教授 岡村 清子 B「子育て支援」 講師 静岡県立大学助教授 犬塚 協太 C「向老期の学習支援」 講師 東北公益文科大学助教授 伊藤眞知子 D「団体・グループ、NPO活動支援」 講師 NPOサポートセンター理事長 山岸 秀雄
	15 : 40 ~ 17 : 30	全体会 講師 東京女子大学助教授 岡村 清子 講師 静岡県立大学助教授 犬塚 協太 講師 東北公益文科大学助教授 伊藤眞知子 講師 NPOサポートセンター理事長 山岸 秀雄
	19 : 00 ~ 21 : 00	自由研究
	9 : 00 ~ 11 : 30	まとめ
1 / 31(金)	11 : 30 ~ 11 : 55	アンケート記入
	12 : 00 ~ 12 : 20	修了証書授与
	12 : 20 ~ 12 : 30	閉 会

5. プログラムの内容

(1) 講義「男女共同参画社会を推進するための女性教育施策の現状と課題」

講 師 文部科学省生涯学習政策局男女共同参画学習課長 大木 宰子

はじめに、男女共同参画社会の実現の重要性、固定的性別役割意識の是正と人権尊重を基盤とした男女平等観の形成・促進の必要性和それに対する教育・学習の果たす役割の重要性が示された。

続いて、政府の男女共同参画社会の形成の促進にむけた推進体制の充実・強化の一環として、女性も男性も共に家庭生活と仕事や地域での活動を両立させ、安心して子育てができる環境の整備と政策方針決定過程への女性の参画の拡大の必要性について説明があった。

文部科学省では、省内の男女共同参画の促進のほか、学校教育・社会教育全般で男女共同参画を進めており、「子育て支援」、「暴力のない社会の実現」、「女性の多様なキャリア支援」、「女性教育の振興」、「女性と生涯学習」、「家庭教育支援」等に関する具体的な取り組みや事業の報告があった。「家庭教育支援」では、特に平成14年7月に出された「今後の家庭教育支援の充実についての懇談会」報告書にある「社会の宝」として子どもを育てることが重要との視点が強調された。

(2) ワークショップ「女性のエンパワーメントとは」

講師 東洋英和女学院大学教授 / 国立女性教育会館客員研究員 藤村久美子

はじめに、ジェンダー・アイデンティティを検証し、ジェンダー・バイアス(ジェンダーによる「偏り」)に気づくためのグループ作業として、テレビの人気アニメ「サザエさん」のビデオを見て、グループごとに登場人物の会話における発言の回数や内容、場所、席順等を調べ、分析を行った。

続いて、ワークショップのオリエンテーションとして、セミナー4日間のプログラムの流れや、参加するに当たっての心構え、視点等について説明があった。

次に、女性のエンパワーメントを支援する「リーダー」とは何かを考えるワークショップを通して、学習の場で学習者が自分で力をつけて、自分に自信を持つようになるためには、励ましたり、自分の意見を受け入れてくれる学習支援者の重要性が示された。また、21世紀における「家族」を考えるワークショップでは、自分は反対でも、社会的に許されていないこと(例えば夫婦別姓など)で困っている人がいるという理解は必要であり、ジェンダーの視点から、さまざまな差別にもっと敏感になる必要があることが指摘された。

最後に、女性のエンパワーメントを支援する学習プログラムを企画・立案・運営するうえで大切な留意点・視点について説明があり、プログラムの流れや参加者の意識、特に気づき・ふりかえりの重要性が強調された。



ワークショップを行う藤村久美子氏

(3) 説明「女性教育情報センターにおける情報提供サービス」

説明 国立女性教育会館情報課専門職員

合田美恵子

会館の女性教育情報センターの情報提供サービスとして、情報資料の収集・提供、レファレンスサービス等について、また、スクリーンに国立女性教育会館のホームページを写しながら、インターネットによる情報提供サービスとしてWinetCASSとTICTについての説明を行った。

(4) 研究協議

研究協議に入る前に、前日の「ふりかえり」として、グループごとに他の参加者が書いた文書をみてコメントを書き、それについて話し合いを行った。

続いて、とに分かれ、グループで、日頃抱えている問題点・課題について話し合った後、発表を行った。それらの問題点・課題を解決するためにはどのようなことが必要であるか、再度グループで討議を行い、最後に記録の整理とふりかえりを行った。

、 で出された問題点・課題は次のとおりである。

「行政における女性のエンパワーメント支援の課題について」

参加者83名（女性64名 男性19名）

組織上層部の意識改革、 自主グループの発展・支援のあり方、 参加者・利用者の固定化、 住民、特に男性の意識啓発等

「団体・グループ、NPOにおける女性のエンパワーメント支援の課題について」

参加者46名（女性45名 男性1名）

女性グループの消滅、 農村、漁村での若い人材の確保、 世代間の交流等

（５）全体協議「女性のエンパワーメント支援の可能性について」

助言者 東洋英和女学院大学教授／国立女性教育会館客員研究員 藤村久美子

まず、研究協議、 のそれぞれの参加者がどのグループにも入るようにグループ分けを行い、行政及び団体・グループ、NPOが抱えている課題について話し合った。次に、助言者からの「女性のエンパワーメントのための視点・留意点」として、プログラム作り、行政とNPO・NGOとの連携についてのミニ講義があり、プログラム作りで必要な視点・留意点として、学習のプロセスや学習者をエンパワーする（力をつける）こと、主体的な参加型プログラム、講師との十分な打合わせの重要性等が示された。

続いて、参加者が実践的なプログラムを企画するに当たって必要な視点・留意点、プログラムを企画するに当たってとまどっていること、女性のエンパワーメント支援における行政とNPOの連携あるいは役割の意義について、グループ討議と発表を行うとともに、全体で課題を共有し、全体討議を行った。

最後に助言者から、失敗を恐れたり、気にしたりせず、参加者を信頼して、プログラムのすすめ方を変更しながらとにかくやってみることが重要であることが示された。

（６）分科会

研究協議で明確になった課題・留意点をもとに、次の４つのテーマについて、女性のエンパワーメント支援に向けた実践的なプログラムを企画することをねらいとした。

A「人生設計支援」

参加者28名（女性45名 男性1名）

講 師 東京女子大学助教授 岡村 清子

まず、最初に、講師から「選びとる私の人生」のテーマで講義があり、ライフプランが必要な理由として、高齢社会の到来、家族の変化、女性の生き方の変化、個人中心の社会、生涯学習の必要性、人間関係の地縁から関心縁への変化をあげ、ライフプランの目標は、「生涯を通しての自立した生活と自己実現」であることが示された。

続いて、女性の人生設計の現状と問題点について説明があり、これからの生き方として「個を生きる」生き方、すなわち、役割から自由な個人の出会い、自分自身の学び、自己表現、人生上の課題解決（老いをどう生きるか）という４つの視点が示された。ライフプランは職業キャリアと家族キャリアであり、人生設計を支援していくためには、多様な個人の生活歴、社会経済的背景、家庭環境の理解、自分自身の問題の発見・気づきを支援する、共に支えたり支えられたり、個人の家族、個人の仲間のバランス（関係的自立、社会化された自己）、自分らしいライフプランに向けて、という姿勢が重要であることが示された。

講義の後、5つのグループで討議を行い、講師の話を聞いて感じたこと、わからなかったこと、どのような内容の支援プログラムが考えられるかなどを話し合い、発表を行った。

続いて、出されたテーマをもとに、各グループでプログラムを作成した。最後にグループごとに発表を行い、作成されたプログラムを共有し、講師からのコメントを含め検討を行った。

B「子育て支援」

参加者33名（女性25名 男性8名）

講 師 静岡県立大学助教授

犬塚 協太

最初に、講師が「現代日本社会の子育ての現状とその基本的な問題点及び子育て支援を実践していく上での課題」というテーマで、今の日本社会でなぜ子育て支援が必要で何が問題なのかについて、海外のデータと比較しながら講義を行った。子育て支援を進めるための領域として 女性自身、 家族、 職場、 地域社会の4つをあげ、その領域で実際にプログラムを企画する上での視点とプログラム作成上のポイント（参加型学習を主体とする、時間・場所を検討する、メディアを活用する、ネットワークを形成・活用する、成果を形にする）が示された。

次に、6つのグループに分かれて、それぞれのテーマが抱える問題点を話し合い、学習プログラムを作成した。

最後に、作成した学習プログラムについて報告と全体討議を行い、さらに検討を重ねた。

C「向老期の学習支援」

参加者33名（女性25名 男性3名）

講 師 東北公益文科大学助教授

伊藤真知子

まず、「向老期の学習支援」について講義があり、「向老期」とは、いままで生きてきた人生をもとに、アイデンティティや人間関係の再編を行う時期（おおよそ40歳代～60歳代）であり、特にジェンダーに敏感な視点からの再編が必要であることが強調された。男女とも豊かな高齢期に向けて、自分は何がしたいのか、どのようにして生きていくのか、また学習が必要であること、性別、世代、国籍などを超えて、共に生き、共に学ぶための寛容な心と自分らしさ（自尊感情）を大切にすることが示された。

続いて、向老期の学習課題として、人間関係の再構築、多様な活動への共同参画等が示され、「向老期に求められる学習と、その支援に向けた学習プログラムの作成」を4つのグループに分かれて行い、グループ発表、全体討議、講師によるまとめで検討を重ねた。

D「団体・グループ、NPO活動支援」

参加者33名（女性25名 男性8名）

講 師 NPOサポートセンター理事長

山岸 秀雄

最初に、講師が「団体・グループ、NPO活動支援について」というテーマで講義を行った。NPOとは、社会的資源を活用して、社会的、公共的サービスを提供する（独立・非営利の民間団体の）事業体であり、女性・高齢者・定年退職者など社会参画を阻止された人たちの活動の場であること、本当の民主主義をつくるためにはNPOが必要であり、高齢化や環境問題などに対応していくには、企業・行政・市民（NPO）がバランスよくパートナーシップをもつことが重要であること、NPOは批判ばかりする

のではなく、アドボカシー（政策提言）を行う役割があること、NPOが自治体・大学・商店街などと連携し、総合的に問題を解決し、新しいコミュニティを作っていく方法（プラットフォーム論）が示された。

続いて、7つのグループで、「団体・グループ、NPO活動支援に必要とされるニーズの発見」について討議を行い、発表を行った。その後、講師によるコメントをはさみ、プログラム作成を行った。作成したプログラムについて、グループ発表及び全体討議を行い、最後に講師によるまとめを行った。

（7）全体会

講 師	東京女子大学助教授	岡村 清子
講 師	静岡県立大学助教授	犬塚 協太
講 師	東北公益分科大学助教授	伊藤真知子
講 師	NPOサポートセンター理事長	山岸 秀雄

最初に、各分科会の講師から、講義内容を中心とした分科会の内容について発表があり、分科会の4つのテーマについての知識・情報や課題を共有した。

次に、4つの分科会で作成したプログラムについて、参加者同士でグループ内で説明を行い共有を図った。

（8）まとめ

本セミナーのプログラムを通して得た成果をもとに、自分自身の仕事上・活動上の課題解決に向けた方策をまとめ、討議するために、参加者自身が、セミナーの目的がどの程度達成されたか、プログラムに対する感想、この研修で得た知識や技能、参加当初の目的がどの程度達成されたか、参加者として自分をどのように評価するか、について書いた文書をグループ内で回し読み、コメントを記入した。グループ討議を行った後、発表を行い、参加者全員と学習支援者によるセミナー全体のふりかえりを行った。

6．今後の課題・展望

- （1）参加者の学習経験や職業経験等に大きな幅があるためか、セミナー全体の流れや展開、講師の話す速さについていけない参加者がいた。専門用語等の事前学習、あるいはセミナー期間中、希望者に対して何らかの補習が必要と思われる。
- （2）他の分科会にも出席したい、内容が知りたいという参加者が多かった。全体会の持ち方、時間配分、内容や情報の共有の仕方の工夫が必要である。
- （3）参加者全員を対象としたワークショップやグループ討議をより効果的にするためには、できれば机は可動式で簡単にグループ形式の配置ができ、参加者も自由に移動できる空間が必要である。

7．参加者の評価

今回のセミナーに対して参加者からは、「事業の企画・立案について、参加者のニーズに合わせた内容をどのように作成するか、今回、問題意識を明確化していくことの大切さがわかつ

た」、「企画する側と学習者の立場を体験することができ、また又エックの職員の方々の対応等とても勉強になった」、「参加者自身で気づき、分析していく。これがエンパワーメントであるということが一番印象に残った」、「求めていたことがコレだったと、改めて向老期についての意識が大切なことがわかった」、「自分の体験になかった視点を学習によって得られるということ、それによって自尊感情が持てるということをまず伝えたい」との意見が出された。

また、今後のセミナーへの期待としては、「一つの課題に取り組む際の講義も大いに取入れてほしい」、「もっとプログラムに余裕がほしかった」などが指摘されている一方で、「とてもわかりやすかったので、今後もこの様なセミナーでよいのではないか」との意見があった。

(事業課専門職員 島田 悦子)

アンケート集計結果

回答数124名(回答率96.1%)(参加者129名)

次の各項目について、セミナー後の感想にもっとも近いもの

1 男女共同参画社会について知識・情報を得た

	女性	%	男性	%	計	%
そう思う	60	57.7	9	45.0	69	55.6
少しそう思う	32	30.8	7	35.0	39	31.5
そう思わない	4	3.8	3	15.0	7	5.6
無回答	8	7.7	1	5.0	9	7.3
合計	104	100.0	20	100.0	124	100.0

2 女性のエンパワーメントについての知識・情報を得た

	女性	%	男性	%	計	%
そう思う	83	79.8	10	50.0	93	75.0
少しそう思う	13	12.5	6	30.0	19	15.3
そう思わない	0	—	1	5.0	1	0.8
無回答	8	7.7	3	15.0	11	8.9
合計	104	100.0	20	100.0	124	100.0

3 事業の企画・立案に関する専門的な知識・技術が身についた

	女性	%	男性	%	計	%
そう思う	53	50.9	8	40.0	61	49.2
少しそう思う	37	35.6	8	40.0	45	36.3
そう思わない	3	2.9	1	5.0	4	3.2
無回答	11	10.6	3	15.0	14	11.3
合計	104	100.0	20	100.0	124	100.0

4 NGO・NPO活動に必要な専門的な知識・技術が身についた

	女性	%	男性	%	計	%
そう思う	16	15.4	3	15.0	19	15.3
少しそう思う	48	46.1	10	50.0	58	46.8
そう思わない	24	23.1	4	20.0	28	22.6
無回答	16	15.4	3	15.0	19	15.3
合計	104	100.0	20	100.0	124	100.0

5 国の施策や基本的な考え方を知ることができた

	女性	%	男性	%	計	%
そう思う	16	15.4	2	10.0	18	14.5
少しそう思う	58	55.8	8	40.0	66	53.2
そう思わない	17	16.3	6	30.0	23	18.6
無回答	13	12.5	4	20.0	17	13.7
合計	104	100.0	20	100.0	124	100.0

6 参加者相互のネットワークができた

	女性	%	男性	%	計	%
そう思う	43	41.3	11	55.0	54	43.5
少しそう思う	39	37.5	5	25.0	44	35.5
そう思わない	8	7.7	2	10.0	10	8.1
無回答	14	13.5	2	10.0	16	12.9
合計	104	100.0	20	100.0	124	100.0

参加した全体のご感想はいかがでしたか

	女性	%	男性	%	計	%
期待していた以上だった	48	46.2	8	40.0	56	45.2
ほぼ期待していたとおりであった	53	50.9	11	55.0	64	51.6
全く期待はずれだった	2	1.9	1	5.0	3	2.4
無回答	1	1.0	0	—	1	0.8
合計	104	100.0	20	100.0	124	100.0

公開講演会

1.趣 旨

青少年による残虐な犯罪の多発、あるいは年々増加する幼児虐待、遺伝子組替や生殖技術・クローン技術の進歩により、生命再認識を求められている現代において、あらためて生命について、女性、子どもを取り巻く状況やリプロダクティブ・ヘルス/ライツの視点を通して考える。

2.主 題

「今、^{いのち}生命を考える」

3.主 催

独立行政法人 国立女性教育会館、国連人口基金東京事務所

4.期 日

平成15年2月14日（金） 13：30～16：00

5.参加者概況

（1）応募者・定員

392名（女性339名、男性53名）（申込者数414名 募集人員350名）

（2）性別・年代別（名）

	19歳以下	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	不明
女性	2	3	9	55	103	148	18	1
男性	1	2	12	6	14	13	5	0
合計	3	5	21	61	117	161	23	1

（3）都道府県（名）

都道府県	人数	都道府県	人数	都道府県	人数	都道府県	人数	都道府県	人数
青森県	1	千葉県	1	長野県	33	鳥取県	2	不明	1
岩手県	2	東京都	7	静岡県	1	広島県	2		
福島県	22	神奈川県	2	滋賀県	2	愛媛県	2		
群馬県	27	新潟県	1	京都府	3	高知県	1		
埼玉県	278	福井県	1	大阪府	2	鹿児島	1		

政令指定都市の参加なし
20都府県

6. プログラム概要

月 日	時 間	プ ロ グ ラ ム
2 / 14(金)	13 : 30 ~ 13 : 40	開会
	13 : 40 ~ 14 : 50	講演「女性の健康と権利」 (逐次通訳あり) 国連人口基金グローバルHIV/AIDSコーディネーター、産婦人科医、公衆衛生博士 スーマン・メータ
	14 : 50 ~ 16 : 00	講演「今、生命を考える」 国連人口基金親善大使・女子マラソン五輪メダリスト 有森 裕子 インタビュアー：国連人口基金東京事務所所長 池上 清子
	16 : 00 ~	閉会

講堂エントランスにて、有森親善大使のカンボディア訪問パネルを展示

7. プログラムの内容

(1) 講義「女性の健康と権利」

講 師 国連人口基金グローバルHIV/AIDSコーディネーター、産婦人科医、公衆衛生博士
スーマン・メータ

メータ氏は、30年間リプロダクティブ・ヘルスの専門家として活躍してきた経験を基に、特に青少年に対するエイズ教育の重要性と、女性の社会的地位の向上・健康の必要性について、パソコンでのプレゼンテーションと日本語と英語の逐次通訳を交えて講演を行った。

(2) 講義「^{いのち}今、生命を考える」

講 師 国連人口基金親善大使・女子マラソン五輪メダリスト 有森 裕子
インタビュアー 国連人口基金東京事務所所長 池上 清子

有森氏は、マラソン選手時代からスポーツを通してカンボディアとの交流があり、地雷被害者に対して精神的な支援や義足提供の援助を行う活動をするようになったことについて語り、スライドを用いながら親善大使としての活動について講演を行なった。

まとめ

国連人口基金東京事務所と共催することによって、ニューヨークからリプロダクティブ・ヘルス/ライツの専門家であるスーマン・メータ博士と国際的に知名度の高い有森裕子氏の講演が成立した。これは、本年度のテーマであるリプロダクティブヘルス/ライツの認識がまだ日本では低いことを考えると、広報面や関心を促すに有益であったといえ、その結果、参加者の満足度の高い講演会となっている。



講演を行う有森氏

8. 今後の課題・展望

(1) 今後も男性に会館を知って利用してもらい、より一層男女共同参画社会への理解を深めてもらうための工夫が必要である。

- (2) テーマに応じた参加者への効果的な広報の手段として、今回は教育委員会の後援を得て、教員の参加をしやすくした。また、国連人口基金東京事務所との共催とした結果、共催機関からの情報を受けて新しい参加者があったことは、会館を広く広報する上で有効であったといえる。
- (3) 今回の講演はエル・ネット用に 1 時間の番組として編集し、講演後 4 回の放映を行った。これは、会館の業務内容やテーマをより多くの人たちに知ってもらえる機会となった成果は大きいと思われるが、放映時間についての広報や、会館内での視聴の広報も必要である。

9. 参加者の評価

講演内容についての満足度は高く、会場運営が参考になった、対話形式や英語の講演がすばらしかった、有森氏の人柄に感銘を受けたとの意見が多い。一方、青年や成人男性の参加者が少なく、本当に講演内容について考えて欲しい人たちの意識の低さや、講演中の私語等参加態度の低さを指摘する意見もある。

(事業課専門職員 奥村 明子)

アンケート集計結果

参加者数 392 名 (女性 392 名, 男性 53 名) アンケート回答数 174 名 アンケート回答率 44.4 %
次の各項目について、講演後の感想にもっとも近いもの

「女性の健康と権利」
(スーマン・メータ博士講演)
について情報・知識が得られた

	人数	%
そう思う	111	63.8
少しそう思う	34	19.5
そう思わない	6	3.4
無回答	23	13.2
合計	174	100.0

国立女性教育会館について
知ることができた

	人数	%
そう思う	71	40.8
少しそう思う	39	22.4
そう思わない	7	4.0
無回答	57	32.8
合計	174	100.0

「今、生命を考える」
(有森裕子氏講演) について
情報・知識が得られた

	人数	%
そう思う	124	71.3
少しそう思う	25	14.4
そう思わない	5	2.9
無回答	20	11.5
合計	174	100.0

参加した全体のご感想は
いかがでしたか

	人数	%
満足	70	40.2
ほぼ満足	90	51.7
不満	1	0.6
無回答	13	7.5
合計	174	100.0

女性の教育推進セミナー

1. 趣 旨

女子・女性教育における現状と課題を把握し、女子・女性教育推進のための施策について研修すると共に、開発途上国における教育へのアクセスや教育達成度における男女格差是正のための政策の立案、実施に必要な考え方及び情報を習得する。（国際協力事業団からの委託事業）

2. 主 催

文部科学省、独立行政法人国立女性教育会館、国際協力事業団

3. 期 日

平成15年2月11日（火）～3月8日（土）

4. 参加国 （p38表参照）

8ヶ国、9名

5. 到達目標及び研修項目

- （1）日本の教育行財政及び歴史的展開についての知識を得る。
- （2）女子・女性教育推進のための教育政策立案に必要な知識の習得及び能力の向上を図る。
- （3）各国の教育制度や教育政策の現状と問題点について情報交換する。
- （4）日本の社会、文化に関する見識及び理解を深める。



嵐山町立中学校視察



都内の小学校視察



ワークショップの様子



手まり作成

6. 研修日程

月日	時間	研修内容	場所
2 / 11 (祝)		来日	
2 / 12 (水)	9 : 30 - 14 : 00 15 : 00 - 16 : 30	JICAブリーフィング プログラムオリエンテーション (含む、研修課題の確認)	東京国際センター JICA国際総合研修所
2 / 13 (木)	9 : 30 - 17 : 00	ゼネラルオリエンテーション	東京国際センター
2 / 14 (金)	9 : 30 - 17 : 00 18 : 00 -	ゼネラルオリエンテーション 日本文化体験 (着付け)	東京国際センター JICA国際総合研修所
2 / 15 (土)			
2 / 16 (日)			
2 / 17 (月)	10 : 00 - 12 : 00 14 : 00 - 16 : 00	講義：日本の教育制度 講師：東京都立大学人文学部助教授 大田 直子 講義：日本の教育行政 講師：東京都立大学人文学部助教授 大田 直子	JICA国際総合研修所
2 / 18 (火)	8 : 25 - 16 : 00	世田谷区立駒繫小学校 体験学習	世田谷区立駒繫小学校
2 / 19 (水)	10 : 00 - 12 : 00 13 : 30 - 13 : 45 13 : 45 - 14 : 30 14 : 30 - 15 : 30 15 : 30 - 16 : 30 18 : 00 - 19 : 30	NWECへ移動 表敬訪問 会館概要・事業説明 施設見学 お茶会 歓迎夕食会	2 階会議室 " 情報センター他 響書院 <NWEC泊>
2 / 20 (木)	10 : 00 - 13 : 30 13 : 30 - 15 : 00 17 : 00 - 20 : 30	夕/カ 嵐山町立玉岡中学校視察 民生・児童委員との意見交換 ホームビジット (希望者)	嵐山町立玉岡中学校 同上 <NWEC泊>
2 / 21 (金)	9 : 00 - 13 : 00 13 : 30 - 16 : 30 18 : 30 - 20 : 30	大妻嵐山高校視察 理事長・研究員・専門職員からの情報提供 手まり作成	大妻嵐山高校 2 階会議室 同上 <NWEC泊>
2 / 22 (土)	9 : 00 - 11 : 00	NWEC 東京	
2 / 23 (日)			
2 / 24 (月)	14 : 00 - 16 : 00 17 : 30 - 21 : 30	ユネスコアジア文化センター (識字教育課) 視察 女性と識字 夜間中学校視察	ユネスコ 墨田区立文花中学校
2 / 25 (火)	10 : 00 - 12 : 00 14 : 00 - 17 : 00	講義「女性と健康」 講師：(財)家族計画国際協力財団 人材養成事業課長 浅村 里紗 講義「学校保健」 講師：宮崎県立看護大学講師 坂本 玄子	JOICFP JICA国際総合研修所

月日	時間	研修内容	場所
2 / 26 (水)	13 : 00ー17 : 00	講義・ワークショップ「ジェンダーと教育」 講師：名古屋大学大学院国際開発研究科 助教授 岡田 亜弥	JICA国際総合研修所
2 / 27 (木)	10 : 00ー16 : 00	カントリーレポートの発表 コーディネーター：北海道教育大学教授 大津 和子	JICA国際総合研修所
2 / 28 (金)	午前 11 : 30ー16 : 00	東京 広島 世羅町立西大田小学校視察	世羅町立西大田小学校
3 / 1 (土)	9 : 00ー12 : 30	講義「女子教育と経済開発」 「女子教育を推進するための議論」 講師：広島大学教育開発国際協力研究 センター 助教授 黒田 一雄 広島市内見学	JICA中国国際センター <広島市内ホテル泊>
3 / 2 (日)	午前 午後	広島 京都 京都市内見学	
3 / 3 (月)	11 : 00ー12 : 00 13 : 30ー15 : 00 15 : 30ー17 : 30	文部科学省表敬訪問 訪問先：生涯学習政策局名取主任社会教育官 講義「女子教育におけるお茶大ジェンダー 研究センターの役割」 講師：お茶の水女子大学ジェンダー 研究センター教授 舘 かおる 講義「女性と暴力」 講師：お茶の水女子大学生生活科学部教授 戒能 民江	文部科学省 お茶大図書館 第二会議室 お茶大図書館 第二会議室
3 / 4 (火)		ワークショップ準備	JICA国際総合研修所
3 / 5 (水)	9 : 30ー10 : 30 11 : 00ー16 : 00	講義「JICA事業とジェンダーへの取組み」 講師：JICA森林自然環境部 ワークショップ コーディネーター：北海道教育大学教授 大津 和子	JICA国際総合研修所
3 / 6 (木)	10 : 00ー16 : 00	ワークショップ、アクションプラン作成 コーディネーター：北海道教育大学教授 大津 和子	JICA国際総合研修所
3 / 7 (金)	10 : 00ー11 : 30 11 : 30ー12 : 00 12 : 00ー	評価会 閉講式 フェアウェルパーティー	JICA国際総合研修所
3 / 8 (土)		帰国準備	

7. 今後の課題・展望

(1) 研修員

応募割当て国は10ヶ国（カンボディア、エチオピア、ガーナ、ベナン、ブルキナ・ファソ、象牙海岸、ジブティ、ニジェール、トーゴ、コンゴ民主共和国）で募集人数は9人である。13人の応募があり、できる限り1ヶ国1名の研修生を選考することにしたが、ガーナのみ2名の受け入れとなった。他の研修員との相互関係から、やはり1ヶ国1名の原則にしたがった選考を行う方が望ましい。

(2) 視察先

昨年度の課題をふまえ、今年度は都市部の小学校と僻地にある小学校、中学校の昼間部と夜間部、女子高校などバリエーションに富んだ学校視察を計画した。また時間的にも、小学校でほぼ丸一日を過ごすなど時間をかけた体験学習を行い、研修員の満足度が高かった。来年度も引き続き、研修員のニーズに合うような多様なタイプの学校を選定を行い、時間的余裕のある視察を行うように配慮したい。京都・広島での研修は、日本の中の地域性が理解できる貴重な機会となった。来年度も、日本文化の地域的特徴を体験できるような視察を取り入れたい。



広島県の小学校視察



アクションプランの作成

(3) 講義・ワークショップ

昨年度以上に話し合いの時間を増やしたが、研修員からはもっと議論の時間がほしい、一方通行の講義よりも参加型が望ましいという意見が出された。来年度も引き続き、ワークショップを多く取り入れることにし、講義の場合でも参加型にするよう講師と事前打ち合わせたい。カントリー・レポートの発表は、途上国の女子・女性教育の現状を知る貴重な機会であるため、JICAの職員、大学院生などの参加も募り、意見交換ができるようなワークショップにすることを考えたい。

(4) 合同研修

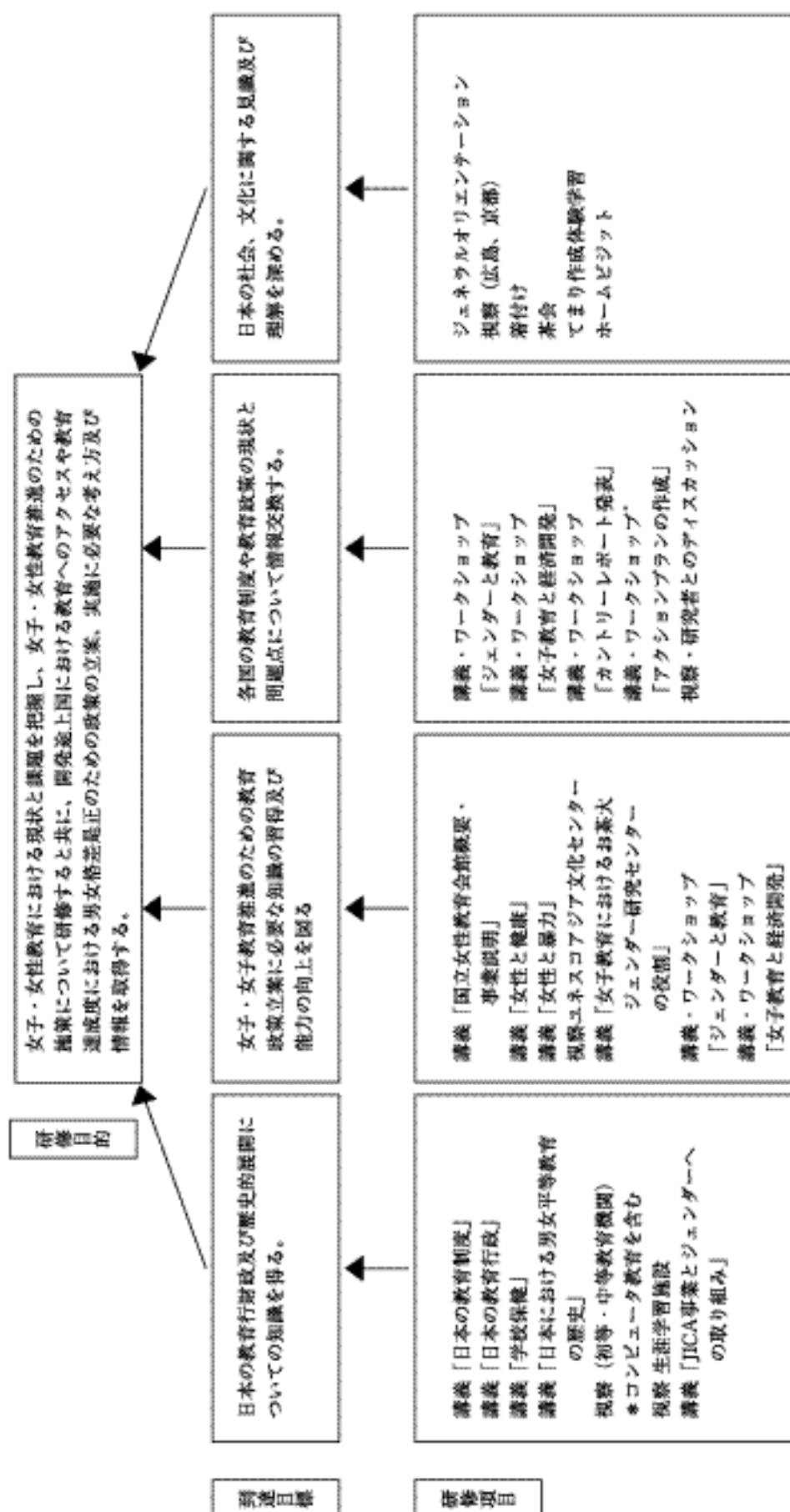
JICAの日本人専門家のための研修と合同でワークショップを行ったが、立場の違うもの同士の意見交換は、互いの視野を広げるという意味で有用だった。今後とも、合同研修の機会があれば取り入れることを考えたい。

(5) その他

女性にとっての課題及びジェンダー問題に関連する情報が蓄積されている本会館での研修は、学校教育とはまた別の角度から女性教育について考える機会となったと研修員に評価されている。また、希望者に対して行ったホームビジットも、結局は全員が参加し満足度も高かった。今後とも、本会館での研修を効果的に日程に組み込みたい。

(研究国際室研究員 高橋 由紀)

セミナー概念図



LIST OF PARTICIPANTS IN "SEMINAR ON PROMOTION OF EDUCATION FOR GIRLS AND WOMEN"

(平成14年度 女性の教育推進セミナー 研修員リスト)

As of February 13, 2003

No.	Photo	Country	Name	Date of Birth	Present Post	Mailing Address
1		Berlin ドイツ	Ms. CHINGOUN Phommene チンゴン フォムメネ	'53 (10-02-100101)	Officer, Department of Girls' Schooling Promotion / Programming and Prospecting Division, Min. of Primary and Secondary Education 男・中等教育司 女子中等教育課 課長付	88 BP 2707 Paris-Nord, Berlin (E-mail: phommene@yandex.ru)
2		Cambodia カンボジア	Ms. PA Sokann ソカヌ	Jan. 15, '78 (10-02-100178)	Permanent Academic, Gender and Girls' Education Section, Dept. of Primary and Secondary Min. of Education, Youth and Sport 教育部(男女・青少年司) 女子中等教育課 課長付	8108, French Neuchâtel Blvd, Ponson Road, Cambodia
3		Cost of Tunes チュニジア	Ms. OMAD GLADU Sophie Goudi オマド グラドゥ	Jan. 1, '93 (10-02-100549)	In charge of studies for promotion of education for girls and women Min. of National Education 教育部 女子の教育普及の課長付当官	21 BP 1408 Aloubaia 25 Erbil / Tunes
4		Ethiopia エチオピア	Ms. Estanteneh Tishan MEGLESS エスタネンチ ティشان	Jul. 13, '62 (10-02-100549)	Head, Women's Affairs Department, Min. of Education 教育部 女子課 課長	Adiba Ababa P.O. Box 1147, Ethiopia
5		Ghana ガーナ	Ms. Ewur-Abeana AHWOH エウラアベアナ	May 12, '46 (10-02-100549)	Head, Girls' Education Unit, NDECS Ministry of Education 教育部 女子中等教育課 課長	Girls Education Unit P.O. Box 9412 Accra, Ghana
6		Ghana ガーナ	Ms. Mary Helena BOADI ボアディ	Sep. 15, '63 (10-02-100741)	Co-ordinator, Gender, Girls' Education, Gender Education Services, Ministry of Education 教育部 女子の教育普及の課長付当官	(E-mail: phommene@yandex.ru) P.O. Box 99 152, Radio Plaza Madison - Accra, Ghana
7		Niger ニジェール	Ms. NAKAMBA Adeline ナカムバ	Jul. 11, '79 (10-02-100747)	Head of Training, Research and Development's Div., Education of Young Girls Education Foundation, Min. of Basic Education and Adult Learning 基礎教育(成人学習司) 女子教育財団 部長 兼 研究・開発課 課長	Ministry of Basic Education and Adult Learning P.O. Box 902 Niamey, Niger
8		The Democratic Republic of Congo コンゴ民主共和国	Mr. LUTRANKI Ndikumana Justin ルトランキ	Aug. 18, '58 (10-02-100757)	Senior Public Official, Ministry of Education 教育部 女子中等教育課 課長	Ministry of Education Kinshasa, Democratic Republic of Congo
9		Togo トーゴ	Ms. MUGOUTE Aboungou ムグーテ	Jan. 26, '86 (10-02-111005)	Ministry of Education 教育部 女子中等教育課 課長	88108 - 8108/8108 BP. 36 Dapaoung, Togo

男女共同参画学習推進フォーラム

1. 趣 旨

男女共同参画社会の形成をめざし、地域の実情と人々の学習要求に応じた生涯学習の推進と、広域的な施設間のネットワークの形成の充実を図るため、女性教育施設、生涯学習センター等の生涯学習関連施設と連携して、地域においてフォーラム等を実施する。

2. 主 催

国立女性教育会館及び女性教育関連施設等

3. 実施機関・開催日時・会場

実 施 機 関	開 催 日 時	会 場
財団法人 秋田県婦人会館	平成14年10月12日（土） 10：00～15：30	日本赤十字秋田短期大学
埼玉県男女共同参画推進センター	平成14年12月 1日（日） 9：30～17：30	ラフレさいたま With You さいたま
富山市女性交流センター （富山市）・富山市市民学習セン ター（富山市教育委員会）	平成14年 6月30日（日） 10：00～16：30	富山国際会議場
滋賀県立男女共同参画センター・ 滋賀県男女共同参画推進協議会	平成14年 9月28日（土） 13：00～16：00 平成14年10月12日（土） 13：00～16：00 平成14年10月26日（土） 13：00～16：00 平成14年12月 7日（土） 13：00～16：00	山東町中央公民館 安曇川町藤樹の里ふれあいセンター 甲南町忍びの里プララ 滋賀県立男女共同参画センター

4. 事業の内容

男女共同参画社会の実現に向け、地域における従来の社会的慣行・意識・ライフスタイル等の課題解決に資する内容とし、「国立女性教育会館による情報提供」「文部科学省による男女共同参画学習に関する情報提供」の内容を含め、国立女性教育会館と共催機関が連携・協力して企画・実施する。

共催機関は、全国の広域的な活動を行う公・私立の女性会館、女性センター、生涯教育センター等の生涯学習関連施設から公募し、5施設より応募を得た。

共催機関の決定については、広域的なネットワークの形成・充実に資する企画内容であること、地域の具体的課題の解決に資する企画内容であること、男性、若者等幅広い参加が得られるよう参加体験型学習等多様な方法・形態を工夫した企画内容であること、女性施設間等との連携が期待できること、開催による地域への波及効果、共催機関規模、地域のバランス、等を考慮して、財団法人 秋田県婦人会

館、埼玉県男女共同参画推進センター、富山市女性交流センター、滋賀県男女共同参画センターの4施設を決定した。

本事業を、男女共同参画社会の実現に向けたイベント的学習プログラムとして位置付け、男女共同参画学習のプログラム開発を行うために、各施設を事業課専門職員がひとりずつ担当し、事業の企画に携わった。

5.プログラムの概要

(5)-1 (財)秋田県婦人会館「男女共同参画学習推進フォーラムinあきた」

趣 旨

男女共同参画社会における人と人との関係は誰もがその個性と生き方を尊重されお互いの違いを認め合うものである。しかしながら、いまだ性別役割意識の強い秋田においては親しい男性から女性への暴力、多様なセクシュアリティへの偏見、子どもへの虐待など深刻な問題が存在する。また男性も自らの健康に配慮することなく、家族の経済を一身に背負う現状が中高年男性の自死率の一因と考えられている。



男女共同参画学習推進フォーラムinあきた

このフォーラムはさまざまな場面で受ける人権侵害についてその背景を学び、人権尊重に基づく男女共同参画社会の実現をめざして開催する。

テーマ 「人が人らしく生きるために - 性は人権 - 」

開催日時 平成14年10月12日(土) 10:00~15:30

参加者 656名(女性519名、男性111名、不明26名)

プログラムの概要

日 時	プ ロ グ ラ ム
10月12日(土) 10:00~12:00	ワークショップ1 「子どもが暴力から自分を守るために」 実施団体 CAPあきた ファシリテーター 大久 栄さん CAPあきた
	ワークショップ2 「性役割の発達と、からだの性、こころの性」 実施団体 性と人権のためのNPO ESTO 講 師 福島学院短期大学 梅宮 新偉さん
	ワークショップ3 「男性にも更年期があるさ」 実施団体 財団法人 秋田県婦人会館職員 講 師 秋田大学教授 本橋 豊さん
	ワークショップ4 「地域の中で自分らしく生きる」 実施団体 エンパワくらぶ・あきた ファシリテーター 折原 和子さん エンパワくらぶ・あきた
	ワークショップ5 「DVってなに?一緒に考えてみませんか?」 実施団体 あきたDVを考える会 ファシリテーター 山下 博子さん あきたDVを考える会

	ワークショップ6 「コミュニケーションと性」 実施団体 女性学あゆむ ファシリテーター 佐藤 加代子さん・大塚 知子さん
13：00～13：30	開会セレモニー
13：30～15：00	講演「人が人らしく生きるために - 性は人権 - 」 講 師 千葉県知事 堂本 暁子

(5)-2 埼玉県男女共同参画推進センター「埼玉県男女共同参画サミット」

趣 旨

男女共同参画推進に関する埼玉県各地域ごとの課題について認識を深め、その解決に向けて、県内市町村・男女共同参画関連施設・活動団体やグループ等とのネットワークを構築する。また、当センターがいつでも、だれでも、気軽に利用できる施設であることを広く県民にアピールする。

主 題

「埼玉県各地域の男女共同参画を考える～語ろう・つなごう・ネットワーク～」

開催日時

平成14年12月1日(日) 9：30～17：30

参加者 1,045名(女性876名、男性169名)

プログラムの概要



埼玉県男女共同参画サミット

日 時	プ ロ グ ラ ム
12月1日(日) 9：40～10：00	アトラクション(和太鼓演奏)
10：00～10：25	開会セレモニー
10：30～12：30	パネルディスカッション 「埼玉県男女共同参画サミット～地域を知ろう、手をつなごう～」 コーディネーター 十文字学園女子大学教授 橋本ヒロ子 パネリスト 越谷市男女共同参画支援センター所長 青木 玲子 川越市女性政策推進室室長 鈴木 信一 新座市男女共同参画推進プラザ所長 田部井利江 上里町女性センター所長 片倉す寿子
13：45～16：00	第1分科会 「ジェンダーフリーの視点で教育を～家庭・地域・学校で～」 コーディネーター 共愛学園前橋国際大学・男女共同参画学習センター所長 大森 昭生 実践活動報告者 蓮田市立田中中学校教諭 滝澤 博元 共愛学園前橋国際大学・男女共同参画学習センター研究員 前田由美子

	<p>第2分科会 「DV（ドメスティック・バイオレンス）と女性の健康 ～シェルターや相談の現場から そして今後のDV施策について～」 コーディネーター 東京家政大学非常勤講師 ゆのまえ知子 実践活動報告者 埼玉おんなのシェルター代表 川野紀代美 埼玉県婦人相談センターDV相談室専門調査員 高倉富美子</p>
	<p>第3分科会 「M字型就労を踏まえた女性の就業について ～私が一歩を踏み出すとき～」 コーディネーター 株式会社 ユック舎 上野いく子 実践活動報告者 NPO法人 ブリッジ エ - シアジャパン 稲見由美子 フリーライター 大前真由美</p>
	<p>第4分科会 「男女協働 子育ては自分育て～お父さんにエール～」 コーディネーター 文教大学人間科学部助手 小原 伸子 実践活動報告者 はにゅうファミリーサポートセンターアドバイザー 蓮見 弘子 越谷市子育てサークルネットワークの会代表 田井 玲子 会社員 大輪 幸路</p>
	<p>第5分科会 「地域における政策決定の場への参加～社会への扉を開く女性たち～」 コーディネーター 十文字学園女子大学教授 橋本ヒロ子 実践活動報告者 鶴ヶ島市男女共同参画プラン市民会議会長 矢口 峰子 川越市立大塚小学校PTA会長 福田奈穂美 神奈川ネットワーク運動代表 村田 邦子</p>
	<p>第6分科会 「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ（性と生殖に関する健康と権利）について ～がまんしないで からだと気持ち～」 コーディネーター 埼玉県立大学保健医療福祉部看護科助教授 鈴木 幸子 実践活動報告者 埼玉県立大学保健医療福祉部看護科助手 今井 充子 越谷市立西中学校養護教諭 金子 明美</p>
	<p>第7分科会 「ウイメンズ・アート・ワーク “ラップ・マム”」 俳優・脚本 竹森 茂子 ～社会への扉を開く女性たち～」 コーディネーター 十文字学園女子大学教授 橋本ヒロ子 実践活動報告者 鶴ヶ島市男女共同参画プラン市民会議会長 矢口 峰子 川越市立大塚小学校PTA会長 福田奈穂美 神奈川ネットワーク運動代表 村田 邦子</p>

(5)-3 富山市女性交流センター・富山市市民学習センター「男女共同参画学習推進
フォーラム 2002 in とやま ～素敵に人生 女と男～」

趣 旨

男女共同参画社会を構築していく上で、家庭や地域・職場における現状がどのような状況かを把握し、問題・課題を揚げ、参画社会をどのようにして進めるかを共に考え、又、各方面で多様な趣味を生かして活躍している趣味人（パネリスト）に参画に関する様々な意見や思いを大胆に発信してもらい、幅広い市民層の男女共同参画意識の高揚を図る。

テーマ 「家庭や地域・職場での男女共同参画をどのように進めるか」

開催日時

平成14年6月30日（日）10：00～16：30（開場9：30）

参加者 878名（女性642名、男性276名）

プログラム概要



男女共同参画学習推進フォーラム 2002 inとやま

日 時	プ ロ グ ラ ム
6月30日（日） 10：00～11：30	趣味人会議 第1分科会「女と男で支え合う家庭や地域・職場」 コーディネーター 富山国際大学教授 永田 円了 パネリスト （財）北陸経済研究所主任研究員 石黒 厚子 金沢星陵大学助教授 コリン・スロス 富山県立しらとり養護学校教諭 定村 誠 NPO法人福祉サポートセンターさわやか富山代表 森沢恵美子
	趣味人会議 第2分科会 「互いの趣味・活動を認め合い、心輝く男女共同参画社会」 コーディネーター 金城大学短期大学部助教授 岡野 絹枝 パネリスト ガールスカウト富山地区協議会副会長 小川しげみ とやまゆとりすと倶楽部会長 中井 弘 山野流着装教室主宰 中西千恵子 富山県女性スポーツの会相談役 山本 玲子
12：30～13：00	オープニング ・川柳入選作品プレゼンテーション ・アトラクション「YOSAKOIとやま」
13：00～13：45	開会セレモニー
13：45～14：45	基調講演「君について行こう」 講師 慶應義塾大学医学部助教授 向井万起男
14：45～16：30	シンポジウム 「家庭や地域・職場での男女共同参画をどのように進めるか」 コーディネーター 富山県立大学教授 奥田 實 パネリスト 金城大学短期大学部助教授 岡野 絹江 （株）インテック代表取締役社長 中尾 哲雄 富山国際大学教授 永田 円了 富山市長 森 雅志

(5)-4 滋賀県立男女共同参画センター・滋賀県男女共同参画推進協議会

「ちょっと本音で話ませんか？滋賀のくらしと女と男 ～なぜ進まない男女共同参画～」

趣 旨

滋賀県には、県土の中央に琵琶湖があるという地理的条件により、東部と西部、南部と北部の地域での生活や文化にさまざまな影響を与えている実態がある。

男女共同参画に関わる地域での意識格差も例外ではない。そこで、地域において男女共同参画学習を推進するためには市町村単位で行われてきた学習をさらに広域的なものにすることや、県内のさまざまな機関や学校・教育施設、団体・グループなどと強靱なネットワークを構築することが必要となる。

これらは、地域の特性や課題に気づき、自分たちの暮らしや地域へのかかわり方を学び、自己と地域の意識を男女共同参画社会づくりへと変革していくために重要なことである。

さらに、男性や若い層などの参画を促し、さまざまな立場の人々と、語り合い関心を高めることで、本県の男女共同参画が一層推進すると考え、フォーラムを開催する。

テーマ 「男女共同参画で学び、行動して築く新しい形の暮らしと地域づくり」

開催期日 湖北フォーラム 平成14年 9月28日(土) 13:00～16:00
湖西フォーラム 平成14年10月12日(土) 13:00～16:00
甲賀フォーラム 平成14年10月26日(土) 13:00～16:00
まとめフォーラム 平成14年12月 7日(土) 13:00～16:00

参加者 295名(女性238名、男性57名)
湖北フォーラム 60名(女性48名、男性12名)
湖西フォーラム 70名(女性59名、男性11名)
甲賀フォーラム 72名(女性60名、男性12名)
まとめフォーラム 93名(女性71名、男性22名)



滋賀県立男女共同参画センター

プログラムの概要

【湖北フォーラム】

日 時	プ ロ グ ラ ム
9月28日(土) 13:00～13:10	開 会
13:10～14:20	ワークショップ 「まちづくり - 女性の社会参加プロジェクトの歩み」 話題提供者 近江町女性の社会参加プロジェクト 北川 朝子
	ワークショップ 「農村の未来と女性 - 菊づくりを通じてエンパワーメント」 話題提供者 農業者 浜寄 信子

13：00～13：10	ワークショップ 「子育て・教育 - ジェンダーフリーの子育て」 話題提供者 虎姫幼稚園園長 富永 綾子
	ワークショップ 「介護 - 痴呆症の介護のあり方を求めて」 話題提供者 いぶきの会長 東野 更正
	ワークショップ 「仕事・起業 - お台所の知恵を起業へ」 話題提供者 かあちゃん亭 堀江 瑠美
14：45～15：10	全体発表 ワークショップの報告
15：10～16：00	講演「学習とネットワーク」 講師 女性史研究家 早田リツ子

【湖西フォーラム】

日 時	プ ロ グ ラ ム
10月12日（土） 13：00～13：10	開 会
13：10～14：20	ワークショップ まちづくり 「男女共同参画の視点に立ったまちづくりの取組」 話題提供者 風車のまちの女性史づくりの会 内藤さき枝
	ワークショップ 暮らしとパートナー 「日本女性会議あおもりの資料から」 話題提供者 つれづれの会 辻 洋子
	ワークショップ 子育て・教育 「親子探検隊の活動から」 話題提供者 志賀町親子探検隊 澤田美恵子
	ワークショップ 高齢期をいきいきと 「行動が起こせる高齢者へ」 話題提供者 アクト21 臼坂登世美
	ワークショップ 仕事・起業 「仕事を持つこと」 話題提供者 草木染 染織家 小林 斐子
	全体発表 ワークショップ報告
14：20～14：45	講演 「湖西の暮らしと女と男の新しい歩み」 講師 京都府立大学福祉社会学部教授 小沢 修司

【甲賀フォーラム】

日 時	プ ロ グ ラ ム
10月26日（土） 13：00～13：10	開 会
13：10～14：20	ワークショップ まちづくり 「甲西町男女共同参画リポーターとして」 話題提供者 甲西レディースネットワーク 船越 鈴代
	ワークショップ 暮らしとパートナー 「家庭が変わる」 話題提供者 パートナーしが参画推進員 磯矢 時子
	ワークショップ 子育て・教育「育児休暇をとって子育てを」 話題提供者 看護師 河田 和夫
	ワークショップ 高齢期をいきいきと 「家族と共に在宅介護（父の介護体験）」

13：10～14：20	話題提供者 モリダイニングサプライ 森口 和夫
	ワークショップ 仕事・起業 「仕事を持つということ」 話題提供者 フリーランスデザイナー 藤原 孝子
14：20～14：45	全体発表 ワークショップの報告
14：45～16：00	講演 「学習とネットワーク」 講師 女性史研究家 早田リツ子

【まとめフォーラム】

日 時	プ ロ グ ラ ム
12月7日（土） 13：00～13：30	開 会
13：30～14：45	ワークショップ まちづくり 「自治会長・主任児童委員の経験から」 話題提供者 彦根市主任児童委員・H13年度原東団地自治会長 福井久美子
	ワークショップ 暮らしとパートナー「夫も私も変わりました」 話題提供者 栗東市男女共同参画社会づくり推進協議会委員 杉原恵美子
	ワークショップ 子育て・教育 「自分を大好きといえる子どもに」 話題提供者 性と生を考えるサークル代表 久田 智子
	ワークショップ 高齢期をいきいきと 「創る老後」 話題提供者 女性がいきいき暮らすための生活文化を考える会 代表 阿部美智子
	ワークショップ 仕事・起業 「今、起業どき？」 話題提供者 光子発生技術研究所 代表取締役 山田 礼子
14：45～15：10	全体発表 ワークショップの報告
15：10～16：00	トーク＆トーク 「学ぼう 気づこう 動かそう」 講師 京都府立大学 社会福祉学部 教授 小沢 修司 臨床心理士 高橋 啓子

6．全体の評価

男女共同参画社会の形成には地域性を重視することが必要であり、全国4地域で企画委員会を設けてフォーラムの企画を行ったことにより、それぞれの地域性に即した男女共同参画についての学習課題・ニーズを内容とすることができた。

共催機関を広く応募しているが、応募件数は多くない。募集方法・期間等の工夫が必要である。

推進フォーラムを、男女共同参画学習のイベント的学習のプログラム開発の一つとして位置付け、男女共同参画社会の実現に向け、各地域での課題解決の手段として、また、多くの参加者が得られるようその裾野を広げる手段として分析・開発していくことが必要である。

（事業課専門職員 小林千枝子）

子育てサークル交流支援研究協議会

1. 趣 旨

家庭生活の都市化、核家族化などの影響で、子育てに対する不安や負担を感じる親が増えている。身近な相談をする場として、全国各地で広がりを見せている「子育てサークル」の交流を支援するため、情報交換、意見交換を行うための研究協議会を実施する。

2. 主 催

国立女性教育会館及び共催機関(教育委員会、生涯学習センター、女性関連施設、子育てサークル関連団体等)

3. 実施機関・開催日時・会場

実施機関	開催日時	会 場
独立行政法人 国立女性教育会館	6月29日(土) 13:30~16:30	(ヌエック会場)国立女性教育会館 (愛知会場) 愛知県立教育総合センター 通信衛星を使つての二元中継
こころの子育てインターねっと関西	7月13日(土) 11:00~16:00	大阪府大阪市立西成区民センター
こころの子育てインターねっと関西 高槻子育てネットワーク ティピー	12月 7日(土) 12:30~16:00	大阪府高槻市立総合市民交流センター
かながわ子育てネットワーク (財)横浜市女性協会	10月20日(日) 13:30~15:45	横浜女性フォーラム ホール

4. 事業の内容

男女共同参画の視点に立った子育てサークルの支援をめざした研究協議会

5. プログラムの概要

(1) 国立女性教育会館「わいわい子育て広場 in ヌエック」

趣 旨

家庭生活の都市化、核家族化などの影響で、子育てに対する不安や負担を感じる親が増えている。身近な相談をする場として、全国各地で広がりを見せている「子育てサークル」の交流を支援するため、情報交換、意見交換を行うための研究協議会を実施する。

主 題 「今どきの子育てを考える - ひとりから仲間、そしてネットワークへ - 」

共 催 独立行政法人 国立女性教育会館、埼玉県教育委員会、愛知県教育委員会

後 援 文部科学省、厚生労働省、埼玉県

協 力 今どき子育てフォーラムSAITAMA、小平子育てネットワークるるん

開催日時 平成14年 6月29日(土) 13:30~16:30

場 所

ヌエック会場 独立行政法人 国立女性教育会館(ヌエック)

愛 知 会場 愛知県立教育総合センター 通信衛星を使つての二元中継

参加者

ヌエック会場 613名（女性358名，男性39名，子ども216名）（申込者数713名）

愛知会場 85名（女性71名，男性14名）

総計 698名（女性429名，男性53名，子ども216名）



子育て仲間交流会



世界の料理体験

日程と概要

13:30 ~15:30 第1部	<p>【大人のパート】『子育て仲間交流会』コーナー 「子育てサークル」や子育て支援の様々な問題について、参加者同士で意見交換をした。</p>
	<p>(1)「よりよい活動や運営を考えよう」 助言者：和歌山大学生涯学習教育研究センター長・教授 山本 健慈 コーディネーター：福岡県「地域ぐるみの子育てをすすめる ひだまりの会」 高山 静子 事例報告者：新潟県「NPO法人ヒューマンエイド22」 椎谷 照美 「よりよい活動や運営」を行うには、「サークルに適切なアドバイスする人材（保健師、保育士、幼稚園教諭、家庭教育アドバイザー等）が欠かせないこと」が報告された。また、「孤立した中での子育ては日本の歴史上初めてであるから、自分たちの活動に生かせるよう、全国の子育て情報をたくさん集めること」「現状では、子育て支援の専門家はいない。新しい方法を思考錯誤しながら作り出していくことが大切なこと」「子育てサ・クルは「続けること」が重要であること」の提言があった。</p>
	<p>(2)「リーダーの交流会をしよう」 助言者：松山東雲女子大学教授 塩崎千枝子 コーディネーター：大阪府「ミズ・プランニング/情報アドバイザー」 須田 和 事例報告者：北海道「子育てサークル やんちゃクラブ」 田西 朋美 リーダーにかかる負担をなくすために、「リーダーの交代制」（リーダーは3人1組、8回（2か月）のサークル活動の企画運営）のアイデアが報告された。また、「リーダーを支える人材やシステムが必要なこと」「サークルとサークルをつなぐネットワークを作り、リーダー同士が相談できるようにすること」との意見が参加者より出された。また、これからのリーダー像として「常にメンバーの先を走るイメージから、しっかりしたビジョンを持ちながらも、コーディネーターやファシリテーターの役目が果たせるリーダーに変革すること」が重要であると指摘された。</p>

13:30 ~15:30 第1部	<p>(3)「ネットワークを広げよう」</p> <p>助言者：福岡教育大学教授 コーディネーター：宮城県「AMC」 事例報告者：山形県「やまがた育児サークルランド」</p> <p>井上 豊久 伊藤仟佐子 野口比呂美</p> <p>「ネットワーク化」は、「子育てサークルをつなぐだけでなく、行政、民生児童委員などともネットワークをつなぐこと」「行政との連携が難しいこと」が出された。また、ネットワーク化の留意点として、活動を共に行うこと メンバーに参画意識を持たせ、たくさんの外部者と連携すること 役割分担のシステム化と約束事を文章化すること 広報活動を行うこと 長期的な展望を持つこと ネットワークしていく過程を大事にすること ネットワーク化の利点、欠点を明確にしておくことがあげられた。</p>
	<p>(4)「行政と手をつなごう」(衛星放送を使って、愛知会場と二元中継)</p> <p>助言者：国立女性教育会館主任研究員 コーディネーター：埼玉県「新座子育てネットワーク」 事例報告者：広島県「呉市すこやか子育て協会」 事例報告者：愛知県「子育てネットワーカーさくらんぼ」 事例報告者：愛知県「子育てネットワーカー尾張北」</p> <p>中野 洋恵 坂本 純子 中岡 博美 江口かおり 藤岡喜美子</p> <p>行政と連携をしていく上で、「まず、メンバーの人材育成とネットワーク化を図り、グループのパワーアップを図ること」「市民の自主活動と行政の支援のバランスが重要であること」「行政と住民が対等な立場で行い、お互いのことを聞く耳を持つこと」「縦割り行政を非難するだけでなく、地域を知る住民が子育て支援の観点で行政を横断的に繋げていくこと」「行政がしなければいけないこと」と「住民でなければできないこと」があり、互いの性質を理解することが大切であること」との意見が出された。</p>
	<p>(5)「今どきの子育て支援を考えよう」</p> <p>助言者：恵泉女学園大学教授 コーディネーター：神奈川県「ままとんきっず」 事例報告者：埼玉県「子育てサポーター チャオ！」</p> <p>大日向雅美 有北いくこ 雲雀 信子・岡本 和子</p> <p>よりよい子育て支援のあり方について話し合い、「子育て支援者として、深刻な問題を抱える親を見分ける能力を高めること」「学生から祖父母世代までを巻き込んだ子育て支援をやっていくこと」「親と同じ視点に支援者が立つ重要性」が確認された。また、「母親の生活実態を丹念に把握し、それに応じた支援をすること」「子育て支援は親育ての支援でもあること」「今後の日本の進む方向から、男女共同参画の視点にたった子育て支援が重要になること」も提言された。</p>
	<p>【子どものパート】</p> <p>『子ども体験活動』コーナー</p> <p>(1)木工クラフト・ストーンペインティング</p> <p>異年齢グループで、木や石を使った工作や自由遊びなどの体験活動をした。</p> <p>『家族ふれあい体験活動』コーナー</p> <p>(1)里山の自然体験(野原で遊ぼう！)</p> <p>(2)世界の料理体験(作って食べて世界を実感！)</p>

主 催 こころの子育てインターねっと関西、独立行政法人 国立女性教育会館
 後 援 文部科学省、厚生労働省、大阪府、大阪府教育委員会、大阪市、大阪市教育委員会、NHK大阪放送局、毎日新聞大阪社会事業団
 開催日時 平成14年7月13日（土）11：00～16：00
 場 所 大阪府大阪市立西成区民センター
 参加者 330名（女性約260名、男性約70名、子ども34名）
 日程と概要

11：00 ～12：30 第1部 ・全体会	1 講演「親と子の心の発達 - 子育て時代をどう生きるか - 」 講 師：精神科医・大阪人間科学大学教授 「こころの子育てインターねっと関西」顧問 服部 祥子 2 基調提案「子育てネットワークの意義と可能性」 提案者：和歌山大学生涯学習教育研究センター長・教授、アトム共同保育所長 「こころの子育てインターねっと関西」副代表 山本 健慈
13：30 ～16：00 第2部 ・分科会	(1) 講義と質疑応答 子育て支援の基本的戦略-子育て支援がほんとうに機能するために - 講 師：「こころの子育てインターねっと関西」事務局長、 大阪人間科学大学教授、精神科医 原田 正文 司 会：大阪府立看護大学医療技術短大 赤井 綾美 (2) 『子育てネットワーク』各地の取り組み - ネットワーク活動交流 - 報告者：北海道「子育てネットワークとかち『ローズマリー』」 正村紀美子 報告者：石川県「育児サークルネットワーク・かなざわ」 坂本 千佳 報告者：広島県「東広島・加茂地域子育てネットワーク『りとりはんど』」 檀上 英子 コーディネーター：「子どもの相談システムを考える会」代表 山野 則子 コーディネーター：「筑豊子育てネットワーク」元代表 稗田 佳子 「よその子育てネットワークは、どんな活動をしているのか」、参加者の参考になるように互いの活動を出し合い、交流を図った。 (3) 『子育てネットワーク』を続けていくために - 市民のニーズに添った支援とは - 報告者：埼玉県「新座子育てネットワーク」 坂本 純子 報告者：三重県「子育てネットワークわいわいねっと」 清水 旬子 コーディネーター：北九州市立大学助教授 恒吉 紀寿 コーディネーター：「乳幼児子育てネットワーク『ひまわり』」元代表 砂野加代子 各地に発足している子育てネットワークを長く存続させるために、「子育てネットワークとは何か」「専門職の役割は何か」「行政の支援の重要性」について話し合った。 (4) 地域づくりと『子育てネットワーク』- 行政・地域とどうつながるか - 報告者：大阪府「高槻育児サークルネットワーク『ティピー』」 木下 郷子 報告者：大阪府「熊取子育てネットワーク」 棚村 千鶴 コーディネーター：和歌山大学生涯学習教育研究センター長・教授、アトム共同保育所長、「こころの子育てインターねっと関西」副代表 山本 健慈

13:30 ~16:00 第2部 ・分科会	<p>経験を積んできた子育てネットワークが、子育てだけでなく、地域や社会、時代の実情に広く目を向け、さらなる発展につながるように、「ネットワークの役割」について話し合った。</p>
	<p>(5) 地域の子育て資源としての学校にかかわる - 学校とどう手をつなぐか -</p> <p>報告者：大阪府「貝塚子育てネットワークの会」 沼野 伸子</p> <p>報告者：奈良県「へぐりCO育てネット」 赤松 邦子</p> <p>コーディネーター：大阪府障害者福祉事業団 雲井 弘幸</p> <p>コーディネーター：「箕輪市地域子育て支援センター」 橋本 真紀</p> <p>学校を抜きにしては考えられない「学童期・思春期の子育ての悩みや問題」を解決するために、学校と市民活動の接点について、話し合った。</p>
	<p>(6) 次世代の親教育と『子育てネットワーク』</p> <p>報告者：福岡県「乳幼児子育てネットワーク『ひまわり』」 松永真津美</p> <p>報告者：大阪府「心の子育てネットにしよどがわ」 原 博美</p> <p>コーディネーター：子育て支援グループ『小さな手』代表、小児科医 大阪人間科学大学非常勤講師 福井 聖子</p> <p>コーディネーター：貝塚市立公民館職員、「貝塚子育てネットワーク」前代表 中川 知子</p> <p>「子育てのしんどさを経験した今の親たちが、次の親になる人たちにネットワークを通じて何を伝えられるか」「活動の中で育ってきた人たちを活かす場作り」について、話し合った。</p>
	<p>(7) 新しい子育て支援メニューの開発とNPO</p> <p>報告者：山形県「やまがた育児サークルランド事務局」 野口比呂美</p> <p>報告者：神奈川県「おやこの広場『ビーのビーの』」 原 美紀</p> <p>コーディネーター：週刊「教育プロ」編集長 宮坂 政宏</p> <p>コーディネーター：大阪成蹊女子短期大学非常勤講師 寺田 恭子</p> <p>最近、NPO法人化した子育て支援を目的としたネットワークが誕生し、子育てサロンや広場など新しい支援メニュー開発が進んでいる様子を知り、NPOのメリット、デメリットを話し合った。</p>

参加者の評価

参加後の感想では、「非常に実際的な話が聞けてよかった。」「多くの事例を聞くことができてよかった。」「今、悩んでいることへの『進む方向』が見えてきた。」などであった

(2)-2 こころの子育てインターねっと関西、高槻子育てネットワーク ティピー

「全国子育てサークル交流支援事業」

趣 旨

子育て真っ最中の親たちが、地域で自主的に活動している「子育てサークル」などのグループ子育てが、現代の子育て環境を改善する上で大きな役割を担うことを知る機会とする。そして、参加者が視野を広げ、今後の子育て環境によい影響を与えることを期待する。

主 題 「家族で、地域で、サークルで、みんなで育もう子育ての輪」

主 催 特定非営利活動法人 高槻子育てネットワーク ティピー

こころの子育てインターねっと関西、独立行政法人 国立女性教育会館
 後 援 文部科学省、厚生労働省、大阪府、大阪府教育委員会、高槻市、
 高槻市教育委員会、NHK大阪放送局、毎日新聞大阪社会事業団
 開催日時 平成14年12月7日(土) 12:30～16:00
 場 所 大阪府高槻市立総合市民交流センター
 参加者 大人230名、子ども56名 計286名



第1部・講演「自分らしさの子育て」



第2部・分科会

日程と概要

<p>12:30 ～13:45 第1部 ・全体会</p>	<p>1 講演「自分らしさの子育て」 講 師：精神科医・大阪人間科学大学教授 「こころの子育てインターねっと関西」顧問 服部 祥子 (講演の要旨) 親になったとき人間は、「個としての親自身の欲望」と「子育てする親」との調整を図って生きていくが必要になる。しかし、はじめからこの調整がうまくできるはずはなく、揺らぎがでてくるのは当然である。親としての混乱を見守ってやるのが大切になる。そして、「親自身がやりたいこと」と「子育てする親としてやるべきこと」の両者が溶け合うことで『自分らしい子育て』となり、生物体としての人間の幸せな人生となる。子育て支援は、「子育てのしんどさ」を取ってあげるのではなく、『しんどいことの本当の意味』である「親であることの喜び」が感じられるよう、「自分らしさが豊かになる子育て」を支援することである。 また、子どもが自己を確立するときの「火種」は、出産を子どもに語ることから始まる。子どもは、自分が産まれてきた時の道筋を振り返ることで、生まれてきた運命やありのままの自分を受け入れる心構えをつくる。自分の誕生を聞いた子どもは、そのことで親になる準備をし、また、親になろうとするのである。 (会場の様子) 会場に用意された160席は、ほぼいっぱいになり、立ったまま聞いている参加者もいた。参加者は真剣に講演を聞き、一生懸命にメモをとる姿も見られた。</p>
	<p>(1) 子育て中の親の悩みを語ろう、聞こう - 今なぜ子育てがしんどいのか - 報告者：「京都子育てネットワーク」代表 藤本 明美 コーディネーター：和歌山大学生涯学習教育研究センター長・教授、アトム共同保育所長、「こころの子育てインターねっと関西」副代表 山本 健慈</p>

	<p>子育て支援の必要性が広く浸透してきた近頃でも、「なぜ支援が必要なのか」「親を甘やかしているだけ」という意見は根強く残っている。そこで、「今、なぜ、子育てがしんどいのか」について、子育て現役中の親がその生の声を語り、それらをもとに「今の子育ての大変さ」を理解し、「大変さ・しんどさ」を支える支援のあり方を考えた。</p>
14:00	<p>(2)グループ子育てについて考えよう - 作り方、運営方法、支援のしかた - 」 報告者：「筑豊子育てネットワーク」元代表 吹田市民塾「子どもの視点にたったまちづくり」塾長 稗田 佳子 報告者：子育て支援グループ「小さな手」代表、小児科医 福井 聖子 コーディネーター：貝塚市教育委員会社会教育主事 村田 和子 子育て支援が進み、自主サークルの存続が難しくなっている。支援を受けてできたグループもいろいろな問題を抱えている。活動内容自体も子どもの年齢に合わない内容が増えたり、教室化する傾向にある。報告をもとに「これからのグループ子育て」について話し合った。</p>
~16:00 第2部 ・分科会	<p>(3)「働く親の地域での仲間づくり - 働く親のネットワーク - 」 報告者：「てのひら」代表（大阪市生野区） 小学校養護教諭 三上 眞美 コーディネーター：アトム共同保育所長代理 市原 悟子 「子どもが病気になったとき、近所に助け合える仲間がいない。」「保育所の親同士のつながり方がむずかしい。」「小学生の放課後の居場所がない。」など、働く親の悩みは多い。地域活動に参加したり、サークルを作ったりと積極的に関わっている実践報告をもとに話し合った。</p>
	<p>(4)ほんとうに必要な子育て支援とは？ - 現状と今後の方向と可能性 - 」 報告者：地域情報誌「ゆめこびと」編集長（神奈川県藤沢市） 清水 正江 コーディネーター：「こころの子育てインターねっと関西」事務局長、 大阪人間科学大学教授、精神科医 原田 正文 「こころの子育てインターねっと関西」には、子育て現場で活動中の親がたくさんいる。支援職として親の生の声を大事にしながら仕事をしている人もたくさんいる。みな、全国各地で進められている子育て支援と現場の親の思いとのギャップを感じている。そこで、報告や参加者の意見をもとに「子育て支援の本質、これからの子育て支援の動向」について話し合った。</p>
・サークル あそび 体験	<p>~子どもといっしょに楽しい時間をすごしましょう~ 「サークル遊びを楽しもう」...クリスマス工作、わなげ、宝さがし、お買い物ごっこなど... わらべうた、リトミックで心と体をほぐそう。 ピアノの生演奏の流れる会場で、身近にある物を使って作った「わなげ」やお買い物ごっこの「バーコードを読み取るレジスター」などで、親子で楽しく遊んだ。会場は、子どもたちの元気な歓声であふれていた。</p>

参加者の評価

参加後の感想では、「運営の仕方がわかった。地元に戻ってがんばりたい。」「とても参考になった。自己紹介をして、互いの興味を分かち合えたので、とてもよかった。」「時間は半日だったが、中身がギュッと詰まった会であったと思う。」などであった。



「サークル遊びを楽しもう」

(3) かながわ子育てネットワーク、(財)横浜市女性協会

「LOVE & POWER フェスティバル『あなたのままでいいよ、子育て』」

趣 旨

- ・密室育児や子育てに悩む母親や父親に向けて、困ったときに支え合える仲間がいる、地域にはさまざまな立場で子育てを応援している人や拠点、グループなどの社会資源があるという情報やメッセージを伝える。
- ・子育て中でも、女性（男性）がありのままの自分を認め、「私」を解放して楽しめる時間と場所を提供する。

主 題 「Love & Powerフェスティバル～あなたのままでいいよ、子育て」

主 催 かながわ子育てネットワーク、(財)横浜市女性協会、
独立行政法人 国立女性教育会館

後 援 文部科学省、厚生労働省、横浜市、横浜市教育委員会、テレビ神奈川、
神奈川新聞社

開催日時 平成14年10月20日（日）13：30～15：45

場 所 横浜女性フォーラム ホール

参加者 300名（女性260名・男性40名、内子ども30名）
保育（3か月～未就学児50名）

日程と概要（「フォーラムまつり2002」同時開催）

13：30 ～13：50 活動紹介	活動紹介：かながわ子育てネットワーク代表 「かながわ子育てネットワーク」の活動紹介をした。それに先立って、主催者あいさつ、来賓あいさつがあった。	有北いくこ
13：50 ～14：25 第1部 リレートーク	子育てリレートーク 「私が“わたし”らしくいるためのLOVE & POWERとは・・・」 出演者：湘南こそだちファクトリー funfunトライアングル 会社員 3児の父 よこはま母乳110番 よこはま1万人子育てフォーラム かながわ子育てネットワーク おやこの広場 ぼっぽの家 司 会：子育てサークル「funfunトライアングル」代表	大塚 恵 郷原 朱満 原 正道 本間奈穂子 松岡 美子 比佐 英之 光藤 洋子 稲垣麻由美

	<p>子育て中の自助グループメンバー、親子の地域たまり場責任者、子育て支援で活動する妻を支える夫、育児休業を取得した男性など7名の参加者の様々な立場から、子育てに必要なLOVE & POWERについてのメッセージを送った。男性の育児休業取得や現場復帰後の苦労話（同性の目の冷たさ）子育て中の孤独と悩み、人の声が励みになる、人とつながることの大切さ、困ったときに周囲に助けてといえる力の大切さなど、7名それぞれの思いが会場の参加者へと届けられた。</p>
<p>14:30 ~15:45 第2部 コンサート</p>	<p>まのあけみコンサート「減点ママの原点ソング」</p> <p>出演者： まのあけみ 舞台アート&チャシイラスト： ロコさとし 司 会：子育てサークル「ちゃおNET」代表 金子美津子</p> <p>3人の男の子を持つ母であり、シンガーソングライターでもある“まのあけみ”の子育てトークライブ。“生きてくれるだけでいい”と思ったという三男誕生を唄った「蓮音（レオン）誕生」や手話で唄う「空」、1993年アメリカ留学中に射殺された服部剛丈君のお母さんの詩に曲をつけたことなど、彼女自身の経験から生まれた歌と母の心が会場を包み込んだ。</p>
<p>その他</p>	<p>ホール入口において、子育て支援関連グループ13団体が展示ブースを出展。</p> <p>【出展グループ】かながわ子育てネットワーク、ままとんきっず、湘南こそだちファクトリー、湘南子育てサポート、ぽっぷ、ゆめこびと、funfuntライアングル、よこはま1万人子育てフォーラム、ビーのビーの、神奈川子ども未来ファンド、よこはま母乳110番、子育てまち育て塾、ちゃおNET、おやこの広場 ぽっぽの家</p>

参加者の評価

参加後の感想では、「コンサートからパワーをもらい、うれしかった。子育てをがんばろうという意欲が出た。」「リレートークの一人ひとりの言葉がまさにパワーだった。涙が出るほど共感した。」「ありのままの子どもを愛すればいい。本当にその通りだと思う。今日は本当に来てよかった。」「久しぶりに家を出た。7か月の次男と来たが、とてもリフレッシュできた。」「私も少し余裕ができたなら、人を励ませるようになりたい。」などであった。



「Love & Powerフェスティバル」



「子育て支援関連グループ」展示ブース

6. 全体の評価

- (1) 開催団体、開催機関の個性が生かされた、特色ある研究協議会が行われた。初年度としては、全国3地域で本協議会を実施したことで、「子育てサークル」の必要性や役割についての認知度を高めることができたと思う。
- (2) ヌエック以外の開催地においては、それぞれの地域の子育てサークル関係団体、関係機関（教育委員会、生涯学習センター、女性関連施設等）の協力により、広範な参加者を得て、その地域の課題に応じた効果的な研究協議会が行われた。また、関係者（子育てサークルやネットワークのリーダーやメンバー、子育て支援者、行政担当者等）からなる実行委員会を開催し、いっしょに企画、運営することで、地域のネットワーク化が促進された。
- (3) 平成14年度は、「子育てサークルの交流支援」の観点で実施したが、さらに家庭教育支援・子育て支援を充実させるために、子育て中の親や子育てサークル・子育て支援団体・行政・関係機関を結ぶ役割を担っている「子育てネットワーク」に焦点をあてた企画とするとともに、研究協議にも重きを置きたいと考える。
- (4) 全国3地域で実施する事業を関連させ、その成果を積み上げるために、企画委員会を設けたい。企画委員は、子育てネットワーク関係者、有識者、家庭教育行政担当者等から5名程度とし、研究協議会全体の企画への助言、共催機関の選考、広報への協力、評価を行うことが考えられる。
- (5) 大阪、横浜会場での開会行事で、文部科学省の挨拶（家庭教育をめぐる状況と支援施策の説明）は、時宜を得て有効な情報提供であり、ヌエックの情報提供と合わせて、次年度にも実施していきたい。
- (6) 「父親が積極的に参加できるプログラム」など新しい視点を積極的に取り入れ、これらを生かした企画としたい。
- (7) ヌエックで行う「子育てサークル等支援に関する調査研究」、「子育てネットワーク等子育て支援団体についての情報提供のあり方に関する調査研究」との連携を図り、その成果を研究協議会で生かす。

（事業課専門職員 五味 厚子）

アンケート集計結果（国立女性教育会館開催部分）

回答率229名 [回答率47.5%] 参加者計698名（内大人482名、子ども216名）

回答率は229/482で計算

男女別 女性182名 男性18名 不明29名

次の各項目について、協議会議の感想後の感想にもっとも近いもの

他の子育てサークルと交流が図れた

	女性	男性	無記入	人数	%
そう思う	23	2	5	30	13.1
少しそう思う	40	5	1	46	20.1
あまりそう思わない	31	5	1	37	16.2
そう思わない	32	5	4	41	17.9
無記入	56	1	18	75	32.7
合計	182	18	29	229	100.0

子育てサークルの情報を得られた

	女性	男性	無記入	人数	%
そう思う	70	3	11	84	36.7
少しそう思う	60	10	7	77	33.6
あまりそう思わない	10	2	0	12	5.2
そう思わない	4	2	2	8	3.5
無記入	41	0	7	48	21.0
合計	185	17	27	229	100.0

子育てに関する情報が得られた

	女性	男性	無記入	人数	%
そう思う	62	3	8	73	31.9
少しそう思う	45	7	6	58	25.3
あまりそう思わない	25	5	0	30	13.1
そう思わない	9	1	20	10	4.4
無記入	49	2	7	58	25.3
合計	190	18	21	229	100.0

親がともに活動できる内容であった

	女性	男性	無記入	人数	%
そう思う	40	5	7	52	22.7
少しそう思う	22	2	3	27	11.8
あまりそう思わない	13	1	0	14	6.1
そう思わない	20	4	2	25	10.9
無記入	89	5	17	111	48.5
合計	184	17	28	229	100.0

参加した全体の感想

	女性	男性	無記入	人数	%
期待した以上だった	49	2	8	59	25.8
ほぼ期待したとおりだった	86	10	14	110	48.0
期待してたほどではなかった	15	2	3	20	8.7
全く期待はずれだった	1	1	0	2	0.9
無記入	31	3	4	38	16.6
合計	182	18	29	229	100.0

女性学・ジェンダー研究フォーラム

1. 趣 旨

女性のエンパワーメントと女性の人権の確立に資する活動をつくるため、女性学・ジェンダー研究と女性のエンパワーメントにかかわる多様な研究・教育・実践活動や成果を出し合い、情報交換を行うとともにネットワークづくりをすすめる。

今年度は、「21世紀の男女平等・開発・平和 社会に参画する」を主題とし

た。21世紀に入り世界を巻き込んだテロや戦争が発生し、多くの人々が犠牲になっている。難民になったり、教育を受けられないなどさまざまな制約を受け、悲惨な状況に追い込まれている女性も少なくない。また、わが国でも経済不況に伴う社会不安が広がりつつある。

一方、わが国においては、男女が互いに人権を尊重しつつ、責任も分かち合い、その個性と能力を発揮して生きることができる男女共同参画社会の実現が最重要課題と位置付けられている。激動する国際情勢、少子高齢化の進展や長引く経済不況など社会経済情勢の変化に対応するためにも、どうすればより多くの女性が社会に参画し、社会の流れを変えていくことができるのか、その方法と課題を考える機会とする。



初日のアトラクションと超満員の会場

2. 主 題

「21世紀の男女平等・開発・平和 - 社会に参画する」

3. 開催期日

平成14年 8月23日（金）～25日（日）2泊3日

4. 参加者

（1）参加者数	1,787名
内訳 「一般参加者」	1,392名
「自主企画ワークショップ運営者」	395名

（2）性別・年代別 （名）

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	不明	計
女性	7	106	152	354	492	316	49	—	119	1,595
男性	—	15	43	47	40	24	6	—	17	192
合計	7	121	195	401	532	340	55	0	136	1,787

(3) 職業・所属別

(名)

職業・所属	人数	職業・所属	人数	職業・所属	人数
社会教育施設	15	小・中・高校教諭	67	学生	69
女性施設	83	団体・グループ	515	主婦（夫）	53
教育委員会	21	マスコミ	4	不明・無職	317
女性行政	109	議員	40		
その他行政	162	企業	148		
研究者・大学教員	74	その他有業者	110	合 計	1,787

(4) 都道府県別

(名)

都道府県	人 数	都道府県	人 数	都道府県	人 数	都道府県	人 数	都道府県	人 数
北海道	12	埼玉県	335	岐阜県	16	鳥取県	7	佐賀県	1
青森県	14	千葉県	66	静岡県	35	島根県	12	長崎県	3
岩手県	20	東京都	264	愛知県	23	岡山県	35	熊本県	-
宮城県	17	神奈川県	94	三重県	39	広島県	10	大分県	9
秋田県	41	新潟県	35	滋賀県	20	山口県	12	宮崎県	22
山形県	18	富山県	21	京都府	21	徳島県	7	鹿児島県	8
福島県	11	石川県	38	大阪府	80	香川県	6	沖縄県	11
茨城県	54	福井県	1	兵庫県	11	愛媛県	11	不 明	14
栃木県	64	山梨県	77	奈良県	5	高知県	11	合 計	1,787
群馬県	100	長野県	49	和歌山県	1	福岡県	26		

5 . 日 程

月 日	時 間	プ ロ グ ラ ム
8 / 23 (金)	12 : 40 ~ 13 : 25	(1) 開 会 アトラクション「吉岡しげ美 想ひあふれて女の詩を歌う」 音楽家 吉岡しげ美 あいさつ 本フォーラム企画委員長 / 文京学院大学教授 山下 泰子
	13 : 30 ~ 15 : 30	(2) パネルディスカッション「社会参画 わたし流」 講 師 WINWIN代表 / 文京学院大学大学院教授 赤松 良子 特定非営利活動法人かながわ・女のスペースみずら事務局長 阿部 裕子 財団法人家族計画国際協力財団企画開発部長 池上 清子 有限会社でじまむワーカーズ代表取締役 寺本 哲子 コーディネーター 立命館大学教授 / 本フォーラム企画委員 中村 正
	16 : 00 ~ 18 : 00	(3) ワークショップ
	18 : 45 ~ 20 : 15	(4) 交流会
8 / 24 (土)	9 : 30 ~ 11 : 30	(5) ワークショップ
	13 : 00 ~ 15 : 00	(6) ワークショップ
	16 : 00 ~ 18 : 00	(7) ワークショップ
	19 : 00 ~ 21 : 00	(8) 自由交流
8 / 25 (日)	9 : 30 ~ 11 : 30	(9) ワークショップ
	11 : 30 ~	(10) 閉 会
(フォーラム期間中実施)		(11) 交流のひろば (12) 情報のひろば

6. 自主企画ワークショップの応募状況

(1) テーマワークショップ

(件)

	テーマ	件		テーマ	件
1	女性の政策・方針決定過程への参画	4	9	創造活動への参画	2
2	女性とポジティブ・アクション	1	10	社会参画と教育 / 学習	3
3	男女共同参画条例	9	11	開発と女性 / ジェンダー	3
4	行政と市民参画	15	12	紛争とジェンダー	-
5	経済活動と女性 / ジェンダー	6	13	男女共同参画	4
6	地域活動とジェンダー	2	14	不明	-
7	組織とジェンダー	1			
8	NGO・NPO	2		総 計	52

(2) 自由ワークショップ

(件)

	テーマ	H14	H13	H12	H11	H10	H9	H8
A	女性問題・ジェンダー研究	5	3	15	7	11	10	17
B	女性の教育・学習	3	5	8	7	11	3	4
C	女性政策	1	9	8	9	6	13	5
D	女性施設	—	—	1	6	3	5	1
E	政策決定の場への女性の参画	—	2	4	7	6	4	4
F	女性と労働	3	—	10	5	10	6	4
G	女性と高齢社会	7	2	3	3	3	1	—
H	女性と人権	1	3	3	1	2	—	1
I	女性に対する暴力	13	6	12	10	7	2	—
J	女性のからだ・セクシャリティー	4	5	5	8	7	9	2
K	女性とメディア	1	1	2	2	5	6	2
L	女性と表現	5	4	5	10	10	12	4
M	女性情報	2	—	—	2	2	—	—
N	GOとNGOとの連携	1	1	2	—	4	2	—
O	ネットワークづくり	1	2	3	—	2	2	—
P	グループの活動報告	5	1	1	—	9	—	—
Q	学校教育における男女平等教育	5	4	8	9	8	11	3
R	家族・家庭・子ども	11	7	11	7	11	15	7
S	開発と女性	1	1	2	2	3	3	3
T	平和と女性	—	2	—	—	—	—	—
U	女性と環境	1	—	—	—	—	1	—
V	女性史	1	—	—	—	—	—	3
W	男性学・男性問題	—	1	1	—	—	—	—
	総計	71	59	104	95	120	105	60

7. 企画委員会

(1) 企画委員(平成13年度からの継続)

(五十音順、敬称略)

企画委員長	山下 泰子	国際女性の地位協会 / 文京学院大学教授
委 員	植野妙実子	日本女性法律家協会 / 中央大学教授
	内海崎貴子	女性学研究会 / 川村学園女子大学助教授
	江原由美子	東京都立大学教授
	桂 容子	日本女性学研究会 / 京都学園大学講師
	中村 正	立命館大学教授

萩原なつ子	国際女性学会 / 宮城県環境生活部次長
牟田 和恵	日本女性学会 / 甲南女子大学教授
山谷 文孝	青森県総合社会教育センター社会教育主事

8. プログラムの概要

(1) アトラクション「吉岡しげ美 想ひあふれて女の詩を歌う」

音楽家

吉岡しげ美

日本の女性詩人の作品に曲を付けて歌い続けている吉岡しげ美氏が、金子みすずの「私と小鳥と鈴と」、茨木のり子「わたしが一番きれいだったとき」、小林カツ代「緑の星に」、万葉集「恋ひ恋ひて」、与謝野晶子「君死にたまふことなかれ」に自作の曲を付け、ピアノを演奏しながら歌った。

(2) パネルディスカッション「社会参画 わたし流」

講師

WINWIN代表 / 文京学院大学大学院教授

赤松 良子

特定非営利活動法人かながわ・女のスペースみずら事務局

阿部 裕子

財団法人家族計画国際協力財団企画開発部長

池上 清子

有限会社でじまむワーカーズ代表取締役

寺本 哲子

コーディネーター

立命館大学教授 / 本フォーラム企画委員

中村 正

「21世紀の男女平等・開発・平和」を考えていく上で、政治、行政、あるいは経済・地域活動等、さまざまな分野における女性の社会参画の現状と課題を明らかにするとともに、その課題に対する女性自身の今後の取組について考えることをねらいとしてパネルディスカッションを実施した。内容は以下のとおりである。

赤松 良子 < WINWIN代表・文京学院大学大学院教授 >

私の社会参画は、まず国家公務員として36年働き、その間政策決定の場にいたということである。「女性差別撤廃条約」を日本が批准するにあたり、労働省の婦人局長として男女雇用機会均等法の制定に携わり、仕事として一生懸命働いた。それと同じに、ネットワークをつくるのが非常に楽しく、大事だと思っていた。研究会に所属し、学会で発表したり、研究論文を書いたこともある。また、大学の女性だけの同窓会を作ったり、国家公務員の女性キャリア官僚のネットワークを作った。

公務員を退職後は、民間NGOに活動の中心を移し、女性差別撤廃条約の研究と普及を目的とした「国際女性の地位協会」の会長や、日本の女性を政治にもっと参画させることを目的とした「WINWIN」の代表を務めている。WINWINは、初めは300人余りで立ち上げたが、



パネルディスカッション 社会参画 わたし流」

現在は1,000人を超えていて、これからも発展させなければいけない。選挙になると、議員として推薦できる人を決定しなければならないので、常にいろいろ考え、アンテナを張っていることが大事である。民間のボランティア活動は、偉いも何もなく、だれもが同じことをやるとよく認識していなければいけない。

社会参画するには1人よりグループを作ることが有効な場合が多いが、そのときグループづくりに必要な条件はまず理念であり、目的をはっきりさせることである。それから中核になる人が数人いればかなりのグループをつくることができる。お金はなくても、ボランティアを活用してみる。また事務処理能力のある人が最低1人は必要であり、事務局の体制がきわめて重要である。「正しく、楽しく、たくましく」という標語はグループづくりやいろいろな活動にあてはまる標語ではないだろうか。

阿部 裕子<特定非営利活動法人 かながわ・女のスペースみずら事務局長>

私は民間企業に勤めていて、労働組合の活動をしていたが、組合の中でも女性に対する理解はなく、むしろ差別が横行していた。労働組合にも失望していた中で、女性は差別を受け入れながらもなんとかやっていかなければならないと考え、「みずら」という女性のための相談所を1990年に開設した。

その当時、スポンサーや団体もなく、個人の女性が集ってお金を出し合い常駐スタッフをそろえることは無謀ともいえることであった。周りからの反対も多かったが、2年間を準備に費やし、働く女性の相談だけではなく、いろいろな問題を抱えた人々と共に解決策を探っていこうと始めた。行政への相談より民間に相談するというニーズが時代的背景にあり、多くの相談が寄せられた。

やがて、人身売買で日本に連れてこられ、いわれなき借金を重ね強制売春をさせられたアジアの女性を匿い、帰国の援助を行った。また、大使館、市民団体・グループ、入国管理局、警察などからの依頼で一時保護を行ったが、その件数は200件を超えた。このような状況の中でシェルターを新に立ち上げ、独立させた。アジアの女性が少なくなると、今度は横浜市、そして神奈川県内の福祉事務所から緊急一時保護というかたちで、ドメスティックバイオレンスの被害者である母子を預かるようになった。また県に強力に働きかけ、シェルターの数を増やした。昨年シェルターに緊急一時保護した件数は112件で、子どもを含め197人にのぼり、常に満室の状態である。

相談については、現在年間1,500から1,600件程度寄せられていて、暴力の問題は非常に多い。またセクシュアルハラスメントや性的な被害についての相談もあり、セクシュアルハラスメントの相談は年間70、80件ある。事実関係が整理されていれば、私たちの団体で相手と交渉し解決を図り、できるだけ「たらい回し」をしないよう努力し、「ケースワーク型の相談」、「解決型の相談」を目指している。

ひとり一人の女性からすれば、シェルターや私たちの団体は、一瞬の通過点であり、よりよい通過点でありたいと心がけると同時に、「明日は忘れられる今日の友」であることをきちんと押さえていないと、なかなかこのような活動は継続できない。また、私たちの相談室やシェルターが縮小したり、解散したりする日が来ることを待ち望みたい。

池上 清子<財団法人 家族計画国際協力財団企画開発部長（ジョイセフ）>

学生のとき、「多様性、すなわちいろいろなものの見方があるのではないか」「自分が全てを知らなくてもいい、誰がその情報を知っているか、どこに行けばその情報にアクセスで

きるかという方法論を知っていればいいんじゃないかということ」の2つを学んだ。4年制の大学を卒業した女性にはなかなか仕事の無い時代で、紹介されたところへ一度就職した。しかし自分がやりたいことと違い、国際公務員を目指して大学院に戻った。仕事を一度経験してから自分が戻りたくて大学院に戻ったので、より教育のありがたさや大切さがわかった。

その後難民高等弁務官事務所を経て、ニューヨークの国連本部の人事で仕事をしていましたが、もう少し草の根の仕事がしたくて、ジョイセフというNGOに連絡を取った。ジョイセフは昨年亡くなった加藤シズエさんが会長をつとめられていて、「女性が自分で欲しいときに欲しいだけの子どもを産めるような社会を作る」という運動をしていた。日本国内だけでなく、その経験を開発途上国に伝えてプロジェクトをしている団体である。

私は、今までアジア、アフリカ、中南米の3つの地域、26の途上国で母子保健、家族計画、リプロダクティブヘルスのプロジェクトを実施してきた。女性が主体的に自分の健康や人生設計について考え決定していくための問題 - 母子保健、思春期保健、性教育、家族計画、中絶・不妊・HIV（エイズ）、性感染症など - がプロジェクトの核心である。

カンボジアでは、売春婦にどうすればHIV（エイズ）に感染しないかという教育をしている。また、夫婦で感染している場合も夫の治療費が先決で、妻の治療、入院費までまわらず、妻は家で亡くなることも多いが、ピアカウンセリングを通して、若い人たちが自分達の得た適切な情報を次の若い人へ伝えていくことで、エイズの予防教育を行っている。エイズは、男性よりも女性のほうが、何倍も感染の可能性が高い。そのため女性が自分で主体的にエイズ予防に関わっていかなければなかなか予防が進まないということが現実にある。

日本では、性の問題が人生設計をする上で落ちてしまうことがあるが、女性がそれを十分に自覚しているかどうかはその人の人生に大きな影響を持ってくる。カンボジアの状況はどこか遠い国の問題ではなく、日本にも同じ問題があると認識すべきである。

寺本 哲子<有限会社でじまむワーカーズ代表取締役>

3年前に主婦3人が出資して「有限会社でじまむワーカーズ」というホームページを作成する会社を作った。社員は出資した3人と登録スタッフで、全員在宅勤務である。1年目は少し赤字だったが、2年目から黒字になり、現在年商2千万円、社員は全員扶養控除を離れている。

私は、文系の4年制大学を卒業したがほとんど就職がなく、そのころ門戸を開けていたコンピューター業界で9年間働いた。結婚し、妊娠出産したが、「出産リストラ」にあり専業主婦になった。その後インターネットを使った母親中心の母親サークル「でじまむ」を立ち上げ、電子メールによる情報交換や、ホームページの運営、パソコン講座などの活動をはじめ、インターネットの可能性を探り、広げる活動をしているグループと一緒に女性がインターネットでどうやって力をつけていくのかというようなボランティア活動してきた。

しかし、ボランティア活動というのは、どうしても「主婦のお遊び」というような見られ方をするので、同じ活動をビジネスでやっている場合と比べ報酬が低く押さえられ、下請けのように使われる状態が見えてきた。報酬が安く抑えられると、仕事をする側も「これぐらいでいいか」という甘えが出てくる。そのような悪循環の中で、「有限会社」という法人化の道を選んだ。法人化することで自分達自身の意識も大きく変わり、対外的

にも行政や大手企業から直接仕事を受けるようになった。在宅勤務のため、私生活とビジネスの区切りをつけることが難しいので、事務所を借りて本格的にやっていこうと考えてる。小さな企業が生き残るためには専門性をださなければならないので、ホームページづくりも女性・環境・教育などの分野に専門化し、他業種へ進出する予定はない。

在宅ワークに夢を描く女性も多いが、食べ物にされている状況もある。お金を貰った以上、プロフェッショナルな仕事をしなければならないのに、どうしても扶養控除の範囲でと考える人が多い。自分が責任をもってやるなら起業が一番であるが、甘えは許されない。しかし自分のライフスタイルを守る生き方をするためには、すでにある会社の仕組みを変えるのは大変であり、新しく自分で作ってしまえば思い通りになる起業を皆さんに勧めている。

(3) ワークショップ

自主企画ワークショップ 123件

主催者提供ワークショップ (10件)

ア 企画委員によるワークショップ (7件)

- ・「フェミニズム国際法学をつくる」 (山下泰子委員長)
- ・「ポルノグラフィの言説をめぐって」 (江原由美子委員・牟田和恵委員)
- ・「フェミニズムの視点から公共性を考える」 (内海崎貴子委員)
- ・「女性をめぐる社会保障と税制度」 (植野妙実子委員)
- ・「女性センターとは何をするとところか」 (桂 容子委員)
- ・「男性をかえるにはどうすればいいのか」 (中村 正委員)
- ・「ジェンダー体操」 (萩原なつ子委員)

イ 国立女性教育会館によるワークショップ・プログラム (4件)

- ・「エンパワーメントのためのジェンダー統計 わかって、使って、確かめて」 (中野洋恵事業課主任研究員)
- ・「国立女性教育会館研究紀要第6号 入選論文報告会」 (高橋由紀事業課研究員)
- ・「無料法律相談」 (彩北法律事務所 吉岡 征雄弁護士)
- ・「アロマセラピー」

(4) 自由交流

企画委員によるワークショップ2件(「女性センターとは何をするとところか」、「ジェンダー体操」)と参加者提案の意見交換会10件

<参加者提案の意見交換会のテーマ及び主催者>

- ・「あなたも起業しませんか。これで起業にふみきれぞ!!」 (主催：女性と仕事研究所)
- ・「クオータ制への疑問・意見をざっくばらんに話し合しましょう」 (主催：クオータ制の実現をめざす会)
- ・「女性たちのユニオンネットワークの可能性を探る」 (主催：女性ユニオン東京)
- ・「インターネットを活用したネットワークづくりを話しましょう」 (主催：LEO通信愛読者交流会)

- ・「条例について話しましょう」
(主催：目黒区男女平等条例を推進する会・くわなウイン)
- ・「スクールセクシュアル・ハラスメント」
(主催：SSH全国ネットワーク)
- ・「CAPのなかま、おしゃべりしよう！」
(主催：ライツオブチャイルドみやざき)
- ・「ICTとHP作り」
(主催：あんずネット)
- ・「老害・ルンペンとジェンダーについて」
- ・「石原都知事『ババア発言』をどう思いますか、心のノートを知っていますか？」

(5) 交流のひろば

自主企画ワークショップの課題・成果の共有、ネットワークの呼びかけ、ワークショップでの配付資料の閲覧等、情報交換を行った。

(6) 情報のひろば

参加者が資料、図書、パンフレット、チラシ等を展示・交換・配布・販売し、女性学・ジェンダー研究、女性のエンパワーメントに関する情報交換を行った。入場者は延べ2,044名。なお、それに伴うコーディネーターは、又エックボランティアが担当した。



「情報のひろば」に集められた多くの資料

9. 今後の課題・展望

- (1) 多くのワークショップを開催しても、一人が参加できるワークショップの数は限られているので、共同ワークショップのあり方やワークショップの時間帯、会場の決定により一層の工夫が必要である。
- (2) 運営者にとって、共同ワークショップは、経済的にも精神的にも負担をしうるのであるため、テーマ・会場・時間・方法を細かく検討した上で、共同ワークショップを調整する必要がある。
- (3) 男女共同参画社会に向け、より一層の男性の参加、とくに若年層の参加を促す必要があり、幅広い広報について検討が必要である。
- (4) 女性学・ジェンダー研究と女性のエンパワーメントに関わる多様な研究・教育・実践活動や成果を出し合うというこのフォーラムの趣旨に照らし合わせると、今後研究者・大学教員の参加者、教育関係者の参加を促す必要がある。
- (5) 交流のひろばについては、会場の選定や参加者への周知方法に工夫が必要である。

10. 参加者の評価

参加者のフォーラムに対する意見としては、「何となく参加したのが申し訳ない内容だった。勉強になった」、「行政関係だが、これからの取組む事業の大いに参考になった」、「来年度はぜひワークショップを持って参加したい」、「今後とも継続的に行わなければならないと思った」、「若い世代にどんどん出てきてほしい」等の意見が多かった。また、「短い時間だが、生きる力をもらった」、「女性のパワーを目の前にして、これからの生きる道標ができた」という意見もあった。

ワークショップ運営者の感想として、「たくさんの質問や励ましを受け今後の活動の指針になった」、「数字を並べた資料やチェックシートだけがひとり歩きすることを今後は一層考える必要があると思う」との意見があった。また共同ワークショップについては、「今回共同ワークショップで行うことで一層実りあるワークショップになった」との意見がある。一方で、「共催は広範な意見交換と情報収集ができる点はよかったが、準備段階でお互いの合意を確認する作業に労力と時間、金銭的負担がかかった」との意見もあった。

(事業課 島田 悦子)

アンケート集計結果

参加者数1,787名(女性1,595名,男性192名)

アンケート回答数548 アンケート回答率30.70%

次の各項目について、フォーラム後の感想にもっとも近いもの

テーマについて情報・知識が得られた

	女性	男性	不明	合計	%
そう思う	243	23	3	269	51.8
少しそう思う	97	17	2	116	22.4
そう思わない	4	0	0	4	0.8
無回答	96	9	25	130	25.0
合計	440	49	30	519	100.0

自分自身の向上・充実ができた

	女性	男性	不明	合計	%
そう思う	209	15	2	226	43.5
少しそう思う	122	27	3	152	29.3
そう思わない	5	0	0	5	1.0
無回答	104	7	25	136	26.2
合計	440	49	30	519	100.0

自分の抱える問題を話し、研究・実践活動の経験や情報を交換できた

	女性	男性	不明	合計	%
そう思う	99	5	2	106	20.4
少しそう思う	135	24	3	162	31.2
そう思わない	47	10	0	57	11.0
無回答	159	10	25	194	37.4
合計	440	49	30	519	100.0

ネットワークづくりをすすめることができた

	女性	男性	不明	合計	%
そう思う	71	5	1	77	14.8
少しそう思う	136	20	4	160	30.8
そう思わない	62	13	0	75	14.5
無回答	171	11	25	207	39.9
合計	440	49	30	519	100.0

研究・実践活動に必要な知識や情報が得られた

	女性	男性	不明	合計	%
そう思う	168	19	2	189	36.4
少しそう思う	137	21	3	161	31.0
そう思わない	10	2	0	12	2.3
無回答	125	7	25	157	30.3
合計	440	49	30	519	100.0

参加した全体の感想

	女性	男性	不明	合計	%
満足	171	20	2	193	37.2
ほぼ満足	218	24	3	245	47.2
不満	11	2	1	14	2.7
無回答	40	3	24	67	12.9
合計	440	49	30	519	100.0

女性情報国際フォーラム

1.趣 旨

双方向性のデジタルネットワークの発達により、どのような情報を選択し、発信するかが個人にも求められる時代となった。こうした時代における女性の課題とICT（情報コミュニケーション技術）の活用について、異なる分野から考えると共に、参加者間の国際的情報ネットワーク形成の推進を図る。

2.主 題

「女性情報のグローバルなネットワークをめざして - 生活に根ざした情報から考える - 」

3.主 催

独立行政法人国立女性教育会館

4.共 催

文部科学省

5.期 日

平成14年10月12日（土）～13日（日）1泊2日

6.参加者

102名

（1）応募者数・定員

応募者数：121名 定員：120名

（2）性別・年代別

	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上	不明	合計
女性	—	21	16	21	28	10	3	99
男性	—	2	—	1	—	—	—	3
合計	—	23	16	22	28	10	3	102

（3）所属別

	行政 関係者	大学教員 ・研究者	幼小中 学校教員	NGO /NPO	会社員	学生	その他	不明	合計
女性	23	12	2	18	4	13	12	15	99
男性	-	-	-	-	-	1	2	-	3
合計	23	12	2	18	4	14	14	15	102



パネルディスカッション



参加者

(4) 都道府県別 19都道府県 (うち 4 指定都市)

都道府県	参加者数	都道府県	参加者数	都道府県	参加者数	都道府県	参加者数
北海道	-	神奈川県	2	京都府	1	香川県	-
(札幌市)	-	(横浜市)	(3)	(京都市)	-	愛媛県	-
青森県	1	(川崎市)	-	大阪府	2	高知県	-
岩手県	-	新潟県	2	(大阪市)	(1)	福岡県	1
宮城県	-	富山県	-	兵庫県	-	(北九州市)	-
(仙台市)	-	石川県	4	(神戸市)	(1)	(福岡市)	-
秋田県	-	福井県	-	奈良県	-	佐賀県	-
山形県	-	山梨県	-	和歌山県	-	長崎県	-
福島県	-	長野県	2	鳥取県	-	熊本県	2
栃木県	3	岐阜県	-	島根県	-	大分県	-
群馬県	1	静岡県	1	岡山県	1	宮崎県	-
埼玉県	11	愛知県	1	広島県	-	鹿児島県	-
千葉県	3	(名古屋市)	(2)	(広島市)	-	沖縄県	-
(千葉市)	(2)	三重県	-	山口県	-	不明	2
東京都	23	滋賀県	2	徳島県	-	海外	28
						合計	102

(5) 国別 30名、22か国

国名	合計	国名	合計	国名	合計
ブータン	1	マーシャル諸島	1	タイ	2
カンボジア	1	ミクロネシア	1	バヌアツ	1
中国	1	モンゴル	2	ベトナム	2
インド	2	ネパール	2	ミャンマー	1
インドネシア	1	パキスタン	1	オーストラリア	1
イラン	1	フィリピン	2	カメルーン	1
キリバス	2	パラウ	1	合計	30
マレーシア	1	スリランカ	2		

7. 日程

月 日	時 間	プ ロ グ ラ ム
10 / 12 (土)	10 : 00 ~ 10 : 10	開会 主催者挨拶 国立女性教育会館理事長 大野 曜
	10 : 15 ~ 11 : 15	基調講演「Know How会議2002」 ISIS-WICCE所長 ルース・オジャンボ・オチエング (ウガンダ)
	11 : 15 ~ 12 : 00	基調報告「女性情報シソーラスに関する調査研究」 國学院大学法学部教授 / 国立女性教育会館客員研究員 田中 和子
	13 : 30 ~ 17 : 00	第1分科会「医療分野における情報環境」 <パネリスト> カナダ女性健康ネットワーク ロビン・バルネット (カナダ) レスキューナウ・ドット・ネット社長 市川 啓一 (有) ジェンダーメディカルリサーチ代表 宮原富士子 <コーディネーター> 千葉県衛生研究所所長 天野 恵子 第2分科会「ICTの影響による働き方の変化」 <パネリスト> サイモン・フレイザー大学コミュニケーション学科助教授 エレン・バルカ (カナダ) (株)日本ノーベルテレワークセンター部長 福本 雅公 <コーディネーター> 朝日新聞社企画報道部暮らし編集部雇用記者チーム記者 竹信三恵子 第3分科会「情報化時代のリテラシー」 <パネリスト> 淑明女子大学アジア太平洋女性通信センター所長 キオ・チュング・キム (韓国) NPO法人CCCNET代表理事 瓜生ふみ子 <コーディネーター> 聖カタリナ女子短期大学専任講師 中川 洋子
10 / 13 (日)	18 : 00 ~ 19 : 30	情報交換会
	9 : 30 ~ 10 : 15	分科会報告 各分科会コーディネーター
	10 : 25 ~ 12 : 00	パネルディスカッション <パネリスト> ルース・オジャンボ・オチエング / ロビン・バルネット エレン・バルカ / キオ・チュング・キム 天野 恵子 / 竹信三恵子 / 中川 洋子 <コーディネーター> 東京学芸大学教育学部教授 / 国立女性教育会館客員研究員 村松 泰子
	12 : 00 ~ 12 : 10	閉会 主催者挨拶 国立女性教育会館理事長 大野 曜

8. プログラムの内容

(1) 基調講演

ウガンダにあるISIS-WICCE所長のルース・オジャンボ・オチエング氏が自分の所属するISISの歴史と活動内容を紹介すると共に、女性のネットワーキングの重要性について述べた。1995年に北京で開催された第4回国連女性会議が女性と情報についてのひとつの転換点であり、女性は情報もコミュニケーションも女性の権利であると主張することになったとした。

次にKnowHow会議についての説明があった。この会議は女性情報の専門家が一堂に集まって、女性情報の提供及びアクセスの状況、アクセスできるような政策提言等の活動がどれだけ進んだか、進捗状況をレビューしていこうという目的で開催されたものである。第1回会議がアムステルダムで、第2回会議が2002年7月にウガンダで開催された。ISIS-WICCEはこの第2回会議を主催した。第2回会議では特に地方、農村部の女性の情報発信に目が向けられた。すべての女性が情報にアクセスできるようにすることが私たちの責任であると同時に、ICTを使わなくても可能な情報の作成、処理、発信についても知るべきであるとの提言がなされた。

最後にネットワークを形成する際に、誰となぜそのようなネットワークを作るのか、何を達成するのか、リソースはあるのか、そうした課題を考え、その答えを出してネットワークを作っていくことが大切であるとまとめた。



基調講演者のオチエング氏

(2) 基調報告

平成12～13年度にかけて行われた「女性教育シソーラスに関する調査研究」の調査研究会の主旨を務めた田中和子氏より、まず当館におけるシソーラス開発の経緯の説明があった。改訂された「女性情報シソーラス」の大きな特徴として編集システムによって編集作業ができることが挙げられ、当館の文献データベースの検索にもシソーラスが組み込まれていることを実際に画面を示しながら解説した。

(3) 分科会

第1分科会「医療分野における情報環境」

天野氏がまずGender-specific medicine（性差を考慮した医療）について、アメリカ、カナダの歴史を概説し、日本ではまだ患者も医師も医療における性差について気づいていない状況について述べた。

パネリストのバルネット氏はインターネットで得る情報がすべての人に適応するものではなく、特に保健情報については、その情報を出しているスポンサーは誰か、その情報が出たのはいつか等を調べることで、情報の質を評価することが重要であると述べた。さらに所属するカナダ女性保健ネットワーク（CWHN）の活動を紹介した。

日本からのパネリストのひとりである宮原氏は特に日本の女性医療の現状を語り、自

分の健康を維持し、ケアしてくれる医療者の情報を探すのも自分たちの役割であるという認識が必要であるとした。

もうひとりの日本からのパネリストである市川氏は個人の危機管理情報を収集・発信しているレスキューナウ・ドット・ネットの活動の説明を行い、マクロではなく、ミクロの情報をリアルタイムで受け取ることのメリットについて話した。情報は発信するところに集まるものであり、それぞれが持っている情報を出し合い、大きな社会の中で情報を共有する仕組みを作っていくことが大切であるとまとめた。



第1分科会の様子



第2分科会の様子

第2分科会「ICTの影響による働き方の変化」

まずバルカ氏が女性の仕事にテクノロジーがどのように影響を与えているかについて、カナダの事例を紹介した。影響の与え方については職業レベルでの変化、組織上の変化、実際の仕事のプロセスでの変化という3つの領域で考えなくてはならないことを強調した。

次に日本ノーベル株式会社の福本氏が、自社のセラ（システム・エンジニアリング・レディース・アドバンスメント）という情報処理技術を持つ女性が在宅勤務で仕事ができるように組織化した女性技術者集団の仕組みについて紹介した。

SOHOや在宅勤務の問題点として、特に社会的保障がない、教育訓練の場が提供されないという2点に討議が集中した。在宅で仕事をするというのは、あくまでも個人の自由意志に基づいた結果でなければならないこと、また女性の就労については在宅でも出社でも子育て支援が欠かせないことなどが挙げられた。ICTは使い方によって女性にとってはマイナスにもなってしまうが、その負の部分を抑えるためにも、私たちがどういう枠組みを作っていけるかが今後の課題であるとまとめた。

第3分科会「情報化時代のリテラシー」

まず、キム氏がアジア太平洋地域女性通信センターの活動を基に、韓国における女性とICT教育について説明した。次に瓜生氏が子育て支援と女性の就労支援を目的として立ち上げたNPO法人の設立の経緯とその活動内容について紹介した。

基礎レベルの情報リテラシーを誰を対象にどのようなプログラムで実施するか、ICTの専門技術職になるための教育、e-ビジネス、起業家等それぞれのステップに分かれたリテラシー教育があるとした。さらに、今後はNPOを含め、民間と行政、高等教育機関との連携について考えていかなくてはならないとまとめた。その他、資金集めの問題、具体

的なコンテンツ作り等にも話が及んだ。また、習得した技術がその後どう役立ったかについての追跡調査も必要であるとの指摘があった。

(4) 分科会報告

各分科会のコーディネーターが前日の分科会の概要を報告した。



第3分科会の様子

(5) パネルディスカッション

前日の分科会報告の後、「エンパワーメントとICTの利用」について各パネリストが意見を述べた。その中から特に「権利」「ネットワーキング」というようなキーワードが出され、パネリストに対してフロアからの質問を受けた。特に「国際女性情報処理研修」の研修生からの質問が多かった。まず、情報を管理する人と、情報を利用する人という異なるグループがあるという視点からの質問があった。これに対し、既存の技術、社会の枠組み、その技術を含む社会というものを見て、女性のニーズは何か考え、情報の管理に女性が参画していかななくてはならないとの意見があった。次にICTに対するアクセスの問題をどうするかに対して、技術を持つのは女性の権利であることを要求すると同時に、そうした意識を持つことが大切であるとの意見が出された。インフラが整わなくても、人的なネットワークを通じて政策への提言活動を行うことができる、オールドメディアとニューメディアをうまく組み合わせさせて使っていくことも大切であると述べられた。

9. 今後の課題と展望

(1) 企画

来年度は「女性情報」をテーマに国際フォーラムを行う3年目になる。1年目、2年目に討議した結果を踏まえ、まとめの意味をもった内容にすることが求められる。また、2003年3月の国連女性の地位委員会では「女性とメディア、ICT」がテーマのひとつであり、こうした会議の結果も考慮した企画を考える必要がある。

来年度のフォーラムにも「国際女性情報処理研修」の研修生が参加する予定である。これまでは研修の最後にフォーラムという日程であったため、研修のまとめの意味となったが、来年度はフォーラムが先で、その後研修という形になる。そのため、問題提起的な意味を込め、分科会のひとつを研修の内容と関係づける等の連携の方法を考えていきたい。

(2) 参加者の拡大

「国際女性情報処理研修」との連携の都合で、今年度はフォーラムの開催時期を11月から10月に早めたが、10月は各地でイベントがあるということもあり、多くの参加者を確保することがむずかしかった。来年度のフォーラムは9月末に開催予定であり、わかりやすいチラシやポスターを作成し、早めに広報を開始する等の方策を考え、多くの参加者を集める方策を考えたい。

(研究国際室国際企画係長 青木 一恵)

10．参加者の評価（参加者アンケートから）

フォーラム後の感想

テーマについて情報・知識が得られた

	人数	割合(%)
そう思う	48	75
少しそう思う	12	19
そう思う思わない	0	—
無回答	4	6
合計	64	100

女性情報についての考えを深めることができた

	人数	割合(%)
そう思う	41	64
少しそう思う	16	25
そう思う思わない	1	2
無回答	6	9
合計	64	100

女性の課題とICTの活用について知ることができた

	人数	割合(%)
そう思う	32	50
少しそう思う	22	34
そう思う思わない	1	2
無回答	9	14
合計	64	100

情報ネットワークの形成に役立てることができた

	人数	割合(%)
そう思う	27	42
少しそう思う	25	39
そう思う思わない	4	6
無回答	8	13
合計	64	100

海外及び国内の参加者との交流を図ることができた

	人数	割合(%)
そう思う	27	41
少しそう思う	24	38
そう思う思わない	1	2
無回答	12	19
合計	64	100

参加した全体の感想

	人数	割合(%)
満足	35	55
ほぼ満足	20	31
不満	3	5
無回答	6	9
合計	64	100

ヌエック2002・全国交流フェスティバル

1. 趣 旨

男女共同参画社会の形成に向けた多様な生涯学習を展開している全国の団体・グループに、日ごろの学習や活動の報告・発表、研修及び全国交流の機会を提供し、参加者相互の学習・交流及びネットワークづくりをめざす。

2. テーマ

「踏みだそう・わかち合おう・広げよう - 男女共同参画社会 - 」

3. 主 催

「ヌエック2002・全国交流フェスティバル」実行委員会
独立行政法人国立女性教育会館

4. 開催期日

平成14年10月25日（金）～27日（日）2泊3日

5. 参加者

総数 776名（女性686名、男性90名）

内 訳	一般参加者	439名
	自由企画プログラム運営者	337名

性別・年代別 (名)

性別	10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代以上	不明	合計
女性	12	14	39	125	254	226	16	686
男性	3	1	9	15	26	34	2	90
合計	15	15	48	140	280	260	18	776

職務内容別 (名)

性別	行政関係者	教育関係者	会社員	無職	その他	不明	合計
女性	64	24	23	330	73	172	686
男性	18	5	15	16	21	15	90
合計	82	29	38	346	94	187	776

都道府県別

(名)

都道府県	参加者数	都道府県	参加者数	都道府県	参加者数	都道府県	参加者数
北海道	73	東京都	42	滋賀県	—	香川県	7
青森県	5	神奈川県	24	京都府	-	愛媛県	1
岩手県	4	新潟県	28	大阪府	-	高知県	1
宮城県	10	富山県	10	兵庫県	—	福岡県	3
秋田県	18	石川県	23	奈良県	3	佐賀県	—
山形県	-	福井県	13	和歌山県	9	長崎県	3
福島県	7	山梨県	6	鳥取県	3	熊本県	8
茨城県	-	長野県	42	島根県	1	大分県	2
栃木県	6	岐阜県	5	岡山県	3	宮崎県	5
群馬県	4	静岡県	2	広島県	-	鹿児島県	1
埼玉県	327	愛知県	14	山口県	-	沖縄県	2
千葉県	54	三重県	—	徳島県	1	不明	5

〔計37都道府県 海外1(中国)〕

6. プログラムの概要

月 日	時 間	プ ロ グ ラ ム
10 / 25(金)	13 : 00 ~ 13 : 40	開 会 アトラクション「嵐山に歌う」 ソレイユ 主催者挨拶 フェスティバル実行委員長 井上 耐子 国立女性教育会館理事長 大野 曜
	13 : 45 ~ 15 : 15	講 演「映画の中のジェンダーを考える」 映画評論家 / 十文字学園女子大学教授 松本侑壬子
	15 : 30 ~ 17 : 30	自由企画プログラム
	18 : 30 ~ 21 : 00	交流の夕べ ~ 嵐山ですてきな出会いを ~
10 / 26(土)	9 : 30 ~ 11 : 30	自由企画プログラム
	13 : 00 ~ 15 : 00	自由企画プログラム (ステージ発表)
	15 : 30 ~ 17 : 30	自由企画プログラム
	19 : 00 ~ 21 : 00	自由交流(自由参加)「もっともっとつながあおう! 深めよう!」 話し合いたい人、交流したい人 “この指と~まれ”
10 / 27(日)	9 : 00 ~ 11 : 30	テーマ別討論「本気で語ろう、自分を表現しよう テーマ別討論 A 気づこう! 私の中のジェンダー フェスティバル実行委員 宮本 紀子 フェスティバル実行委員 田辺とも子 国立女性教育会館事業課専門職員 島田 悦子 B メディアを女性の手にもワークショップとトーク~ フェスティバル実行委員 石原 淑子 国立女性教育会館情報課専門職員 合田美恵子 C 女性の人権、私の人権~女性・子どもへの暴力を考えよう~ フェスティバル実行委員長 井上 耐子 フェスティバル実行委員 小林千枝子 D 少子・高齢社会を生きる~心も体もすてきに年を重ねよう フェスティバル実行委員 國永満知子 フェスティバル実行委員 遠藤 和徳 国立女性教育会館事業課専門職員 五味 厚子 E 決断の場にもっと女性を ~家庭・地域・職場・学校~ フェスティバル実行委員 木村 道子 フェスティバル実行委員 岩下加代子 国立女性教育会館事業課専門職員 奥村 明子

7. 「ヌエック2002・全国交流フェスティバル」実行委員会

フェスティバルの企画・運営に地域・参加者からの意見を反映させるため、実行委員会を組織した。

実行委員長	井上 耐子	鳥取県男女共同参画審議会(鳥取県)
副委員長	田辺とも子	三条女性会議(新潟県)
委員	石原 淑子	フリーランスライター(奈良県)
	岩下加代子	長崎市都市計画審議会(長崎県)
	遠藤 和徳	ヌエックボランティア(埼玉県)
	國永満知子	伊達なクニづくり女性委員会(宮城県)
	木村 道子	ふくいソフィアの会(福井県)
	小林千枝子	国立女性教育会館事業課専門職員
	宮本 紀子	ヌエックボランティア(埼玉県)

8. プログラムの内容

講演「映画の中のジェンダーを考える」

松本侑壬子 映画評論家/十文字学園女子大学教授

映画は“社会を映す鏡である”と考えたとき、「ああ面白かった」ですぐ忘れてしまう「消費的見方」だけで見るには、あまりにもったいない。映画と対話したり、見たもの同士で話し合ったり、あるいは批評を読んだりして、新しい自分を発見するという「生産的見方」をすると何倍もの醍醐味が味わえる。

劇映画は特殊な映画を除く中の男と女もジェンダーの視点から見ると興味深い。映画創生期の1900年代以来、ヒロイン像は“若い、美人、性格がよい”の3条件を備えた(男性にとっての)夢の女であった。スクリーン上の“夢の女”は現実生活の中でも“いい女”の一つの規範となった。(男性にとっての)というのは、長い間、映画を作るのは男性ばかりであったからである。

メロドラマのヒロインがその典型であるが、たまに規範を外れた女性が登場しても、たいていは“悪女”として最後に殺されたり、報復を受けたりという運命をたどるのが常であった。さらに、近年の傾向として、伝統的な「男と女」という描き方にとどまらず、性同一性障害や同性愛を描く作品が数多く作られ、映画賞を受賞したり大ヒットしたりと芸術性商業性ともに優れた内容のものも少なくない。

映画は芸術でもあるが、莫大な制作費がかかるため、大衆の支持という商業性が欠かせない。大衆に支持されながら、芸術性・表現・監督のメッセージ性を追求する大変難しいメディアなのである。

80年代の終わりごろから女性が世界各地で映画を作りはじめ、それまで男性がつくったのとは違うバラエティ豊かな女性像スクリーンに登場した。両性の目で描くことで立体的な人間像が提示されはじめた。性にこだわらない視点をもっているもの、未来を展望する道を拓くもの、人間の独占欲や愛憎を描くもの等、映画のテーマはたくさんある。今を生きる私たちは、固定した「女らしさ」に閉じ込められた昔の価値観から解放されて、これまで「映画の中のジェンダー」をテーマに話を進めてきたが、ジェンダーにとらわれない「私らしさ」を追求しようとしている。映画を「生産的に」たくさん見て、みんなと語り合い、人生をのびやかに楽しもう。

自由企画プログラム

全国より応募のあった自由企画プログラムのうち67件を実施した（募集件数60件程度、応募件数86件）。



さまざまなプログラムを展開

テーマは、「ジェンダー問題」「文化活動」各10件、「女性政策」9件、「表現」7件、「国際交流」6件、「健康」5件、「教育・学習」「家族・家庭・子ども」各4件、「環境」「女性・子どもに対する暴力」各3件、「ボランティア活動」2件、「ネットワーク」「高齢者会」「女性史」「セクシュアリティ」「情報・メディア」「労働・経済」各1件となっている。

交流の夕べ「嵐山ですてきな出会いを」

参加者相互の交流を図るため食事60分、パフォーマンス90分というプログラムとしたところ、350名余りの参加があった。団体・グループ紹介3件、パフォーマンス9件であった。



輪になって踊ろう

自由交流

「もっともっとつながりあおう！深めよう！」話し合いたい人、交流したい人“この指と～まれ！”のテーマのもと、ネットワークづくりを行った。地域別交流の呼びかけ、進行を各地域選出のフェスティバル実行委員等が行った。

テーマ別討論「本気で語ろう、自分を表現しようテーマ別討論」

フェスティバル実行委員がそれぞれのテーマを分担して企画・立案・運営を行い、会館専門職員が運営協力及び助言を行った。

A 気づこう！私の中のジェンダー

ヌエック2002・全国交流フェスティバル実行委員

宮本 紀子

ヌエック2002・全国交流フェスティバル実行委員

田辺とも子

国立女性教育会館事業課専門職員

島田 悦子

参加者は19人であり、はじめに実行委員からテーマの紹介があり、次に漫画を使った

ジェンダーチェックを行った。その後、会館専門職員より「ジェンダーと男女共同参画社会について」の講義があり、引き続き「あなたの身の回りのジェンダー」について4人1組のグループに分かれて討議を行った。一人ひとりのジェンダーに対する認識の違いや、ジェンダーだけにとらわれずに、人間としての視点の重要性が報告された。その後、グループ討議の発表からの気づきや今後に向けた具体的実践を書き出す作業を行った。報告の中には「ジェンダーの問題を取り上げることに対する戸惑いがある」というものがあったが、「身近なところから理解を広げていきたい」「次の世代の子どもにつなげていきたい」「実践のプログラムを持っている」「地域・世代・外国人等のジェンダーに関する視点を調査したい」等の意見があげられた。

B メディアを私たちの手に

ヌエック2002・全国交流フェスティバル実行委員
国立女性教育会館情報課専門職員

石原 淑子
合田美恵子

参加者は26人であり、はじめに実行委員からメディア・リテラシーについて、ジェンダーの視点からの見方、現在の流れと私たちが手にするための方法が示された。次に「2時間サスペンスドラマをジェンダーの視点で見る」「性差による映像表現の違い」を調査した調査報告書の分析やビデオにより理解した。最後に新聞のテレビ欄を使用して「タイトル」の男女別「固有名詞・性差を表現する名詞」、「タイトル以外」の項目に含まれる男女別「固有名詞・性差を表現する名詞」を書き出すワークショップを行った。

C 女性の人権、私の人権

ヌエック2002・全国交流フェスティバル実行委員長
ヌエック2002・全国交流フェスティバル実行委員

井上 耐子
小林千枝子

参加者は30人であり、「全国の女性や子どもへの暴力の現状」について参加団体より5つの情報提供を行った。まずはじめに、シェルターについての現状、シェルターに対しての要望、人権ネットワークの活動内容、千葉県の日V防止法に基づく県の保護支援センターの取組、性的少数派（セクシュアル・マイノリティ等）の人たちによる自助グループの活動等が報告された。これらの情報提供を受けて全体討議後、「女性・子どもに対する暴力をなくすためには」というテーマのもと、4グループに分かれて討議を行った。教育、社会的弱者に対する人としてのかわり、人権の視点から考えること、民生委員の力量、日本にいる外国人女性への配慮等、それぞれの重要性が報告された。

最後に、行政・地域の問題、そして一人ひとりの個人の問題など、さまざまな面で人権の問題は起きているが、地域でものが言えるネットワークづくりをしていこうと参加者全員で確認し合った。

D 少子・高齢社会を生きる

ヌエック2002・全国交流フェスティバル実行委員
ヌエック2002・全国交流フェスティバル実行委員
国立女性教育会館事業課専門職員

國永満知子
遠藤 和徳
五味 厚子

参加者は59人であり、はじめに実行委員から、定年退職後を元気で生きようという話題提供があり、次に会館専門職員から今の子育て支援の現状、最後に実行委員より、健康あつての豊かさを食の視点から『健康日本21』等データや政策を基にした報告があ

った。話題提供・報告を受けて、自己管理の大切さに気づききっかけについての報告や生き方との関係等活発な意見交換がなされた。

E 決定の場にもっと女性を

ヌエック2002・全国交流フェスティバル実行委員

木村 道子

ヌエック2002・全国交流フェスティバル実行委員

岩下加代子

国立女性教育会館事業課専門職員

奥村 明子

参加者は44人で、まず実行委員により会の流れが説明され、次にふくいソフィアより「地域」「職場」「条例作成」「議員に出馬」の観点でそれぞれの現状が提案され、女性が情報をキャッチする力を身につける必要と女性の足を引っ張るのは女性だという経験が報告された。そして学校・家庭・職場・地域の4分野に分かれてKJ法による学習を行い、それぞれの立場で女性の声と力を政策に活かすための方法や課題があげられた。

9. まとめ

男女共同参画社会の形成に向けた多様な生涯学習を展開している全国の団体・グループに、日頃の学習・活動の報告・発表、研修及び全国的な交流の機会を提供し、参加者相互の学習、交流及びネットワークづくりを目的として実施した。講演、全国的な情報交換をするテーマ別討論等を行ったが、参加者の満足度は84%と高く、充実したフェスティバルとなった。

自由企画プログラムは、過去最高の86件の応募があり、広く全国でのフェスティバルの周知が図られ、イベント的学習として定着してきた。

新たなテーマ・内容として「セクシュアリティ」「女性史」が取り上げられた。実行委員会によるテーマ別討論でも初めて「女性とメディア」を取り上げ、男女共同参画社会の形成の多様な課題をテーマに活発な意見交換が行われ、参加者の地域活動の充実・促進の参考となった。

10. 今後の課題・展望

多様な分野の学習、幅の広い参加者層がフェスティバルの特長として定着しつつある。この特長を損なわないためには、文化活動の交流を期待する参加者、女性問題の解決をめざした交流を期待する参加者をともに満足させる企画が課題である。

自由企画プログラムをより多く紹介する方法を工夫することが重要であり、その一つとして、活動内容をポスターにまとめ、それを展示する「ポスターセッション」のような形のプログラムを取り入れていきたい。

男性及び年齢の若い参加者を増やし、より多様な参加者同士の交流を図るために、男性・若い人に魅力のあるプログラムの企画、広報先の検討が必要である。

11. 参加者の評価

フェスティバルの参加に「満足」「ほぼ満足」と答えた参加者は84%となり、満足度が高い。

具体的な意見としては、「軽音楽や踊りからDVやジェンダーに関することまで幅広くワークショップがあり、ヌエックの主催事業に参加する最初のステップとしてはよかった」「学び、楽しむという一種のお祭りのところがよい」「全国各地の活動情報が集積されていて、参加の意義が大きかった」「女性学・ジェンダー研究フォーラムとは趣が異なる。フェスティバルには初めて参加したが、初めての参加者が多く、嵐山に足を運びヌエックを知ることが第1歩とするためには有用な事業だと思う」「緑の中の各施設は会議設営のために用意されただけに、無駄のない運営で、居心地のよいものであった。研修も実りあるものであった」「昨年と比べて内容がよかった」などがあげられた。一方、「不満」と答えた者は6%で、「ジェンダーに関係のないイベントが多い」「女性学・ジェンダー研究フォーラムに参加していたが、その成果と交流を期待していた」「内容の難しさを感じた」という意見がある。

自由企画プログラム運営者に、自由企画プログラムを実施したねらいの達成度を尋ねたところ、91%であった（「満足」「ほぼ満足」の合計）。一方「不満」と答えた者は8%で、その理由として「自分たちが運営したプログラムへの参加者が少なかった」「自由企画プログラムの開催時間が短かった」をあげている。

（事業課専門職員 小林千枝子）

アンケート集計結果

回答数286名（回答率36.9%）（参加者776名）

フェスティバル後の感想はいかがでしたでしょうか

（１）テーマについて情報・知識が得られた

	女性	%	男性	%	無回答	%	総計	%
そう思う	122	49.4	11	44.0	2	14.3	135	47.2
少しそう思う	65	26.3	5	20.0	0	—	70	24.5
そう思わない	6	2.4	2	8.0	0	—	8	2.8
無回答	54	21.9	7	28.0	12	85.7	73	25.5
合計	247	100.0	25	100.0	14	100.0	286	100.0

（２）日頃の学習や活動について情報を交換することができた

	女性	%	男性	%	無回答	%	総計	%
そう思う	78	31.6	6	24.0	1	7.1	85	29.7
少しそう思う	87	35.2	9	36.0	1	7.1	97	33.9
そう思わない	7	2.8	1	4.0	0	—	8	2.8
無回答	75	30.4	9	36.0	12	85.7	96	33.6
合計	247	100.0	25	100.0	14	100.0	286	100.0

（３）さまざまな生涯学習団体やグループと交流することができた

	女性	%	男性	%	無回答	%	総計	%
そう思う	72	29.1	6	24.0	0	—	78	27.3
少しそう思う	79	32.0	8	32.0	1	7.1	88	30.8
そう思わない	16	6.5	1	4.0	0	—	17	5.9
無回答	80	32.4	10	40.0	13	92.9	103	36.0
合計	247	100.0	25	100.0	14	100.0	286	100.0

（４）ネットワークづくりをすすめることができた

	女性	%	男性	%	無回答	%	総計	%
そう思う	29	11.7	3	12.0	1	7.1	33	11.5
少しそう思う	76	30.8	10	40.0	0	—	86	30.1
そう思わない	42	17.0	3	12.0	0	—	45	15.7
無回答	100	40.5	9	36.0	13	92.9	122	42.7
合計	247	100.0	25	100.0	14	100.0	286	100.0

（５）その他

	女性	%	男性	%	無回答	%	総計	%
そう思う	7	2.8	2	8.0	0	—	9	3.1
少しそう思う	13	5.3	3	12.0	0	—	16	5.6
そう思わない	6	2.4	0	—	0	—	6	2.1
無回答	221	89.5	20	80.0	14	100.0	255	89.2
合計	247	100.0	25	100.0	14	100.0	286	100.0

参加した全体の感想

	女性	%	男性	%	無回答	%	総計	%
満足	94	38.1	8	32.0	2	14.3	104	36.4
ほぼ満足	119	48.2	14	56.0	3	21.4	136	47.6
不満	15	6.1	2	8.0	0	—	17	5.9
無回答	19	7.7	1	4.0	9	64.3	29	10.1
合計	247	100.0	25	100.0	14	100.0	286	100.0

ジェンダー統計に関する調査研究

1. 趣 旨

国内外で作成されている統計データをジェンダーの視点から調査分析し、女性の現状を客観的に把握することができる統計資料集を作成する。

2. 研究課題

- (1) 女性のエンパワーメントを目指す統計指標の検討
- (2) ジェンダーの視点からみたデータの検討
- (3) データ提供方法に関する検討

3. 研究期間

平成13年4月～平成15年3月（2年計画の第2年次）

4. 年次計画

平成13年度

- ・昭和62年から刊行されてきた「統計に見る女性の現状」（最新版は2000年第6版）の内容の見直し
- ・国内で作成されているデータの収集、検討

平成14年度

「ジェンダー統計ハンドブック（仮称）」の作成

5. 調査研究方法

- (1) 研究プロジェクトチームによる調査研究

関連分野の研究者及び国立女性教育会館研究員等による研究プロジェクトを設置し、調査研究を行う。

- (2) プロジェクトメンバー

天野 晴子	日本女子大学助教授
(座長) 伊藤 陽一	法政大学教授
大竹美登利	東京学芸大学教授
岡村 清子	東京女子大学助教授
斎藤 悦子	岐阜経済大学助教授
芳賀 寛	中央大学教授
福島 利夫	専修大学教授
藤岡 光夫	静岡大学教授
中野 洋恵	国立女性教育会館研究国際室主任研究員
高橋 由紀	国立女性教育会館研究国際室研究員
小林千枝子	国立女性教育会館事業課専門職員

必要に応じてワーキンググループを設定する。

6. 平成14年度の研究経過

(7回のプロジェクト会議)

今年度は、13年度のデータの検討をもとに統計集（ハンドブック、リーフレット）を作成するために7回のプロジェクト会議と女性学・ジェンダー研究フォーラムでのワークショップを実施した。

(1) ハンドブック『統計に見る女性と男性（仮題）』の作成

分野

1 人口 2 家族・世帯 3 - 1 労働 - 労働力・就労 3 - 2 労働 - 労働条件
3 - 3 労働 - 自営業 4 生活時間と無償労働 5 家計資産 6 教育・コミュニケーション
7 社会保障・福祉 8 健康・保健 9 安全・犯罪 10 意思決定 11 意識

付属資料：男女共同参画計画対比表 年表 関連資料 データベース 関連ウェブサイト等

(2) リーフレット（ヌエックミニ統計集 日本の女性と男性2002-2003）の作成

1 人口・世帯 2 教育 3 生活時間 4 労働と所得 5 健康・安全・福祉 6 意思決定の6分野からもっとも基本的なデータを集め、簡単に手にとって見ることのできるリーフレット、A4三つ折り版を作成した。

(3) 平成14年度女性学・ジェンダー研究フォーラムのワークショップ

平成14年8月24日（土）「エンパワーメントのためのジェンダー統計 - わかって、使って、確かめて - 」をテーマに ジェンダー統計とは 国際的・国内的経過と到達点 ジェンダー統計の不足点 NWE Cの調査研究 今後の国内的・国際的課題について報告とディスカッションを行った。調査研究について報告するとともにワークショップでのディスカッションで出た意見をリーフレット、ハンドブックに反映することによってより使いやすい統計集を作成することができた。



プロジェクト会議の様子



リーフレット

ヌエックミニ統計集「日本の女性と男性 2002-2003年」

7. 今後の課題・展望

15年度には作成した統計集を市販する予定である。ハンドブックとリーフレットをヌエックのホームページの「女性と家族に関する統計データベース」とあわせて、研修、交流事業の中で広く活用していきたいと考えている。また、データの更新方法を検討する必要がある。

（研究国際室主任研究員 中野 洋恵）

女性のエンパワメントのための 生涯学習拡充方策に関する調査研究 (韓国女性開発院との共同研究)

1. 趣 旨

日韓両国における女性の生涯学習の実態についてジェンダーの視点からの解明および比較を行い、生涯学習の拡充方策を提示することにより、女性のエンパワメントを推進する。

2. 研究目的

- (1) 日韓両国における女性の生涯学習の解明および比較
- (2) 女性のエンパワメントに向けた生涯学習の拡充方策の提示

3. 期 間

平成12年度～平成14年度(3年計画の第3年次)

4. 研究内容

- (1) 女性関連機関・生涯学習関連機関における文化活動・学習講座の実態と課題
- (2) 生涯学習における学習者の実態と学習要求
- (3) 女性のエンパワメントに向けた生涯学習の拡充方策

5. 実施方法

(1) 研究プロジェクトの設置

関連分野の研究者及び国立女性教育会館研究国際室研究員等による研究プロジェクトを設置し、調査研究を行う。

平成12年度：日韓共通の調査票作成、韓国側が調査実施・集計

平成13年度：日本側が調査実施・集計

平成14年度：調査結果の日韓比較、まとめ、報告書作成

(2) 研究プロジェクトメンバー

伊藤真知子	東北公益文科大学助教授
(座長) 原 ひろ子	放送大学教授
渡邊 洋子	京都大学大学院助教授
中野 洋恵	国立女性教育会館研究国際室主任研究員
高橋 由紀	国立女性教育会館研究国際室研究員

* 韓国女性開発院プロジェクトメンバー

キム・ジェイン	韓国女性開発院企画調整室長
イ・シュンラン	韓国女性開発院特別研究委員(平成12年～平成14年9月)
ホ・ヒュンラン	韓国女性開発院主任研究員(平成12年～平成14年9月)
ヤン・エギョン	韓国女性開発院研究委員(平成14年10月～)
クァク・サングン	梨花女子大学教育学部助教授

6. 平成14年度の研究経過

(プロジェクト会議3回開催、日韓共同研究会議2回開催)

(1) 日本で行ったアンケート調査結果と韓国の調査結果との比較分析を行った。

(2) 日本で行ったヒアリング調査結果を分析するとともに、韓国のヒアリング調査結果との比較を行った。

(3) ソウルにおいて共同研究会議を開催し、韓国メンバーが作成した報告書『21世紀における文化活動活性化のための平生教育の役割』の内容に関して議論し、来年度日本で開催する予定のシンポジウムについて打ち合わせた。また、韓国の生涯学習関連施設において機関担当者と学習者にインタビューを行い、女性省主催「2002新職業フェア」を視察した。(9月12日～16日)

訪問施設：ソウル市女性プラザ、ソチョ区女性センター、ウンピョン区民会館

(4) 国立女性教育会館において共同研究会議を開催し、分析結果のまとめ方、データの共有方法、研究上の主要概念の使い方、および来年度開催予定のシンポジウムについて協議した(11月30日)。また、「平成14年度男女共同参画学習推進フォーラム～埼玉県男女共同参画サミット～」(12月1日、With youさいたま)に参加した。

(5) 報告書『女性のエンパワーメントのための生涯学習拡充方策に関する調査研究』を作成し、生涯学習拡充方策に関する提言をまとめた。



日韓共同研究会議参加メンバー
(韓国女性開発院)



2002年7月に開館したばかりのソウル市女性プラザ

7. 今後の課題・展望

日韓の調査結果を比較分析することを通じて、両国の生涯学習機関のあり方と女性学習者の実態について共通点と相違点を明らかにし、女性のエンパワーメントを促進するための生涯学習拡充方策について提言を行ったが、この調査結果を他の調査研究と比較しながら相対化すること、および生涯学習政策・女性政策のあり方と関連づけて考察をすることが今後の課題である。

6月には調査結果の公開と日韓の生涯学習についての議論を深めることを目的として、シンポジウム「女性の生涯学習／平生学習 自己実現と社会参画のために」を開催する予定である。

(研究国際室研究員 高橋 由紀)

女性の学習関心と学習行動に関する 国際比較調査

1. 趣 旨

男女共同参画社会の形成に向けた生涯学習の振興ならびに女性のエンパワーメントに資するため、女性の学習関心および学習行動に関する国際比較調査（ノルウェー、韓国、アメリカ、日本の4カ国）を国内外の研究機関や研究者と共同で実施し、その成果を踏まえて、女性の社会参画に向けた知識・技術習得のための学習プログラムを開発する。

2. 研究目的

- （1）4カ国における女性の学習関心および学習行動の実態の明確化
- （2）女性の学習関心および学習行動の4カ国比較
- （3）女性のエンパワーメント促進のための生涯学習プログラムの開発

3. 期 間

平成13年度から平成15年度（3年計画の2年次）

4. 研究方法

（1）研究プロジェクトの設置

関連分野の研究者および国立女性教育会館研究国際室研究員等による研究プロジェクトを設置し、調査研究を行う。

平成13年度：先行研究の検討、海外カウンターパートとの連携づくり、現地訪問による情報収集、国内予備調査の実施

平成14年度：共同研究会議の開催、4ヶ国におけるアンケート調査およびヒヤリング調査の実施

平成15年度：調査結果の分析・まとめ、報告書作成、国際シンポジウム開催

（2）研究プロジェクトメンバー

澤野由紀子	国立教育政策研究所総括研究官
鄭 世華	プール学院大学教授
（座長）原 ひろ子	放送大学教授
藤村久美子	東洋英和女学院大学教授
朴木佳緒留	神戸大学教授
中澤 智恵	東京学芸大学専任講師
中野 洋恵	国立女性教育会館研究国際室主任研究員
高橋 由紀	国立女性教育会館研究国際室研究員
大槻 奈巳	国立女性教育会館研究国際室研究員

5. 平成14年度の研究経過

(4カ国合同研究会議1回、プロジェクト会議4回、ワーキンググループ研究会6回開催)

(1) 4ヶ国合同研究会議の開催

国立女性教育会館において共同研究会議を開催し、ノルウエー、韓国、アメリカのカウンターパートとともに調査対象、調査項目、調査方法、「エンパワーメント」概念について協議した。また、4カ国が自国の成人学習の状況を発表した。

(2) アンケート調査の実施

9月に予備調査を4カ国において実施した。それをふまえ、11月-3月に本調査を4カ国において実施した。日本では、女性センター、公民館、ポリテクセンター、大学、専門学校を対象として実施した。

(3) インタビュー調査の実施

1月-3月にインタビュー調査を4カ国において実施した。日本では、女性センター、公民館、ポリテクセンター、大学、専門学校の機関担当者および学習者を対象として実施した。

(4) 現地訪問とインタビュー調査の実施

2月に韓国、ノルウエーを訪問し、調査の実施状況、今後の分析の方向性、スケジュールについて話し合った。また、日本の委員による現地学習機関担当者、学習者のインタビューを実施した。



7月開催4カ国合同会議



ノルウエーでのインタビュー

6. 今後の課題・展望

平成14年度は、4カ国合同研究会議を行い、その協議をふまえ4ヶ国においてアンケート調査およびヒヤリング調査を実施した。

平成15年度は、調査結果を分析し、その結果を報告書にまとめたいと考えている。また、4カ国合同のシンポジウムを日本において開催し、調査結果の発表を行いたい。さらに、本調査の結果をふまえ、女性のエンパワーメントに有用な生涯学習のあり方を考察し、学習プログラム開発を行う予定である。

(研究国際室研究員 大槻 奈巳)

子育てサークル等支援に関する調査研究

1. 趣 旨

子育てサークル活動を充実させるため、男女共同参画の視点に立った子育て支援に関する調査研究を実施し、子育てサークル、子育てネットワーク等の関係者、子育て支援関係者、及び行政担当者等を対象とする学習教材を開発する。

2. 研究内容

- (1) 子育てサークルの活動を充実させるために必要な課題の明確化
- (2) 子育てサークル支援者のためのプログラム研究
- (3) 子育てサークルの事例収集
- (4) 子育てネットワークの分析
- (5) 子育てネットワーク形成のためのプログラム研究

3. 研究期間

平成14年度～平成15年度（ 2 年計画）

4. 研究方法

(1) 研究プロジェクトの設置

関連分野の研究者、実践者、行政担当者及び国立女性教育会館研究員等による研究プロジェクトを設置し、調査研究を行う。

平成14年度

サークル活動、ネットワーク活動プログラムの収集・分析

ヒアリング

平成15年度

「子育てネットワーク等子育て支援団体についての情報提供の在り方に関する調査研究」の分析

ブックレットの作成

(2) プロジェクトメンバー

坂本 純子	新座市子育てネットワーク代表、
	いまどき子育てフォーラムSAITAMA代表
(座長) 汐見 稔幸	東京大学大学院教育学研究科・教育学部教授
清水 正江	情報誌ゆめこびと代表
山川 俊幸	富山県教育委員会生涯学習室家庭成人教育班社会教育主事
結城 恵	群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター助教授、 国立女性教育会館客員研究員
中野 洋恵	国立女性教育会館研究国際室主任研究員
高橋 由紀	国立女性教育会館研究国際室研究員

5. 平成14年度の研究経過

(プロジェクト会議5回開催)

(1) 子育てサークル活動及び子育てネットワーク活動について活動内容、活動プログラム等について情報収集をおこなった。

(2) 平成12年度に実施した「子育てサークルに関する調査」(文部科学省委嘱「家庭教育に関する活性化方策の推進」事業、地域における家庭教育支援としてどのような実践が展開されているかを把握するために、子育てサークルを対象として活動内容、行政との関係、活動成果や課題についてアンケート調査を実施)を再分析した。

(3) 地域における子育てネットワーク、ネットワーク支援についてヒアリングを実施した。

埼玉県新座市西堀・新堀コミュニティーセンターの子育て支援

報告者：新座市西堀・新堀コミュニティーセンター社会教育指導員 山本典子

埼玉県川越市伊勢原公民館の子育て支援

報告者：川越市伊勢原公民館副主任 菱沼伸子

新座子育てネットワークの活動について

報告者：新座子育てネットワーク代表 坂本純子

(4) 今年度は「子育てネットワーク等子育て支援団体についての情報提供の在り方に関する調査研究」と合わせて実施した。

6. 今後の課題

平成14年度は子育てサークル、子育てネットワークの活動を明らかにし、地域における子育て支援の必要性を確認した。特に子育て支援の場として公民館等地域の拠点が必要とされていること、公民館等が子育て支援の場として十分に機能していない場合もあることがわかった。そこで次年度は公民館等の職員を対象としたブックレットを作成する予定である。子育てを取り巻く状況の変化や変化の中での子育て支援の必要性、子育て支援の拠点としての役割、子育てサークルや子育てネットワークの持つ意味等を内容とする予定である。

また今年度実施した「子育てネットワーク等子育て支援団体についての情報提供の在り方に関する調査研究」のアンケート調査の分析、「子育てサークルに関する調査」の再分析の結果も掲載したいと考えている。

(研究国際室主任研究員 中野 洋恵)

ヌエック(国立女性教育会館)公開シンポジウム

1. 趣 旨

男女共同参画社会形成に向けた調査研究の充実及び推進を図るために、国立女性教育会館の女性、家庭・家族に関する調査研究の最新の成果を発表し、意見交換を行う公開シンポジウムを開催する。

2. テーマ

「女性情報を有効に使うために 女性情報シソーラスの開発と活用」

3. 主 催

独立行政法人国立女性教育会館、財団法人大阪府男女協働社会づくり財団

4. 日 時

平成15年3月2日(日) 13:00～15:30

5. 会 場

大阪府立女性総合センター「ドーンセンター」5階特別会議室

6. 参加者

103名(女性91名、男性12名)

女性施設関係者、行政関係者、大学教員・研究者、幼小中高教員、会社員、学生

7. プログラムの概要

(1) 調査研究の報告 江口 愛子 国立女性教育会館情報課長

(2) シソーラスを組み込んだデータベースのプレゼンテーション

森 未知 国立女性教育会館情報課情報係

(3) パネルディスカッション

コーディネーター 尼川 洋子 (財)大阪府男女協働社会づくり財団企画
推進グループディレクター

パネリスト 橋本ヒロ子 十文字学園女子大学教授

安達 一寿 十文字学園女子大学助教授

堀 久美 WIN-L代表

8. プログラム内容

(1) 調査研究の報告

シソーラスとは、情報を検索する際に用いられる用語を意味で整理し、同義語、広義語、狭義語、関連語等と関連づけた用語集のことである。国立女性教育会館は、女性及び家族に関する情報を収集・整理し、提供するという国内外の情報センターとしての役

割を果たしてきたが、収集された情報を活用するためにはシソーラスが有効であるとして、これまでに『婦人教育シソーラス 昭和61年度版』（昭和62年5月）、『婦人教育シソーラス第2版』（平成2年3月）を刊行してきた。

平成12年度および13年度には、新たに調査研究会を構成し、会館と各地の女性関連施設等の女性関連情報データベースを効率的に検索するための「共通キーワード」の整理と体系化を目的として、また国内外の女性をとりまく状況の変化に対応可能な「女性情報シソーラス」の開発を行った。

『婦人教育シソーラス第2版』との主な相違は、「女性情報」の検索ツールであることを示すためにタイトルを変更したこと、約6,000語の収録語を再検討し約4,400語に絞ったこと、9つだったカテゴリーを14に増やした点にある。さらに、シソーラスをデータベース化することにより、ネットワーク経由で共有したり編集を行うことが可能になった。

（2）シソーラスを組み込んだデータベースのプレゼンテーション

ヌエックのホームページで提供されている女性情報シソーラスのページから、シソーラスに関する意見・質問等をやりとりできる電子掲示板「女性情報シソーラスご意見番（板）」と、このシソーラスに採録されている用語を検索し階層化表示する機能を備えた「女性情報シソーラス用語データベース」を紹介した。またWinetCASSの中で、女性情報シソーラスが組込まれたHP-CASS、文献情報データベースで検索する際にシソーラスがどのように有効活用できるのかについてプレゼンテーションを行った。

（3）パネルディスカッション

シソーラスの調査研究に携わった尼川氏がコーディネーターとなり、橋本氏が海外の動きをふまえながら女性情報にとってシソーラスを開発することの意義について、安達氏が今回のシステム開発の特徴について報告を行った。ドーンセンターの利用者であり、WIN-Lというグループ活動を行っている堀氏は、女性情報を利用する立場からシソーラスの活用可能性について発言した。以下は、それぞれのパネリストの報告及び会場との質疑応答の要旨である。

女性情報の体系化と女性情報シソーラスの意義（橋本 ヒロ子）

「情報は女性にとって力である」（アン・ウォーカー）が、世の中の情報は男性たちが中心になって作っているために女性達に届きにくいという状況がある。

「女性情報シソーラス」の開発は、前回の「婦人教育シソーラス」同様、国際的なジェンダー主流化の流れの中で進められてきた。私達が『第1版』のシソーラスを作る時には、まだパソコンが普及していなかったので手作業で苦労しながら作業を進めた。また、女性学ができたばかりで日本での位置づけがなされておらず、女性学・女性運動の体系化という意味も込めてシソーラスの開発を行った。

同じ時期に、ASEAN各国が協力して



パネルディスカッションの様子

“ Women in Development Thesaurus ” が開発され、アメリカでも女性教育のセンターや研究者達が中心となって “ A Women's Thesaurus ” が開発された。1995年の北京会議では、行動綱領の12領域の中に「女性とメディア」という項目が入り、1998年にオランダで行われた女性情報に関するノウハウ会議では、ヨーロッパの「女性シソーラス」が報告された。このように、女性情報の国際的なネットワーク推進にとって、語の意味や使用法の共有化のためのシソーラス開発とその活用は必要なものであった。

2003年12月には、ジュネーブで世界情報社会サミットが開催される予定であり、そのための準備会議がすでに始まっている。また、今年の国連女性の地位委員会のテーマの1つに「女性とICTとメディア」が取上げられるなど、情報政策の中に女性を位置づけていくという流れができつつある。女性情報ネットワークのみならず、マスコミなどの既存のメディアもうまく使って、いろいろな場でジェンダー主流化を進めていくことが、女性情報をもっと豊かで強固なものにしていくことにつながっていく。

シソーラス参照機能を組み込んだデータベース検索システムの開発（安達 一寿）

情報の送り手と受け手との境目がなくなりつつある現在、互いの持つ情報の共有化が大変重要である。シソーラスの開発の眼目は、情報の共有化を目指しながら女性情報を流通させ、連携を高めることにある。時代の変化に柔軟に対応する用語管理を行うこと、インターネットで使えるデータベースシステムにすること、関連機関でデータベースを共有可能にすることを目的にシソーラスの開発を行った。

今回のシソーラスの特徴は、以前は紙上で行っていたことをインターネット上で行えるような編集の仕掛けを作ったことにあり、複数の人間が同時に1つの画面を見ながらディスカッションすることも可能となった。また、シソーラスの公開はPDFという無料で入手できる形式で提供されているため、機種が違っても利用できないということがなく、誰でもが利用可能となった。そして、検索する際に1つの用語をもとにして同義語や関連語をデータベースで探してくれるので、検索の的確性と精度を高めることができる。さらに、このシソーラスのデータベースは又エックのWinetCASSに登録するか、このデータベースそのものを各機関に移行して利用するという方法で他の組織でも利用することが可能であり、女性情報の共通利用に関して大きな寄与ができるのではないかと考えている。



パネルディスカッションの様子

シソーラスと私たちの活動 どのように活用するのか（堀 久美）

ドーンセンターで開講された「組織開発講座」を受講し、その修了生で作ったWIN-L（Women's Information Network for Leaders）というグループ活動をしている。私達の活動の中の情報は、双方向的で、それが次に人を動かし、社会を動かしていくものになっていかないといけないと思い、そういう立場からメールマガジン『LEO通信』を発行している。

その紙上で、又エックが開発したシソーラスについて意見がほしいと呼びかけたところ、難

しくてよくわからないという反応が多かった。しかしすばらしいという人と、わからないと言う人との違いは、わずかだと思う。何に使えるのか、どんな場面で使うと有効なのかという、手掛かりや体験が1つあることで違ってくる。

シソーラスは宝の山だと思うので、なんとか活用方法がないかと考え、ちらしに使う言葉を選択する際にソーラスで検索を行った。人に伝える言葉を使う時に、シソーラスで言葉を確認するという利用方法があるのではないかと思う。

コーディネーターによる補足（尼川 洋子）

情報をつなぐためには一定の検索技術が必要である。女性センターという現場で情報提供をしていると、女性達が求める情報は切実感を伴うなものが多く感じる。情報をつなぐ場、情報と出会う場としての女性センターができ、その中で情報の提供が公共性をもって行われるようになったことは大きな進歩である。

会場との質疑応答

女性センターの役割

木下（ドーンセンター情報ライブラリ）：昨日、「立ち会い出産」をテーマに論文を書きたいということで相談を受け、いろいろなデータベースを調べたがうまく検索できなかった。女性情報シソーラスを使ったところ、事前調査の段階でそのテーマがどのような分野に属するのか、関連分野にどのような情報があるのかをつかもうとする時に役立つことを実感した。

尼川：女性の活動は新しい分野を開拓し、新しい言葉が生み出されてくる。しかし、図書館の分類法では対応しきれないことが、情報を得る時の壁になっていた。シソーラスとして女性の分野で使われているものを網羅的にすくい上げ、整理し、体系化したことにより、このような使い方が可能になった。

女性情報シソーラスを組み込む

会場：自分のところのデータベースにこのシソーラスをどう組み込んでいけるのか。

安達：会館で提供しているWinetCASSのデータベースの横断検索に登録するか、予算的な措置ができればだが、シソーラスのデータベースをそれぞれの機関のデータベースに移植する方法の二通りがある。移植した場合のデメリットは、会館が更新した部分は自分達で直さねばならないことである。メリットは、会館のものを元にして、独自のシソーラスをどんどん拡張できる可能性があるということである。

女性情報の有効な検索方法

会場：学生から「子ども服にみられるジェンダー観」を調べたいと相談された。YahooやGoogleで検索したが、信頼性に欠けた情報まで入手することになった。どのようにアクセスすれば、このテーマに関して有効な情報が得られるのか。

橋本：又エックでは雑誌記事で調べられる。「子ども」「服装」「ジェンダー」などのand検



会場の様子

索をするといいい。

木下：絶対に用語として登録されているだろうと思われる「子ども」「ジェンダー」などで検索する。近い内容の雑誌を検索して、付与されているキーワードを把握する。そのキーワードをシソーラス展開させて検索するうちに、最も的確な言葉が見つかる。

9. 今後の課題・展望

シソーラスを改訂し、データベースに組み込むことにより、従来にはない利点が様々に加わったが、今後はこのシステムをいかに他の施設と共有し、女性情報のネットワーク化をはかっていくのが課題である。また、シソーラスは情報関係の専門家ならば利用価値が理解できるが、一般的な理解を得ることがむずかしいものである。今回のシンポジウムでは、女性情報を利用する人にとって、辞書的に使うことや、事前調査でこれまでになかった新しい情報に対応するという活用方法が出されたことにより、シソーラスに対する一般の理解を進めることができた。学習者・学生にシソーラスの利用方法を広めるには、女性センターや大学図書館などの専門家の役割が重要であることをさらに提起していくことも今後の課題である。

(研究国際室研究員 高橋 由紀)

アンケート集計結果

シンポジウム後の感想に最も近いもの

1. テーマ(女性情報・シソーラス)について情報・知識が得られた

そう思う	59	76.6%
少しそう思う	17	22.1%
そう思わない	0	—
無回答	1	1.3%
合計	77	100.0%

2. 仕事・研究に必要な情報・知識が得られた

そう思う	43	55.8%
少しそう思う	24	31.2%
そう思わない	1	1.3%
無回答	9	11.7%
合計	77	100.0%

3. 男女共同参画社会形成についての情報・知識が得られた

そう思う	19	24.7%
少しそう思う	35	45.5%
そう思わない	11	14.2%
無回答	12	15.6%
合計	77	100.0%

参加した全体のご感想はいかがでしたか

満足	30	39.0%
ほぼ満足	38	49.4%
不満	2	2.5%
無回答	7	9.1%
合計	77	100.0%

女性及び家族に関する学習情報の調査研究 (女性及び家族に関する統計データベースに関する調査研究)

1. 趣 旨

女性の現状を客観的に把握するために必要不可欠な統計の整備を目的として平成4～8年度に開発した「女性及び家族に関する統計データベース」を、平成13～14年度の2年計画で行われている「ジェンダー統計に関する調査研究」の成果を反映させ、より一層の充実を図る。

2. 期 間

平成14年度(一年計画)

3. 研究内容

- (1) 「女性及び家族に関する統計データベース」の現状の評価
- (2) データの収集範囲等の検討
- (3) データベースの使いやすさ等の検討

4. 研究方法

(1) 研究プロジェクトの設置

関連分野の研究者及び国立女性教育委員会事業課研究員等による「ジェンダー統計に関する調査研究」プロジェクトメンバーにおいて調査研究を行う。必要に応じてワーキンググループを設定する。

(2) 事務局

独立行政法人国立女性教育会館情報課

5. 研究経過

(1) 現状と課題整理

下記について、現在の「女性及び家族に関する統計データベース」の調査、分析を行った。

現データベースの収集・更新状況

必要統計から見た現データベースの状況

『統計にみる女性の現状』から見た現データベースの状況

(2) 現データベースの改善方針の検討

利用者にわかりやすくという点から、分野、検索画面、検索方法、表の形式等について検討を行った。また個々の表についての評価、新たに追加が必要な表の検討を行った。

(3) データベースの改良

「女性及び家族に関する統計データベース」は、構築時の技術的制約(当初はパソコン通信によって提供)によって、作表等が大きく制約されたままとなっていた。またその後のコンピュータの進化とインターネットの普及により、政府統計機関のウェブサイト

での統計の提供も進み、見直しは急務となっていた。「ジェンダー統計に関する調査研究」プロジェクト会議において検討を行い、下記のとおりデータベースの改良を行った。

検索画面の改良

従来のキーワード検索では、表名、件名として入力されているものしか検索できなかったが、出典等、表にあるすべての語句を検索できるように改良した。またデータベースの説明、利用方法の解説について見直しを行った。

分野の変更

現データベースの12分野から、下記11の分野に変更した。

- 1 人口
- 2 世帯・家族
- 3 労働
- 4 生活時間と無償労働及びボランティア、余暇・スポーツ
- 5 家計・資産
- 6 教育・コミュニケーション
- 7 社会保障・福祉
- 8 健康・保健
- 9 安全・犯罪
- 10 意思決定
- 11 意識調査

リンク集の作成

現在提供されている政府統計機関のウェブサイトや、海外のジェンダー統計サイトのリンク集を作成した。

掲示板の作成

利用者の意見を取りいれることができるように、電子掲示板を作成した。

リーフレットのダウンロード

「ヌエックミニ統計集 日本の女性と男性2002年」をPDFファイルでダウンロードできるようにした。

(4) データベースの名称の検討

表の内容等の再検討を行った結果、このデータベースは、日本の女性と男性の生活の全分野にわたる重要な統計を、特に女性と男性を対比することを重視した形で提供することを目指した統計データベースであることから、名称を「女性と家族に関する統計データベース」から「女性と男性に関する統計データベース」に変更することとした。

6. 今後の課題・展望

今年度の調査研究により改善方針については検討されたが、個々の表を利用しやすい形式にするという課題については、来年度データ更新時に修正を行っていく予定である。また国際化への対応としてデータベースを英語併記にし、出典が英語併記で提供されている統計については同様に来年度更新時にとり入れていきたいと考えている。

(情報課情報係 森 未知)

子育てネットワーク等子育て支援団体についての情報提供の在り方に関する調査研究 (平成14年度文部科学省委託事業)

1. 趣 旨

全国に存在する子育てネットワークなどの子育て支援団体の実態を調査し、それらについて情報提供の在り方に関する調査研究を行う。

2. 期 間

平成14年11月22日～平成15年3月31日

3. 研究内容

子育てネットワーク関係者を交えたデータベースの作成・運用に関する調査研究企画委員会を設置し、子育てネットワーク等子育て支援団体に対する支援と子育てネットワーク等関係者と教育委員会の連携の促進に資する情報の提供と活用の在り方を検討する。

その結果をもとに、子育てネットワーク等子育て支援団体の関係者109団体に団体名・活動地域・活動内容・行政との関連の有無等の項目について実態調査を行うと共に、都道府県市区町村の3268の教育委員会に対して子育てネットワーク等子育て支援団体への支援事業・連携、把握している子育てネットワーク等子育て支援団体へ支援団体用調査票の配布及び回収を含む実態調査を行い、情報を収集する。

さらに、収集した情報をもとに、子育てネットワーク等関係者・子育て中の親・教育委員会を対象とする、子育てネットワーク等子育て支援団体についての情報及び教育委員会の支援事業を内容とする「子育てネットワーク等子育て支援団体・教育委員会データベース」を作成する。

4. 研究方法

(1) 企画委員会の設置

関連分野の研究者及び国立女性教育委員会研究国際室研究員等による「子育てネットワーク等子育て支援団体についての情報提供の在り方に関する調査研究」企画委員会を設置し調査研究を行う。

この企画委員会は「子育てサークル等支援に関する調査研究」と連動させて行なう。

(2) 企画委員会

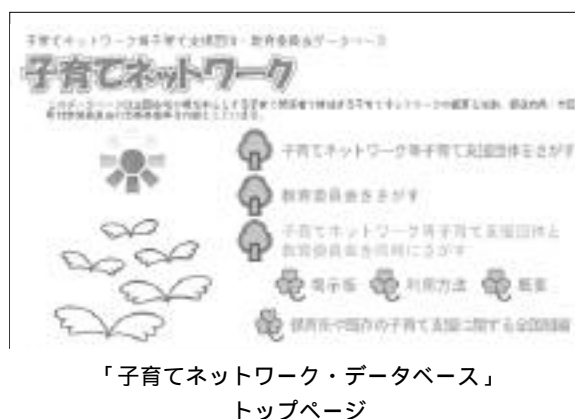
坂本 純子	新座子育てネットワーク代表	今どき子育てフォーラムSAITAMA代表
(座長) 汐見 稔幸	東京大学大学院教育学研究科・教育学部教授	
清水 正江	地域情報紙ゆめこびと代表	
山川 俊幸	富山県教育委員会生涯学習室家庭成人教育班社会教育主事	
結城 恵	群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター助教授、	国立女性教育会館客員研究員
中野 洋恵	国立女性教育委員会研究国際室長・主任研究員	
高橋 由紀	国立女性教育委員会研究国際室研究員	

- (3) 事務局 独立行政法人国立女性教育会館情報課

5. 研究経過

- (1) 子育てネットワーク等子育て支援団体・教育委員会への実態調査の調査項目の検討
調査対象とする「子育てネットワーク等子育て支援団体」の要件について検討した後、両者への調査票の調査項目や回答選択肢の調整を行なった。
- (2) 全体のデータベースの構成・企画、設計
調査票の設問をもとにデータベースの検索項目について検討し、ページ内に掲示板を置くこととした。
- (3) 子育てネットワーク等子育て支援団体・教育委員会への実態調査
団体調査は直送する方法と各教育委員会を通して配布・回収依頼する方法で行ない、教育委員会調査は全都道府県市区町村に対して行なった。
- (4) 実態調査のデータ入力
回収した調査票は、データベース形式に合わせて入力した。
- (5) データベースへのデータ取り込み、テスト、公開
実際のデータを取り込み、動作確認テストを行った後、「子育てネットワーク等子育て支援団体・教育委員会データベース」として会館のホームページ上で公開した。

- (6) 情報提供の在り方について検討
実態調査をもとに、子育てネットワーク等子育て支援団体についての情報提供の在り方についての今後の課題を検討した。



6. 今後の課題・展望

- (1) 全国各地の子育てネットワーク等の実態調査の結果を分析し、ユーザーからの意見をもとにさらに情報提供の在り方について検討し、データベースを改善・充実する。
- (2) 平成15年度以降の子育てネットワーク等子育て支援団体の概要と活動内容、教育委員会の支援・連携事業についてのデータの更新。
- (3) 子育て支援の様々な事業で、「子育てネットワーク等子育て支援団体・教育委員会データベース」の活用を図り、さらに社会の要請に応じた情報提供。
- (4) 掲示板の活性化と運用・管理。

(情報課専門職員 合田美恵子)

WinetCASSの整備充実

1. 趣 旨

WinetCASS（ウィネットキャス）は2000年3月から会館で提供しているインターネット上の女性関連情報のポータルサイトであり、3種類の機能別システムで構成されている。

（1）Winet-DB（ウィネットデータベース）

会館が作成している文献情報データベースと調査情報データベース。

（2）HP-CASS（ホームページキャス）

会館が予め選択した国内外のホームページの横断検索システム。

（3）女性情報CASS（女性情報キャス）

女性関連施設等がインターネットで公開している文献情報データベース及び（1）（2）を検索対象とした総合的横断検索システム。

以上のシステムを継続的に整備充実し、研究者、女性関連施設職員のみならず一般のユーザーのニーズにも迅速・的確に応えられるコンテンツ及びアクセス手段を提供していく。

2. Winet-DB

（1）文献情報データベース

図書資料、地方行政資料、和雑誌記事及び新聞記事について最新データを追加して提供している。今年度のデータ入力件数は、255,906件である。

<文献情報DBデータ件数>

図書資料	40,185	地方行政資料	18,100	新聞記事インデックス	154,732
和雑誌記事	42,889	合計	255,906		

（2）女性関連施設データベース

全国の女性関連施設の概要・実施事業に加え、今年度からは情報事業・相談事業についても最新データを収集して提供している。平成14年度分の全国調査を実施し、各施設職員が直接Web上で登録・更新できるシステムを活用しデータ登録・更新を完了した（Webでの登録を行った施設は133館）。3月現在の登録数は施設数544件、実施事業（情報・相談以外）数は昨年度の倍以上となる1617件（内平成14年度は956件）、情報事業243件、相談事業246件となった。概要については「施設種別」「設立目的」のデータを追加し、施設種別（女性／男女共同参画センター、働く婦人の家、農村婦人の家）毎の検索が可能となった。

（3）女性学・ジェンダー論関連科目データベース

全国の高等教育機関における女性学・ジェンダー論関連科目について最新データを収集し提供している。2002年度開講分の科目データについて全国調査を行ない結果をデー

データベース化した。各機関が直接Web上で登録・更新できるシステムを用意し、315大学・短大の学務担当者から直接1159科目のデータが入力された。3月現在531大学・短大の2028科目が登録されている。

(4) 女性と家族に関する統計データベース

我が国における女性及び家族の状況を的確に示す最新の統計をデータベース化して提供している。3月現在551件の統計表が登録されている。「ジェンダー統計に関する調査研究」の成果を反映させて、今後より使いやすいものに更新する予定である。（「女性及び家族に関する学習情報の調査研究」を参照）

(5) 子育てネットワーク等子育て支援団体・教育委員会データベース

文部科学省からの委託事業として行われた調査研究の結果をデータベース化したもので平成15年3月に公開された。3月現在、全国1500以上の子育てネットワーク等子育て支援団体の概要・活動内容・教育委員会との連携、及び1500以上の都道府県市区町村教育委員会の子育て支援団体に対する支援事業・連携についての情報提供を行なっている。（「子育てネットワーク等子育て支援団体についての情報提供の在り方に関する調査研究」を参照）

3. HP-CASS

検索対象として、女性関連施設のホームページ（一部、地方自治体の男女共同参画施策担当部局を含む）国内女性サイトを中心に25件のサイトを追加した。

< 情報収集範囲 > 合計 157件

女性関連施設 81件 / 女性学関連研究所 15件 / 国（省庁）の機関 4件 / 生涯学習センター 16件 / 国内女性関連サイト 18件 / 海外女性関連サイト 12件 / 国連関連 11件

4. 女性情報CASS

< 検索範囲 > 合計 11件

Winet-DB

文献情報データベース、女性関連科目施設データベース、女性学・ジェンダー論関連科目データベース、女性と家族に関する統計データベース

他の機関がWeb上で公開しているデータベース群

国立情報学研究所Webcat、女性と仕事の未来館ライブラリー、東京ウィメンズプラザ、神奈川県立かながわ女性センター、横浜女性フォーラム・フォーラムよこはま情報ライブラリ、大阪ドーンセンターライブラリー図書情報

HP-CASS

5. 女性情報シソーラスの組込み

平成14年度に女性関連施設データベース、女性学・ジェンダー論関連科目データベース、HP-CASS（同義語使用のみ）、女性情報CASS（同義語使用のみ）に女性情報シソーラスの組込みを行った。また、利用普及を図るため冊子体を刊行し、全国の女性センター、女性学・ジェンダー論関連科目を開講している大学の図書館等への配布を行った。3月2日にはこの調査研究の報告を兼ねた公開シンポジウムを行った。（「ヌエック公開シンポジウム」参照）

（情報課専門職員 合田美恵子）

女性関連施設等情報ネットワーク研究協議会

1. 趣 旨

男女共同参画学習における女性関連施設等の情報活用方法・情報機能の連携のあり方等について研究協議を行なうとともに、各施設・職員間のネットワーク形成の推進を図る。

2. 期 日 平成13年12月11日（水）～13日（金）

3. 参加者概況

女性情報等についてインターネットで情報発信を現在行なっているか、行なう予定のある女性関連施設等の情報担当者 62名(女性58名、男性 4 名) 32都道府県(うち7 指定都市)の52施設。

4. プログラムの概要

月 日	時 間	プ ロ グ ラ ム
12 / 11(水)	13 : 20 ~ 14 : 50	(1) 講義「情報リテラシー・サポート - 今求められる利用者のエンパ ワースメント支援」 講師 大阪女学院短期大学名誉教授 丸本 郁子
	15 : 10 ~ 17 : 30	(2) 説明・実習「WinetCASS、女性情報シソーラス、TICTの現状と予定」 説明 国立女性教育会館情報課
12 / 12(木)	9 : 30 ~ 12 : 00	(3) ワークショップ「女性情報レファレンス事例集」 コーディネーター大阪府立女性総合センター 企画推進グループサブコーディネーター 木下みゆき
	13 : 30 ~ 17 : 00	(4) 分科会 分科会 1「小規模女性関連施設の情報事業」 司会者 埼玉県越谷市男女共同参画支援センター所長 青木 玲子 事例発表者 もりおか女性センター女性施策推進員 藤原美妃子 分科会 2「行政・地域とのネットワーク」 司会者 静岡県静岡市女性会館主査 田中 克征 事例発表者 鳥取県男女共同参画センターアドバイザー 米田美和子 事例発表者 福井県生活学習館主事 榎 隆之 分科会 3「女性情報の発信 - HP・広報誌」 司会者 富山県民共生センター主事 牧野 圭子 事例発表者 あいち女性総合センター主査 松田 珠代
12 / 13(金)	9 : 30 ~ 11 : 45	(5) 全体会 分科会報告と全体協議 司会者 大阪府立女性総合センター企画推進グループ サブコーディネーター 木下みゆき 分科会 1 報告 もりおか女性センター女性施策推進員 藤原美妃子 分科会 2 報告 静岡県静岡市女性会館主査 田中 克征 分科会 3 報告 富山県民共生センター主事 牧野 圭子

5. プログラムの内容

(1) 講義「情報リテラシー・サポート - 今求められる利用者のエンパワースメント支援」
講 師 大阪女学院短期大学 丸本 郁子

利用者のエンパワーメント支援のため必要な情報リテラシー（情報活用能力）、情報検索の共通ツール作成の重要性、女性関連施設の情報センターでの利用者教育の事例の報告、情報担当者の役割が情報利用コンサルタントに変化していることなどについての講義が行われた。

（２）説明・実習「WinetCASS、女性情報シソーラス、TICTの現状と予定」

説 明 国立女性教育会館情報課

女性情報シソーラスが完成した報告を受け、WinetCASSやTICT等又エックのホームページから提供される情報サービスについて、マルチメディア研修室でデータベースの検索実習を行なった。

（３）ワークショップ「女性情報レファレンス事例集」

コーディネーター 大阪府立女性総合センター

木下みゆき

女性関連施設のレファレンスサービスに際しての留意点について説明があり、ケーススタディとしてTICTの女性情報レファレンス事例集へグループでコメントの書き込みを行った。次に、「パスファインダー」（特定トピックに関する自館所蔵の資料紹介や、自館ツールを利用した情報収集手順をまとめた1枚もの資料）を作成するグループワークを行なった。

（４）分科会

分科会１「小規模女性関連施設の情報事業」

司会者 埼玉県越谷市男女共同参画支援センター

青木 玲子

事例発表者 もりおか女性センター

藤原美妃子

参加者が自施設の情報事業の紹介と問題提起をした後、「少人数・低予算体制における情報事業と創案」と題して事例発表が行なわれ、小規模施設の創意工夫による情報事業の展開について協議が行なわれた。

分科会２「行政・地域とのネットワーク」

司会者 静岡県静岡市女性会館

田中 克征

事例発表者 鳥取県男女共同参画センター

米田美和子

福井県生活学習館

榎 隆之

参加者が分科会選定理由を述べた後、「鳥取県図書館ネットワーク」「福井県生涯学習情報ネットワークシステム」の事例発表が行なわれ、行政・地域・NPO・市民団体との連携を協議した。

分科会３「女性情報の発信 - HP・広報誌」

司会者 富山県民共生センター

牧野 圭子

事例発表者 あいち女性総合センター

松田 珠代

「ウィルあいちのHP・広報誌」の事例発表の後、広報誌の編集方法、読者との情報の双方向性、新しい情報発信方法、HPの更新方法についてグループ討議が行なわれた。

（５）全体会

司会者 大阪府立女性総合センター

木下みゆき

各分科会報告、質疑応答の後、全体協議のテーマについてグループ討議が行なわれ、情報事業のフィードバック、県と市町村レベルの施設の役割、NPOが運営する

施設について協議した。

6. 今後の展望・課題

- (1) 参加回数や経験年数の違いを考慮した研究協議会のねらい、性格の見直しが必要である。
- (2) 分科会形式は好評だったが、テーマや範囲の設定には更に検討を要する。
- (3) パソコンの数や接続など研修環境の整備が望まれる。
- (4) 参加者が加入するメーリングリストを更に有効活用し、企画の参考にする。
- (5) ネットワーク形成の推進を図るために、一層シソーラスやレファレンス事例集、各データベース等会館の情報事業を活用する必要がある。

7. 参加者の評価

研究協議会に対する参加者の満足度は、参加後の感想で「期待した以上」「ほぼ期待したとおり」の合計が61名98.3%と高く、「情報事業の企画・運営に関する知識・技術が高まった」「女性情報の収集・活用に関する情報交換をすることができた」「全国の女性関連施設の情報担当者とのネットワークができた」の感想として「そう思う」「少しそう思う」の合計がすべて59名95.1%以上と高い評価を得た。

(情報課専門職員 合田美恵子)

アンケート集計結果

アンケート回収率 62人 100%

次の各項目について、研究協議会後の感想にもっとも近いもの

情報事業の企画・運営に関する知識・技術が高まった

女性情報の収集・活用に関する情報交換をすることができた

	人数	%	無回答を除く%
そう思う	32	51.6	52.4
すこしそう思う	27	43.6	44.3
そう思わない	2	3.2	3.3
無回答	1	1.6	-
合計	62	100.0	100.0

	人数	%	無回答を除く%
そう思う	45	72.6	73.8
すこしそう思う	16	25.8	26.2
そう思わない	0	-	-
無回答	1	1.6	-
合計	62	100.0	100.0

全国の女性関連施設職員の情報担当者とのネットワークができた

国立女性教育会館の情報サービスや、全国の女性関連施設のネットワーク形成について会館の役割がよく分かった

	人数	%	無回答を除く%
そう思う	45	72.6	75.0
すこしそう思う	14	22.6	22.3
そう思わない	1	1.6	1.7
無回答	2	3.2	-
合計	62	100.0	100.0

	人数	%	無回答を除く%
そう思う	45	72.6	76.3
すこしそう思う	14	22.6	23.7
そう思わない	0	-	-
無回答	3	4.8	-
合計	62	100.0	100.0

参加した全体のご感想はいかがでしたか

	人数	%	無回答を除く%
期待した以上だった	19	30.7	31.1
ほぼ期待していたとおりであった	42	67.7	68.9
全く期待はずれだった	0	-	-
無回答	1	1.6	-
合計	62	100.0	100.0

女性関連施設職員のための ICT習得サポートプロジェクト

1. 趣 旨

国の IT 普及政策に伴い、女性関連施設においてもコンピュータ、ネットワーク環境の整備が進みつつあり、女性関連施設職員にはそれらを使いこなすための知識、技術の習得はもとより、それらを活用した事業の展開が求められている。

近年、地方自治体による初歩のコンピュータやネットワーク技術の学習機会は多く見られるが、女性関連施設職員の業務に直結した具体的な知識や多様なレベルの技術の習得及び学習成果の活用等を目的とした学習機会はほとんどない。

そこで、独立行政法人国立女性教育会館では女性関連施設職員を対象としたネットワーク支援事業の一環として、女性関連情報の視点にたった ICT（情報コミュニケーション技術）習得サポートプロジェクトを実施する。

2. 実施期間

平成12年度～

3. 対 象

女性関連施設職員

4. プロジェクトの目的

女性情報の視点に立った ICT（情報コミュニケーション技術）の習得を目的とした学習システム「TICT」（ティクト）をWeb上に構築し、教材及び情報・交流の場を提供することにより、技術習得と情報ネットワーク形成の推進をサポートする。

5. プロジェクト計画

平成12年度（準備期間）

- ・ TICT（Training of ICT for staff at women's facilities）（女性関連施設職員のための情報コミュニケーション技術習得サポートシステム）の設計及びコンテンツの検討

平成13年度

- ・ TICTのWeb公開及びコンテンツの充実
- ・ TICT若葉パック（デモンストレーションCD-ROM、プリント、調査票等）の配布

平成14年度

- ・ 女性関連職員の要望をふまえ、TICTのコンテンツの充実を必要に応じて図るとともに、TICTをweb上で発信することによって地域での学習計画支援等の多様なサポートプロジェクトを実施する

6. 実施方法

(1) プロジェクトチームの設置

本プロジェクトには女性関連施設職員・外部専門家によるプロジェクトチームを置き、運営方針について検討を行う。

(2) プロジェクトチームメンバー（平成14年度）

アドバイザー 十文字学園女子大学助教授・国立女性教育会館客員研究員

安達 一寿

越谷市男女共同参画支援センター所長

青木 玲子

大阪府立女性総合センター（ドーンセンター）企画推進グループ

サブコーディネーター

木下みゆき

事務局

国立女性教育会館情報課

＊その他、必要に応じてアドバイザーを追加することができる

(3) 女性情報レファレンス事例集サポートメンバー（平成14年度より）

福島県男女共生センター（女と男の未来館）調査研究室主査 石川 良光

（財）横浜市女性協会（フォーラムよこはま）情報課職員 近江 美保

とよなか男女共同参画推進センター（すてっぷ）情報担当主任 大林 弘子

東京ウィメンズプラザ情報係専門員 菅谷 頼子

兵庫県立男女共同参画センター（イーブン）情報アドバイザー 須田 和

名古屋市女性会館（イーブネット）情報交流係 辻本 忍

7. プロジェクトの経過

(1) 新規教材の公開

平成14年4月に、教材「かんたんホームページ作成法」「実用サンプルを使ったホームページ作成法」の内容を更新し、よく使われる機能ヒントに各教材に共通して使われる技術として「『Lhasa』の使い方」を追加した。また6月には教材「ポスター、パンフレットを作る」を、7月にはよく使われる機能ヒントに「写真や図の取り込み方」を、平成15年3月にはEXCELの初歩教材として「かんたんな表とグラフをつくる」の日本語版と英語版を加えた。

(2) 女性情報リンク集の整備

平成14年4月に、女性情報リンク集に「著作権関連」を追加した。

(3) 女性情報レファレンス事例集の充実

平成14年5月に、「女性情報レファレンス事例集」を正式公開した。レファレンス事例集サポートメンバーにより9月に新規事例24件、12月に11件、平成15年3月に13件を追加し、合計58件の事例を公開中である。

(4) 基本的知識と技術に関する教材の公開

平成14年12月に、パソコン基本操作ヒントに、「コンピュータで情報を活用しよう」「コンピュータを使ってみよう」「マウス・キーボード・日本語入力の使い方」を追加し、教材を使う以前の基本的知識と技術についての教材を提供した。

(5) 他事業との関連

女性関連施設職員セミナーの分科会、国際女性情報処理研修、女性関連施設等情報ネットワーク研究協議会のワークショップなどでサイトの内容が活用された。

8 . 今後の課題・展望

(1) 女性情報レファレンス事例集の改良

事例に含まれる語での検索はできるが、数が増加するにしたがって、内容の整理分類が重要になってきている。質問内容をカテゴリー分けするなどの改良が望まれる。

(2) 若苗広場の活性化

若苗広場への書込みを促すような広報が求められる。

(3) 新規教材の開発

EXCEL やPowerPointなどWORD以外のソフトを使った教材の開発への要望が高まっている。

(4) 英語版の整備

国際女性情報処理研修でも活用できるような教材を整備するなどの効率化を図る必要がある。

(情報課専門職員 合田美恵子)

遠隔情報発信事業

1. 趣 旨

独立行政法人国立女性教育会館が実施する学習プログラムを、より多くの人々へ発信し普及を図るために、インターネット及び衛星通信システムによる各種プログラム発信事業（以下「遠隔情報発信事業」という。）を実施しています。（13年度から実施）

2. 発信プログラム

（1）エル・ネットによる放映（全国の公民館等，受信設備を保有する施設で視聴可能）

6月29日に実施した「子育てサークル交流支援研究協議会」（47ページ参照）から「行政と手をつなごう」の分科会の意見交換の様子を，文部科学省が行っている教育衛星通信ネットワーク（エル・ネット）により同時双方向中継し全国に発信しました。

この発信内容を，同時に行われた「今どきの子育て支援を考える」の分科会の意見交換と併せて60分間に編集し全国に発信しました。

発信日 平成14年9月10日、20日、26日

平成15年2月27日、28日、3月4日、5日

2月14日に実施した公開講演会「今、生命（いのち）を考える」（30ページ参照）から講演「女性の健康と権利」、講演「今、生命を考える」の内容を60分に編集し全国に発信しました。

発信日 平成15年2月27日、28日、3月4日、5日

（2）インターネット24時間ビデオ・オン・デマンド方式による配信

10月31日から上記 の内容を9プログラムに分割してホームページから配信しています。

なお、ビデオ・オン・デマンドでは、このプログラムの外に昨年作成した「男女共同参画 - 初めの一步を家庭から - 」及び会館の紹介プログラム「ヌエックへ行こう」の日本語版・英語版を発信しています。

3. 検討委員会

（1）事業の評価、今後の課題

提供側の経験により、プログラムを理解しやすいものにできるようになった。双方向通信による参加型のプログラムとしたのは評価できる。

今後は経費削減とコンテンツの内容の選択が課題である。またコンテンツ作成後の広報活動の推進も課題となっている。個人で接続できる環境が整ってきており魅力を持ったコンテンツ内容が求められている。

（2）外部委員

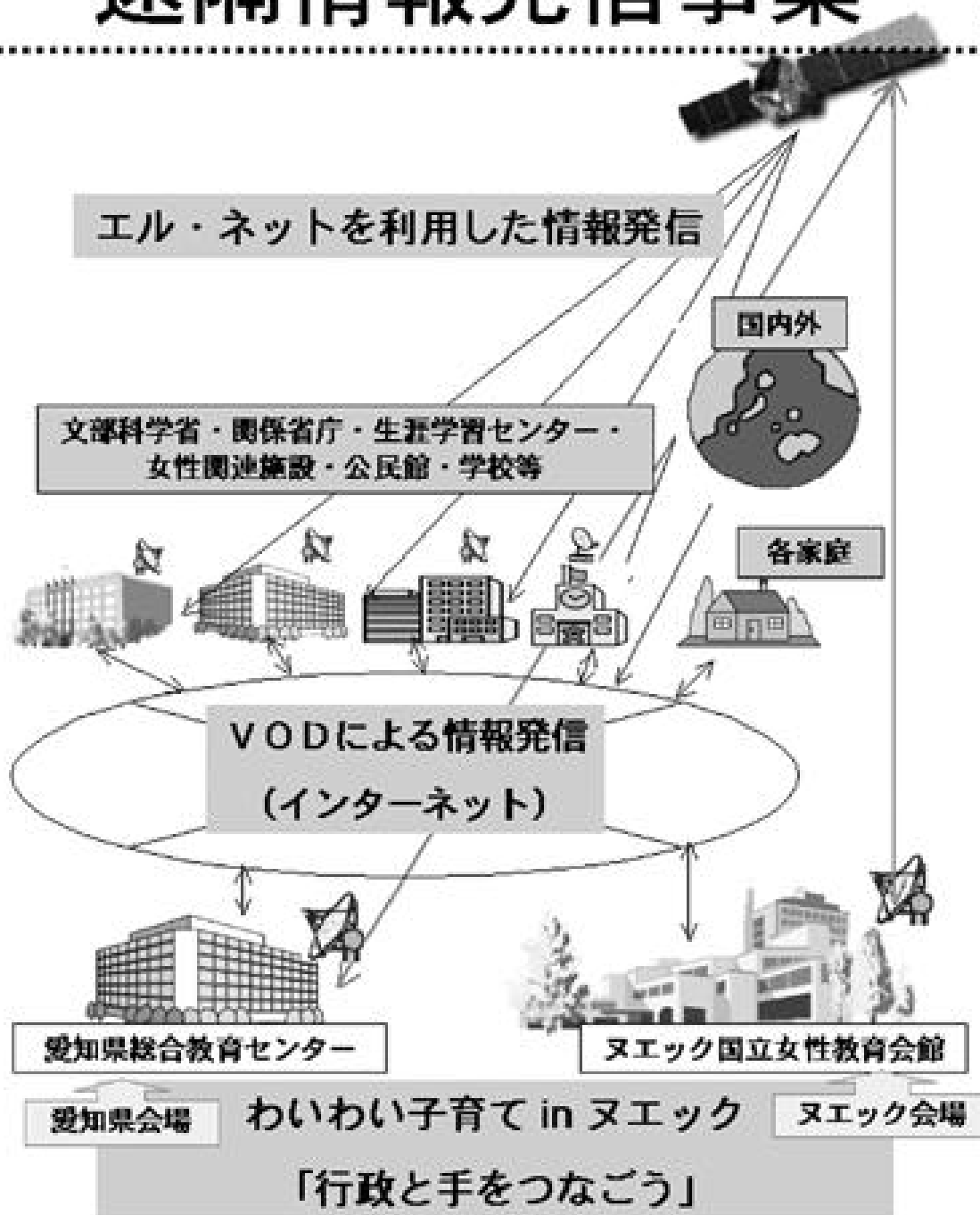
十文字学園女子大学助教授

安達 一寿

国立磐梯青年の家庶務課長
愛知県教育委員会生涯学習課主査
メディア教育開発センター教授
フォーラムよこはま調整課長

井上 透
坂田 正俊
永岡 慶三
納米恵美子
(総務課企画係長 関 宗興)

遠隔情報発信事業



社会教育実習生等受入事業

1. 趣 旨

国内の大学その他の教育機関に在籍する学生等で、社会教育実習の単位を取得するため、主催事業の運営及び会館の利用者の受入れに関する業務の体験実習を通じて、女性教育の現状及び女性教育施設の役割等について学習することを目的とする実習生を受入れている。

2. 実習内容

女性教育の現状と国立女性教育会館の役割に関する講義
 会館の事業運営についての講義
 主催事業の実施に関する業務
 受入れに関する業務
 情報に関する講義と業務
 その他



(理事長を囲んでの懇談)

3. 平成14年度の概要

本年度は、6大学17名(女性:13名、男性:4名)の申請を受け、計14名の受入れを行った。本年度から社会教育主事講習実施大学等連絡協議会ブロック当番校を通じて公募を行い、熊本大学からは初めての受入れをした。実習は各主催事業に併せた連続した8日間の日程で行われた。

各主催事業ごとに指導担当者や研究員等からきめ細かい指導が行われ、実習生はこれらの研修を通して会館の活動に深い理解を得ることができたと感想を述べている。

4. 申請大学及び受入事業

受入大学	群馬大学 教育学部		千葉大学 教育学部		上智大学 文学部		大正大学 人間学部		城西国際大 学大学院		熊本大学 文学部		計
	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	
教師のための男女平等教育 セミナー	2								1				3
女性学・ジェンダー研究フォー ラム		1	1		1								3
女性情報国際フォーラム							1	1			2		4
ヌエック2002・全国交流フェ スティバル							1	2					3
女性のエンパワーメント支 援セミナー									1				1
計	3		1		1		5		2		2		14

(13年度: 6大学18名受入れ)

5. 今後の課題・展望

本年度は、大学等からの要望を尊重する日程で受入れたため、受入れ回によっては実習生が1大学又は1名となる場合があった。今後は社会教育実習生同士が広く交流を図ることもできるように、大学等からの要望を尊重しつつも可能な限り、複数の大学からの受入や男女構成についても配慮したい。

(総務課総務係長 藤田 英子)

ヌエックにおけるボランティアの活動

国立女性教育会館では、利用者の多様な生涯学習を促進するために、ボランティア活動を希望する個人及びグループに協力を依頼するとともに、ボランティア活動の促進に努めている。

1. 概 要

ヌエックは昭和52年の設立以来、女性のもつ能力・技術を会館の事業運営に生かすことにより、会館の機能を活用した多様な生涯学習を促進し、また女性の能力開発、社会参加につながる活動として、ヌエックでのボランティア活動を検討してきた。当初は、地元の女性や関東近県在住の婦人教育担当経験者、婦人教育指導員への呼びかけから始め、受入側の条件整備、利用者からの要望を検討するための半年間の試行期間を経て、昭和53年8月、登録による個人・グループの受入が開始された。

登録・活動を開始して以来24年間、様々な形でボランティア活動が続けられ、平成15年3月現在の登録者数は、個人登録61名(男性8名) 団体登録6グループ80名(男性2名)合計141名(男性10名)である。ボランティアは、国内外からの年間約10万人に及ぶ会館利用者に対し、事業運営への協力、ヌエック事業の広報、生涯学習活動の推進等に大きな役割を果たしてきた。

2. 活動の目的

ボランティア活動は、利用者の多種多様な生涯学習を支援し、かつボランティア自身の自己開発、自己実現を通して、女性の社会参加を促進することを目的とし、次の4点を活動の基本としている。

- (1) 個人の有意性、自発性に基づく活動であること。
- (2) ヌエックの設置目的に添った教育・学習に関する活動であること。
- (3) 自己の能力開発、社会参加につながる活動であること。
- (4) 無償制を原則とする活動であること。

3. 活動内容

ボランティアに協力を依頼する活動は、ボランティアからのアイディア・申し出及び利用者からの要望をもとに会館が決定している。その活動は、多岐にわたっており、大別して「主催事業・受け入れ事業」「情報」「広報」「環境整備」の4分野に分けることができる。なお平成14年4月1日から平成15年3月31日までの延べ活動数は、総計907回(2801時間)であり、うち、個人の活動数897回(2751時間) グループの活動数10回(50時間)となっている。

- (1) 主催事業・受け入れ事業に関する活動(計489回、うち個人479回、グループ10回)
 - ・ 主催事業運営の協力(受付、会場整理、会場案内、マイク回し、会場係、記録写真、幼児保育等)
 - ・ 国際交流関係(外国人研修生のホームビジットの受け入れ、日本の伝統文化紹介等)
 - ・ 文化活動の実技指導(茶道、華道、伝統芸能、七宝焼、絵手紙、陶芸、書道等)
 - ・ 会館の施設見学案内

- ・備品用具等の点検・整備（茶室備品、傘、自転車等）
- ・交流・話し合い（会館ボランティア活動の紹介・会館利用者との交流等）



主催事業の幼児保育



館内の施設見学案内

（２）情報に関する活動（計３８７回、うち個人３８７回、グループ０回）

- ・新聞・パンフレット類の整理（新聞の受入れ、受入れ済み会報類のファイル、パンフレットの整理・ファイル等）
- ・新聞・雑誌・クリッピングの作成と整理（新聞クリッピングの記事整理、英字新聞のクリッピング作成・分類・ファイル等）
- ・テーマ別文献の常設展示（テーマ図書資料のエントランスホールへの展示）
- ・図書の整理（ラベル・貸出し期限表の貼付、図書の配架、書架点検等）
- ・広報活動（「女性教育情報センターだより」「あんな本こんな本」の作成・配布）
- ・海外女性情報誌翻訳・整理

（３）広報に関する活動（計２５回、うち個人２５回、グループ０回）

- ・「ヌエックニュース」の発送、記録写真撮影等

（４）環境整備に関する活動（計６回、うち個人６回、グループ０回）

- ・館内の野草等の手入れ、ロビー等の生花、雛飾り等



テーマ別文献の常設展示



雛飾りの展示

また、「ヌエック2002・全国交流フェスティバル」においては、ワーキング・グループ（９名）を組織してフェスティバルの企画運営に協力し、そのうち２名は実行委員として活躍した。さらに、同フェスティバルにおいて、ボランティアによる自由企画プログラム（茶房、華道）を実施し、会館の事業運営に積極的に参画・協力した。

その他、会館利用者に学習機会を提供するために、ボランティアを講師として紹介するチラシ

「ヌエックボランティアの活動紹介」の作成を自主的に行った。

4. 連絡会議

年4回(4・7・10・1月)連絡会議を開催し、ボランティア活動を依頼する事業の主旨及び協力を依頼する内容の説明、個人・グループの活動状況報告等の連絡調整を図った。



連絡会議

5. 研 修

ボランティア活動の充実・発展を図るため、今年度は「国立女性教育会館を知ろう」のテーマのもと、年4回の研修を行った。企画・運営に当たって、ボランティア・会館職員で構成する委員会を組織した。



研修の企画運営委員会



ホームページの体験研修

【第1回】日時：4月24日(水)14:30～15:30 参加者：45名

「独立行政法人とは」

講師：国立女性教育会館理事

廣瀬 育生

国立女性教育会館総務係長

藤田 英子

「独立行政法人」の意味や独立行政法人化後の会館の変化について、法律、予算、評価等の観点から説明した。その後、総務課の仕事について説明があった。

【第2回】日時：7月6日(土)14:30～15:30 参加者：36名

「主催事業におけるボランティア活動」

講師：国立女性教育会館事業課専門職員

小林千枝子

国立女性教育会館事業課係員

原口 史之

始めに、室内レクリエーションを行い、ボランティア同士、ボランティアと職員のコミュニケーションを図った。その後、主催事業におけるボランティア活動の目的と活動内容、留意点について説明があった。

【第3回】日時：10月1日(火)14:30～15:30 参加者：28名

「女性教育情報センターの活用とヌエックホームページの体験」

講師：国立女性教育会館情報交流課専門職員

合田美恵子

女性教育情報センターの概要説明があった後に、マルチメディア研修室でヌエックのホームページの開き方を学習し、検索体験を行った。

【第4回】ヌエックボランティア活動研究会(1泊2日の研修) 参加者：34名

(1)趣 旨

ヌエックでのボランティア活動の充実・発展を図るため、新たなステップとなる実践的研修を行う。

(2) 主 題

学び合い、高め合うボランティア仲間を作る

- ヌエックボランティア同士のネットワークを広げよう -

(3) 期 日

平成14年11月26日(火)～11月27日(水)

月 日	時 間	プ ロ グ ラ ム
11 / 26(火)	10 : 30 ~ 10 : 45	開会 主催者あいさつ 国立女性教育会館理事長 大野 曜 日程説明 ヌエックボランティア 山田 昭一
	10 : 45 ~ 11 : 15	自主活動グループの紹介 (担当)ヌエックボランティア 高市美佐子
	11 : 15 ~ 12 : 00	「女性学・ジェンダー研究」の学習 - ボランティアとして、知っていたい基礎知識 - 講師 国立女性教育会館研究国際室研究員 高橋 由紀 (担当)ヌエックボランティア 横山 潔
	13 : 30 ~ 15 : 45	グループ討議「ヌエックボランティアとは」 (担当)ヌエックボランティア 寺山サキ子
	16 : 00 ~ 17 : 00	全体会 (担当)ヌエックボランティア 寺山サキ子
	18 : 00 ~ 19 : 15	情報交換会 (司会)ヌエックボランティア 高橋 優子 (レクレーション)ヌエックボランティア 田中 秀子
	19 : 30 ~ 21 : 30	自由交流
11 / 27(水)	9 : 30 ~ 12 : 00	ワークショップ「コミュニケーション能力を高める」 講師 (株)ウェコプ人材マネジメント 川合 雅子 (担当)ヌエックボランティア 高市美佐子 (担当)ヌエックボランティア 山田 昭一
	12 : 00 ~ 12 : 05	閉会 あいさつ ヌエックボランティア 横山 潔

(5) プログラムの内容

自主活動グループの紹介

ボランティア相互の学習・連絡及び親睦のために作った自主活動グループ「ヌビック」
「なごみ」、「グループあい」、「文化ネットワーク」の代表者が、活動目的、活動内容について説明した。

「女性学・ジェンダー研究」の学習 - ボランティアとして、知っていたい基礎知識 -

講 師 国立女性教育会館研究国際室研究員 高橋 由紀

ジェンダー問題を考える視点として、「ドメスティック・バイオレンス」を例にあげ、
従来の既成事実を見直し、被害者の立場に立って考えること 理解を深めるために
「なぜ」と自分自身に問うことが必要であることを説明した。また、「男女の関係性を考える用語(セックス/ジェンダー、エンパワーメント等)に、なぜ横文字が多いのか」を
参加者に問いかけながら、それぞれの用語の説明と最近のジェンダー研究の動向を語った。
また、ジェンダー問題は、「本当に困っている人の視点で見た時に気づくものである。」
と示唆した。

グループ討議・全体会「ヌエックボランティアとは」

はじめに、全体で「グループ討議の趣旨や方法」を共通理解した後に、登録年数により3つ

のグループ(会館職員も参加)に分かれて、「ヌエックボランティアとは」のテーマのもとに討議をした。全体会では、始めにグループ討議の報告を行い、「ヌエックでの活動は、他のボランティア活動と異なり、自主性、自発性が求められる。」「自己中心的な活動でなく、仲間への思いやりを持ってボランティアをしていきたい。」「利用者のよりよい学習を支援していく視点が必要である。よりよいボランティア活動には、学習は欠かせない。」等が出された。その後、ボランティアルームの使い方について問題提起があり、誰でも気軽に使えて、利用しやすいよう、全員で管理していくことが確認された。



グループ討議



全体会

ワークショップ「コミュニケーション能力を高める」

講師 (株)ウェコブ人材マネジメント代表

川合 雅子



ワークショップ



活動説明会

多様なワークショップ(2人組・4人組で自己紹介する、ジェスチャーでメッセージを伝える、自分の感情に名前をつける等)を通して、人間は自分の考えていることを身体全体で表現していること、立ち居振舞いなど「表出メッセージ」に本音が隠されていることなどに気づいた。また、心地よいコミュニケーションには、ラポール(相互理解と相互信頼に満ちた関係)を保つこと、そのためには、最初にペーシング(相手の調子に合わせる。)することの必要性をあげた。また、「自分を好きでないと周りにも肯定的なストローク(あらゆる種類のふれあい)を与えていくことはできないこと」「心の中の否定的なストロークの解消には、人間的なふれあいを求め、肯定的なストロークをたくさんもらうこと」「無条件の肯定的なストローク(「誰が何と言ったってあなたを信じますよ。」等)を与えられた時、人間は大きく成長すること」が説明された。

6. ボランティアの受け入れ

ヌエックでは、6月、11月の2回、ボランティアの活動説明会(会館の設置目的・事業内容についての説明、ボランティア活動の内容、実際にボランティア活動をしている方々の体験発表・感想等)を行い、新しいボランティアを募集している。

ボランティアとして活動を希望する者は仮登録者として受け入れ、約3か月の仮登録期間中に、実際にボランティアの体験研修を行った。研修内容は、ヌエックの施設見学、基礎的な視聴覚機器等の取扱い方、英字新聞クリッピング、ヌエックニュースの発送、主催事業への協力等であり、その中から参加者が選択して研修している。

7. 自主活動グループ

ボランティアは各自の活動以外に独自に学習グループを組織し、会館における活動に必要な知識や能力を高めるための学習を自主的に進めている。平成14年度は、4グループが活動している。

(1) ヌビック

平成11年に発足し、ボランティアの活動分野を越えたネットワークを作り、ボランティア活動の活性化のための学習、親睦を図ることを目的として作られたグループ(33名)である。平成14年度は、平成14年度は、会報誌「ヌビックだより」の発行、学習(女性問題、社会教育施設のボランティア活動のあり方、パソコン研修等)、新年会の実施を中心として活動した。

(2) なごみグループ

昭和54年に発足し、主に主催事業を中心に活動するボランティアの学習、親睦、ネットワーク図るために、結成されたグループである。主催事業の参加者へのヌエック利用の便を図るための情報提供を目的とした「ようこそヌエック」の作成等の自主的な活動を行っている。

(3) グループ あい

昭和55年に「J・T・Vグループ」として発足し、平成13年に「グループ あい」と改称する。情報に関するボランティア活動を行う者で結成されたグループであり、女性教育情報センターで図書の整理、新聞クリッピングの分類・整理、各地の女性会館・女性センターから送られてくる広報誌の整理、情報センターのPR等を行っている。また、新着図書を紹介する『情報センターだより』や「グループ あい」のメンバーが薦める図書を紹介する「あんな本こんな本」を発行している。本年度は、ヌビックとともに国立国会図書館への館外研修を実施した。

(4) 文化ネットワーク

平成 8 年に発足し、主に茶道、華道、七宝焼き等の文化活動をボランティアとして行う個人及びグループのメンバーで結成された。

8 . その他

地域におけるボランティア活動研修のプログラムの一環として、本年度は地元嵐山町教育委員会生涯学習課の担当者からのヌエックボランティアとの交流希望があり、嵐山町の子もボランティアと交流をした。また、平成 9 年度を初年度として5年ごとにボランティア感謝状の交付を行っているが、平成14年度は12名の個人ボランティアとグループボランティア1団体に感謝状を交付した。

9 . まとめ

ヌエックボランティアのきめ細やかな利用者への対応は、会館のサービスの向上に寄与しており、利用者からも高い評価を得ている。また、会館利用者の多様な生涯学習を支援するとともに、ボランティア自身も活動を通して自己実現を図っている。また、連絡会議、研修等の機会を通じて、ボランティア同士、ボランティアと職員のコミュニケーションを図った。

10 . 課 題

国立女性教育会館におけるボランティア活動も25年を過ぎ、登録方法、活動内容、研修等を大きく見直す時期にきていると思われる。社会教育施設ボランティアとして、これからのあり方や方向性をボランティアとともに探り、新しいシステムを作っていくことが課題である。

(事業課専門職員 五味 厚子)

平成14年度又エック(国立女性教育会館)

主催事業実施報告書

平成15年4月

編集・発行

独立行政法人 国立女性教育会館

〒355 0292 埼玉県比企郡嵐山町大字菅谷728番地
TEL 0493 62 6711 FAX 0493 62 6720

製本・印刷

株式会社 玄工房



本誌は再生紙を使用しています。